

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2009

# 多賀城跡



宮城県多賀城跡調査研究所



## 序 文

当研究所は、特別史跡多賀城跡の発掘調査事業と環境整備事業を連携させながら、継続的に実施している。発掘調査事業では、多賀城の歴史的意義を解明し、環境整備事業では、発掘調査成果に基づく史跡公園の整備、活用を目指している。現在は、多賀城跡の正面にあたる政庁－外郭南門間の整備を優先的に進めており、平成16年度に策定した整備計画（第8次5ヵ年計画）に基づく政庁跡の整備後には、城前・外郭南門地区の本格的な整備に取りかかる予定である。

一方、多賀城跡の発掘調査事業第9次5ヵ年計画は、今年度より多賀城跡の外郭線についての発掘調査に着手した。今年度の第81次調査では、鴻ノ池、政庁南西隅の2箇所にて調査を実施した。鴻ノ池地区の調査では、打ち込み杭としがらみによる護岸施設と、区画施設の基礎施設とみられる筏地業を発見した。これにより、この地点が「鴻ノ池」北岸の水辺であったことを確認するとともに、その下層に東西に延びる区画施設が存在したことを確認し、創建期多賀城の外郭線について新たな知見を得ることができた。また、政庁南西の調査では、石敷遺構を新たに確認するとともに、その下層では政庁造成に関わるとみられる材木堀の西端を確認し、政庁域の区画施設の変遷について新たな資料を得ることができた。これらの調査成果は、いずれも今後の環境整備を進める上で重要な成果であり、整備事業に生かしていきたい。

本書の刊行にあたり、日頃からご指導をいただいている多賀城跡調査研究委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会の関係者、調査を支援してくださった他の多くの皆様方に所員一同心から感謝申し上げる次第である。

平成22年3月

宮城県多賀城跡調査研究所

所 長 後藤 秀一

# 目 次

I. 調査研究事業の計画	1
II. 第 81 次調査	2
1. 調査の目的と経過	2
2. 調査の成果	4
3. 総括	66
III. 付章	75
1. 関連研究・普及活動	75
2. 組織と職員	78
3. 沿革と実績	79

## 調査要項

調査主体	宮城県教育委員会（教育長 小林 伸一）
調査担当	宮城県多賀城跡調査研究所（所長 後藤 秀一）
調査員	後藤秀一・古川一明・三好秀樹・吉野 武・関口重樹・廣谷和也
調査期間	平成 21 年 5 月 12 日～平成 21 年 11 月 19 日
調査面積	約 900㎡（鴻池地区：約 360㎡ 政庁南西地区：約 540㎡）
調査参加者	高橋 磨・佐藤一郎・鈴木 昇・相沢秀太郎 伊藤とし子・佐藤寿子・菅原みつ枝・蜂谷みよの（多賀城跡調査研究所臨時職員） 五十嵐愛・小原一成（東北大学大学院） 秋山綾子・阿部友香・岡本拓也・川口亮・工藤麻衣・藤咲智也・船渡耕己（東北大学）
整理参加者	佐久間順子・木村歩・高橋里枝・柴田とみ子・只木一美（多賀城跡調査研究所臨時職員）

## 例 言

1. 本書は平成 21 年度に実施した多賀城跡第 81 次調査成果と、多賀城跡の環境整備、関連研究事業、普及活動の概要を収録したものである。
2. 当研究所の発掘調査と環境整備事業は多賀城跡調査研究委員会の指導と承認のもとに行っている。
3. 測量原点は政庁正殿跡身舎南側柱列中央に埋標し、この原点と政庁南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線とする座標軸を定めている。南北の基準線は真北に対しておよそ 1° 04' 東に偏している。  
政庁正殿と政庁南門の測量原点の平面直角座標値は、昭和 61 年の改測・改算結果により以下のとおりである。

政庁正殿	日本測地系（第 10 系）	X 座標：-188276.1240 m、Y 座標：13857.2850 m、標高：33.268 m
	世界測地系	X 座標：-187967.2834 m、Y 座標：13557.1698 m
政庁南門	日本測地系（第 10 系）	X 座標：-188654.5100 m、Y 座標：13850.8870 m
	世界測地系	X 座標：-188345.6730 m、Y 座標：13550.7795 m

日本測地系は旧日本測地系（T.D.）を、世界測地系は日本測地系 2000（J.G.D.2000）を意味する。
4. 瓦の分類基準は『多賀城跡 政庁跡 図録編』、『多賀城跡 政庁跡 本文編』による。
5. 土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖 11 版』日本色研事業株式会社（1996 年）にもとづいた。
6. 貿易陶磁器・中世陶器の産地・年代同定にあたっては岩手県平泉町八重樫忠郎氏より御教示をいただいた。
7. 本調査で得られた資料は、宮城県教育委員会で保管している。
8. 本調査の成果の一部は、『現地説明会資料』、『平成 21 年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』、『第 36 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』で紹介しているが、本書の内容が全てに優先する。
9. 本書は、所員で討議と検討を行い、I・II を古川、三好、III を古川が分担して執筆し、古川、三好が編集した。

【表紙題字は大塚惣一郎氏の揮毫による。表紙写真：鴻ノ池地区の遺構を南より撮影】

## I. 調査研究事業の計画

当研究所では、多賀城跡の発掘調査、多賀城跡の環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査を計画的・継続的に実施している。ここでは、多賀城跡の発掘調査計画の概略について述べ、多賀城跡の環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査については、付章にその概要を収録した。

多賀城跡の発掘調査は、昭和44年の研究所設立以来、多賀城跡調査研究指導委員会の指導のもとに、5ヵ年ごとの計画を立案し実施している。今年度は多賀城跡発掘調査第9次5ヵ年計画（第1表）の初年度に当たり、鴻ノ池地区、政庁南西地区の2ヵ所を対象に第81次調査を実施した。なお、平成17年度からは多賀城跡調査研究指導委員会に代わり、多賀城跡調査研究委員会が組織され、当研究所の各事業について審議している。

年 度	次 数	発掘調査対象地区	調査面積	調査の目的
平成21年	81次	外郭南辺（坂下地区）	900㎡	外郭南辺の検討
平成22年	82次	外郭東辺（大畑地区）	1,000㎡	外郭東辺の検討
平成23年	83次	外郭南辺（五万崎地区）	1,000㎡	外郭南辺の検討
平成24年	84次	外郭北辺（丸山地区）	1,000㎡	外郭北辺の検討
平成25年	85次	外郭北辺（六月坂地区）	1,000㎡	外郭北辺の検討

第9次5ヵ年計画（平成21年度は実績）

氏 名		職	専門分野
委員長	須藤 隆	東北大学名誉教授	考古学
副委員長	今泉 隆雄	東北大学大学院教授	古代史学
委 員	飯淵 康一	東北大学大学院教授	建築史学
委 員	鈴木 三男	東北大学大学院教授	植 物 学
委 員	佐藤 信	東京大学大学院教授	古代史学
委 員	田辺 征夫	独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所長	考 古 学
委 員	近江 隆	東北大学名誉教授	都市工学
委 員	平川 南	大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館長	古代史学
委 員	進士五十八	東京農業大学教授	造 園 学

多賀城跡調査研究委員会委員名簿



## Ⅱ. 第 81 次調査

### 1. 調査の目的と経過

#### (1) 調査の目的

平成 21 年度は多賀城跡発掘調査第 9 次 5 カ年計画の初年度にあたる。本計画は外郭施設の本報告書作成に向けたデータ収集を目的としており、今年度は鴻ノ池地区の調査を実施した。また、昨年度に調査した政庁南面地区の成果を補足する目的で、政庁南西地区の調査を行っている（図版 1・2）。

鴻ノ池地区の調査目的は、城内南部（外郭南門の北 120 m）の政庁 - 外郭南門間道路上で検出されている門の東側に並ぶ区画施設について門西側での状況を把握し、外郭南辺の移動の可能性を確かめることである。また、低湿地の調査で得られる良好な木材や土壌試料の放射性炭素年代測定（ $^{14}\text{C}$ -AMS）・樹種同定、花粉分析を行い、その分析結果を通して当時の環境を復元することも目的の一つである。

政庁南西地区の調査目的は、政庁第 I 期の整地層（整地 A）の南側を東西に延びる SA1601・1602 堀跡（第 50・77・78・80 次調査）の西側の状況を捉えて、その性格を解明することである。

#### (2) 調査の経過

調査は鴻ノ池地区、政庁南西地区の順に行った。

鴻ノ池地区では 5 月 12 日に調査区を設定し、5 月 14 日から重機で表土を除去して調査を開始した。目的とする区画施設が存在する場合、想定される東からの延びを延長すると鴻ノ池地区の北端付近を通ること、昨年度に実施したボーリング調査で最下層の遺構面までの深さが 4 m 前後あることを確認していたことから、調査区を可能な限り北側に寄せて広く設定し、1 m 掘り下げる毎に幅 1 ~ 1.5 m のテラスを設け、階段状に掘り下げた。途中、灰白色火山灰層の上部で土壌や溝、遺物を多量に含む堆積層を検出したが、更に掘り下げる部分のみを精査し、写真・図面で記録した。他の部分については確認状況を記録している。その後、北部を中心に掘り下げを進め、盛土遺構とその土留め施設、杭列、土壌などを検出し、必要に応じて精査・記録した。最終的に盛土遺構を断ち割って、地表下 4.5m

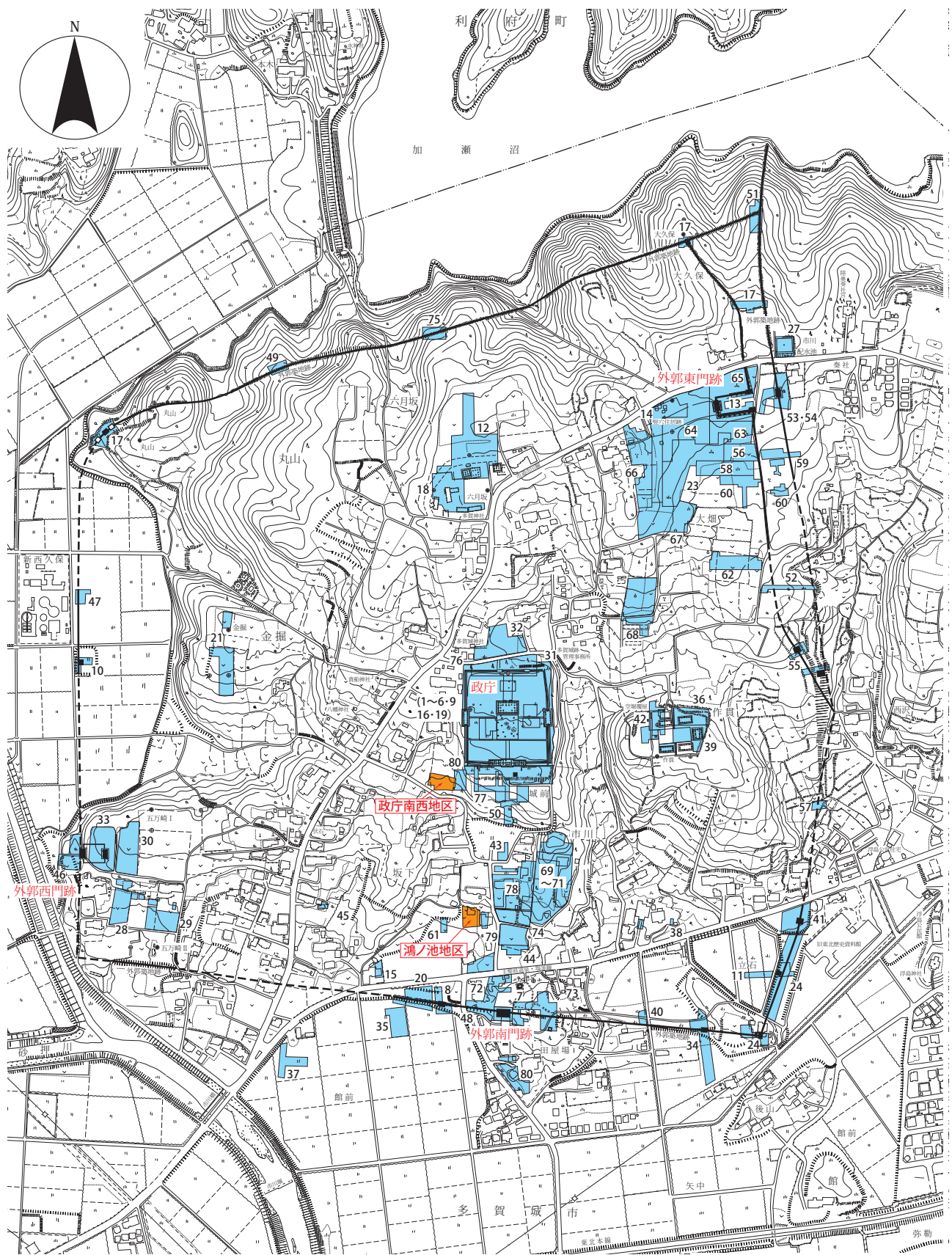


鴻ノ池地区遠景（南西から）



政庁南西地区遠景（西から）

図版 1 第 81 次調査区 遠景写真



- 第1～80次調査区
- 第81次調査区

0 100 200 300 400 500m  
(S=1/7,000)

図版2 第81次調査区的位置



の地山スクモ層まで掘り下げ、その上面に築かれた基礎地業を確認した。8月25日には図面作成および写真撮影による記録作業を終了し、8月28日には手作業と重機による埋め戻しを終了した。調査面積は約360㎡であった。

一方、政庁南西地区は8月18日に調査区を設定し、8月24日から重機で表土を除去して調査を開始した。全体の遺構確認作業を進めると共に、SA1601 塀跡の延びが想定される調査区南東部を中心に遺構を部分的に掘り下げて精査した。なお、SA1602 塀跡の延長線上には立ち木があり、詳細な調査はできなかった。11月12日には図面作成と写真撮影による記録作業を終了し、11月13日から手作業と重機による埋め戻しを行った。すべての作業が終了したのは11月19日である。調査面積は約540㎡であった。

その間、10月15日には多賀城跡調査研究委員会を開催し、調査成果に関する指導を受けた。その上で11月5日にラジコンヘリによる航空写真の撮影と報道機関に成果の公表を行い、7日に一般を対象とした現地説明会を開催した。現地説明会では約180名の参加者が得られた。その他、調査終了後の12月12日には平成21年度宮城県遺跡調査成果発表会、平成22年2月27日には第36回古代城柵官衙遺跡検討会において成果の概要を報告した。

なお、遺構の記録は主に1/20図面の作成とデジタルカメラによる写真撮影で行っている。但し、鴻ノ池地区の灰白色火山灰層より上部の掘り下げを進めていない部分については電子平板を用いて平面図を作成し、政庁南西地区のSX2980石敷遺構については発掘基準線に沿った3m方眼のグリッドを60cm四方に細分割して、周囲に30cm間隔の測点を設けたものをデジタルカメラで写真撮影し、オルソ補正した後に合成したものを平面原図としている。

遺構番号は過去の調査で登録された遺構はそれを踏襲し、新発見の遺構は2959番から番号を付した。

## 2. 調査の成果

### (1) 鴻ノ池地区

#### A. 基本層序 (図版3)

鴻ノ池地区は城内南西部の低湿地に位置しており、南は外郭南辺築地で閉ざされ、東は政庁 - 外郭南門間道路で限られている。今回は、この低湿地北端と政庁西側へ入り込む沢の末端が接する地点に調査区を設定した。標高7.0m前後の表土から標高2.5mの地山スクモ層まで掘り下げた結果、堆積層は24層に分けられた。各層は地形の傾斜に沿って北から南へ緩やかに傾斜しているが、上部ではほとんど水平に近い堆積状況である。各層はいずれも自然堆積層で、その特徴を以下に記す。

【第1層】砂・シルト・粘土の互層からなる表土。厚さは50～120cmあり、北東隅が最も厚い。

【第2層】黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト層。旧水田耕作土で、厚さは20～60cmある。

【第3層】黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粘土層。旧水田耕作土で、厚さは20～40cmある。

【第4層】黒褐色(10YR3/1)砂質シルト層で、厚さは10～60cmある。層の厚い北東部ではa・bに細分され、4a層には土器片・炭化物が多く含まれる。

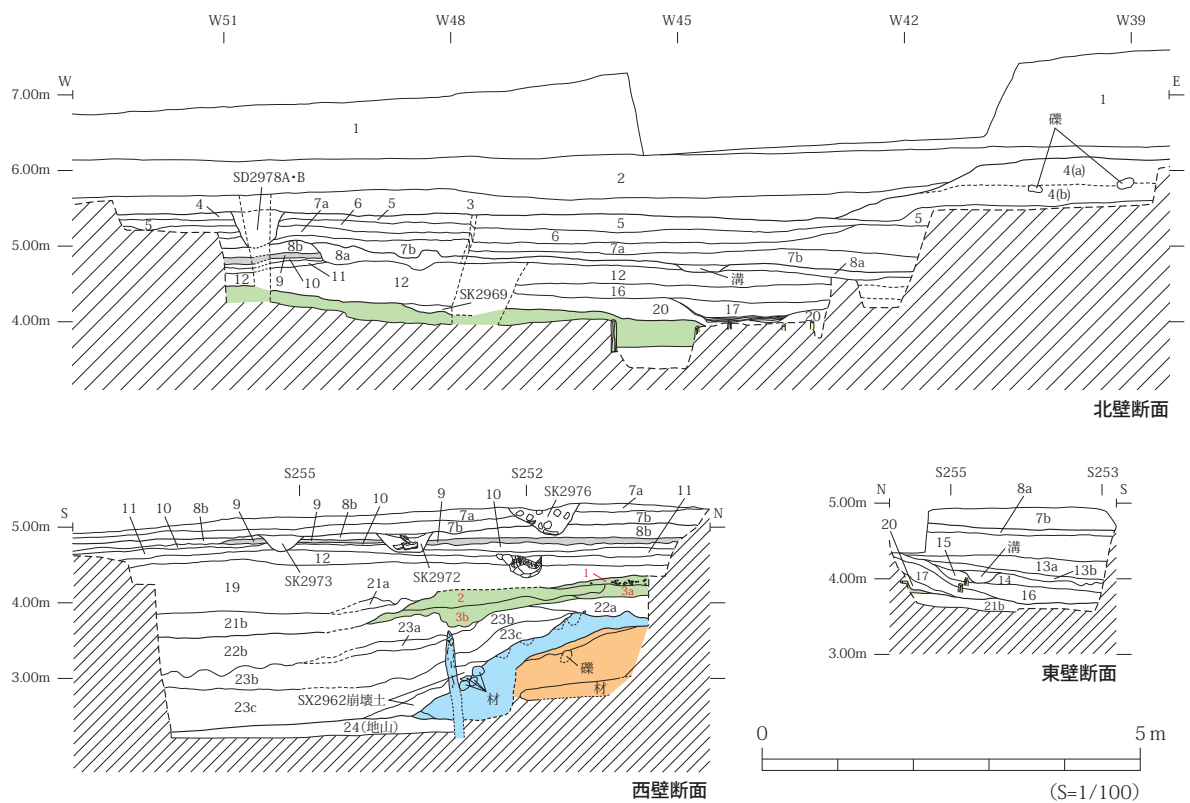
- 【第5層】 黒色（10YR2/1）シルト層で、炭化物を多く含む。厚さは10～20cmである。
- 【第6層】 灰黄褐色（10YR4/2）シルト層で、凝灰岩粒を含む。厚さは10～20cmである。
- 【第7層】 黒褐色（10YR3/1）シルトの7a層と黒色（10YR2/1）シルトの7b層に細分される。両層とも須恵系土器を中心とした多量の土器片や木製品などの遺物を含み、その含有量は西側ほど多い。層中には炭化物も多量に含まれており、厚さは20～30cmであるが、北東隅では厚みを増して約60cmとなる。
- 【第8層】 灰黄褐色（10YR4/2）砂質シルトの8a層とにぶい黄褐色（10YR5/3）砂質シルトの8b層に細分される。灰白色火山灰粒を含み、層厚は5～20cmである。北部では層の上・下面が凸凹している。
- 【第9層】 灰白色火山灰層（10YR8/1）で、深掘り範囲の西半部に分布する。厚さは5～10cmで、上部は再堆積、下部は一次堆積とみられる。
- 【第10層】 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂層で、深掘り範囲の西半部に堆積し、南端近くで途切れる。厚さは10cm前後である。
- 【第11層】 黒褐色（10YR3/1）粘土層で、深掘り範囲の西半部に分布する。厚さは5～15cmである。
- 【第12層】 灰色（7.5Y5/1）砂質シルト層である。厚さは15～60cmで、北西部が最も厚い。遺物をほとんど含まない。
- 【第13層】 オリーブ黒色（10Y3/1）シルトの13a層とオリーブ黒色（7.5Y3/1）シルトの13b層に細分される。深掘り範囲の南東部に分布し、白色粘土粒・炭化物粒を含む。厚さは10～20cmである。
- 【第14層】 暗オリーブ灰色（5GY3/1）粘土層で、深掘り範囲の南東部に分布する。白色粘土粒を含み、層厚10cm前後で、グライ化している。
- 【第15層】 暗緑灰色（7.5GY4/1）粘土質シルト層で、深掘り範囲の北東部に堆積する。部分的な分布で、白色粘土ブロックを含み、層厚10cm前後で、グライ化している。
- 【第16層】 オリーブ黒色（5Y3/2）シルト層で、深掘り範囲の東半部に分布する。厚さは20cm前後で、グライ化している。
- 【第17層】 暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）シルト層で、深掘り範囲の北東部に分布する。木片や枝木を比較的多く含み、層厚10～20cmで、グライ化している。
- 【第18層】 暗緑灰色（10G4/1）粘土層で、深掘り範囲の北東部に堆積する。部分的な分布で、白色粘土粒を含み、グライ化している。
- 【第19層】 オリーブ黒色（10Y3/2）の砂・シルト互層で、深掘り範囲の西半部に分布する。厚さは15～60cmで、南側ほど厚みを増す。遺物をほとんど含まない。
- 【第20層】 オリーブ黒色（7.5Y3/2）の砂・粘土互層で、深掘り範囲の北東部に分布する。東壁付近では砂と粘土が攪拌状態となり、砂の含有量が減る。白色粘土粒を含み、厚さは10～30cmである。
- 【第21層】 オリーブ黒色（10Y3/1）粘土質シルトの21a層とオリーブ黒色（7.5Y3/1）シルト質粘



土の21b層に細分される。SX2968 盛土遺構の南側に堆積し、砂ブロック・白色粘土粒を含む。厚さは20～30cmである。

【第22層】暗オリーブ灰色（5GY3/1）の砂・粘土が攪拌状態で堆積する22a層と暗オリーブ灰色（5GY3/1）砂の22b層に細分される。厚さは20～40cmで、層の下面に凹凸があり、グライ化している。水害などに起因して、丘陵部からもたらされた土砂が一度に堆積したものの可能性がある。

【第23層】オリーブ黒色（7.5Y2/2）粘土の23a層、オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土の23b層、オリーブ黒色（7.5Y2/2）粘土の23c層に細分される。砂ブロックや白色粘土粒を含み、最下部の23c層では地山のスクモがブロック状に混じる。SX2962 盛土遺構の南側に堆



SX2959基礎地業
  SX2962盛土遺構、SA2960土留め施設、SA2961杭列
  SX2968盛土遺構、SA2967しがらみ
  SA2970杭列



図版3 鴻ノ池地区 北・東・西壁断面

積し、厚さは 20 ~ 100cmである。

【第 24 層】黒褐色 (7.5YR3/2) スクモ層で、地山土である。層厚は 50cm以上で、締まりがある。

## B. 発見遺構と出土遺物 (図版 4)

発見した遺構には、基礎地業 1、盛土遺構とその土留め施設 (しがらみ) 3、杭列 5、土壇 5、溝 3 などがあり、土器、瓦、土製品、木製品、木簡、金属製品および骨・貝・植物遺体などの自然遺物



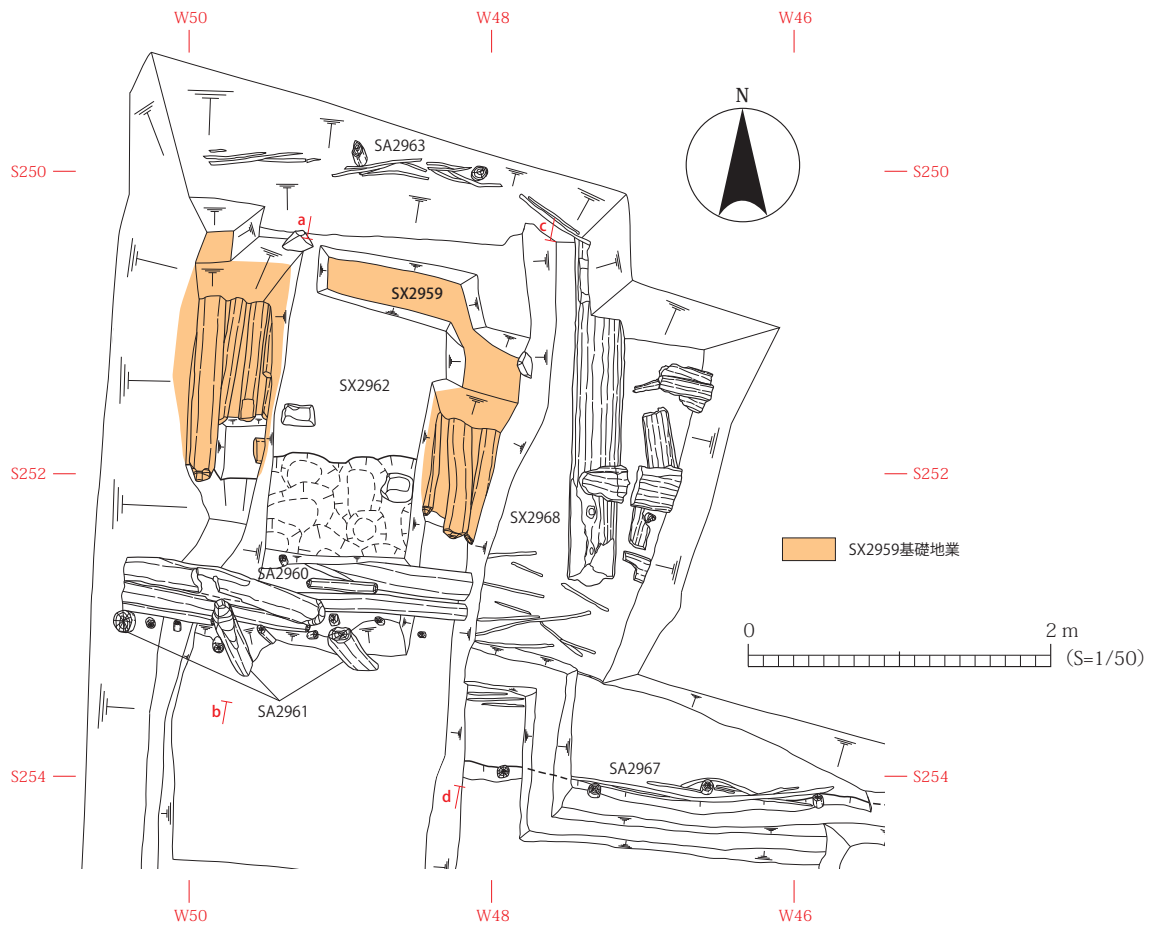
図版 4 鴻ノ池地区全体図



が出土している。以下では、主な遺構とその出土遺物、基本層序の各層から出土した遺物について概要を説明する。なお、盛土遺構としがらみ、杭列は一連の護岸施設で、大きく4つに分けられることから、このまとまりごとに記載する。



図版5 鴻ノ池地区 深掘り部分全体写真



図版6 SX2959 基礎地業

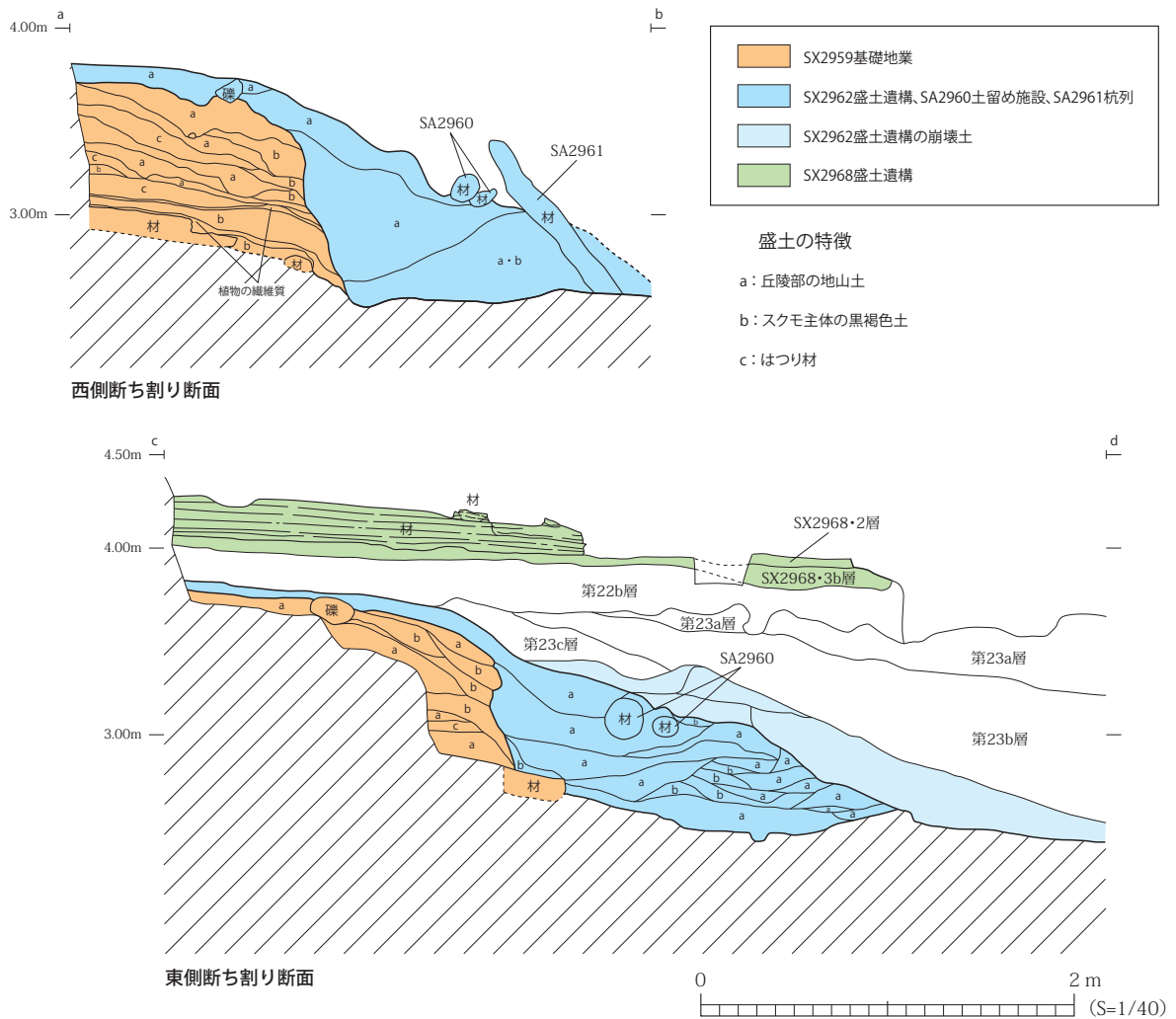
i. 基礎地業

【SX2959 基礎地業】（図版3・6～8・15）

調査区北西部で検出した基礎地業で、南へ緩やかに傾斜する地山スクモ層（第24層）上に丸材を敷き並べた筏地業とその上に積み上げた盛土からなる。南北1.6m、東西約2.0mにわたって検出したが、更に調査区の北と東西両側に延びる。SX2962 盛土遺構より古い。

丸材は南北方向にほぼ密接して敷き並べられており、その南端近くの下部で東西に置かれた材を確認したことから、筏地業と判断した。南北方向の丸材は樹皮が付いたままのものが用いられており、長さ1.2m以上で、径12～18cm、端部はやや尖っているが、それほど鋭角ではない。丸材南端の位置にはややばらつきがある。東西に置かれた材は径15cm程の丸材とみられるが、残存状況が悪く判然としない。

盛土は主に丘陵部の地山土を用いているが、多量のはつり材を厚さ5～10cmで敷き詰めた層がサンドイッチ状に挟み込まれ、南部では地山スクモを主体とした積土も認められる。また、筏地業の



図版7 SX2959 基礎地業、SX2962 盛土遺構断面図





南から



西側断ち割り断面 (西から)



断ち割り部の筏地業 (西側)



断ち割り部の筏地業 (東側)



西側断ち割り断面 (南西から)



盛土中のはつり材



東側断ち割り断面 (北西から)

図版8 SX2959 基礎地業写真



直上では植物の繊維質が敷き詰められた状態で検出された。残存する高さは約 0.7m で、SX2962 盛土遺構を構築する際に上部や南端部が削り取られており、崩壊土や機能時の堆積土は残存しない。

遺物は、積土から木製品が出土している。多量のはつり材とともに建築材(図版 15-1・2)などが出土している。

## ii. 護岸施設

【SX2962 盛土遺構、SA2960 土留め施設、SA2961 杭列】  
(図版 3・7・9～12・15)

最初の護岸施設である SX2962 盛土遺構は SX2959 基礎地業の上部および南端部を削り取った後に土を盛って構築されている。検出範囲は東西 2.8 m・南北 2.8 m であるが、更に調査区の北と東西両側に続く。

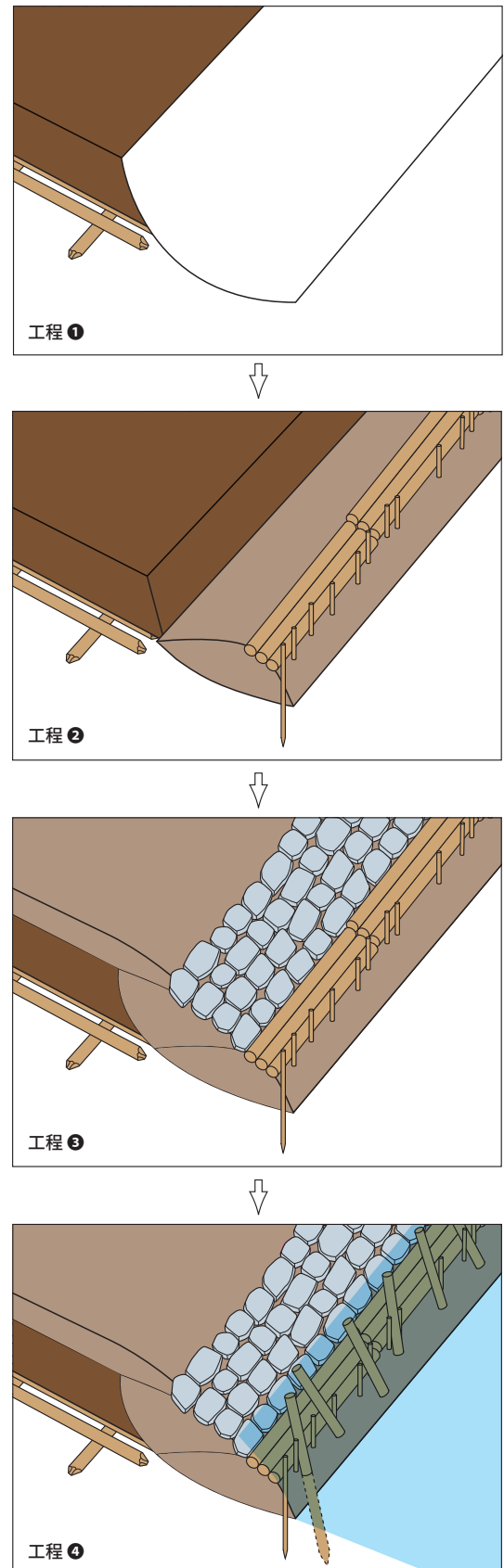
現存する盛土の高さは 1.2 m で、主に凝灰岩の小片を含む丘陵部の地山土が用いられている。南端部には横木を打ち込み杭で固定した SA2960 土留め施設が設けられ、その上部にあたる岸の壁面には葦石もしくは葦石の圧痕が残る。さらに、SA2960 の南側に接して SA2961 杭列が打ち込まれており、土留め施設を補強したものの可能性がある。方向は、SA2960 でみると東西の発掘基準線に対して東で南に 2～3° 振れる。以下この護岸施設の構築工程に沿って詳細を説明する。

### ① SX2959 基礎地業の上部および南端部を削り取る。

SX2959 の南端部と一緒にその南側も大きく削り取られており、南側では南北幅 1.1～1.8 m、深さ 20cm 程の浅い窪みが認められた。

### ② 護岸の法尻となる南端部から盛土を行う。この盛土南端部に東西に寝かせた材(横木)を 3～4 本積み重ね、それらを 20～30cm 間隔で打ち込んだ杭材で固定した土留め施設(SA2960)を設ける。

横木は径 12～20cm、長さ 1.3 m 以上で、主に樹皮が付いたままの丸材を使用しているが、面取りされ、長さ約 40cm、幅約 10cm の貫穴が穿たれているものも認められた。



図版 9 SX2962、SA2960・2961 構築工程模式図

杭材は径3～5cm、長さ50cm以上で、樹皮が付いたままの丸材を使用している。

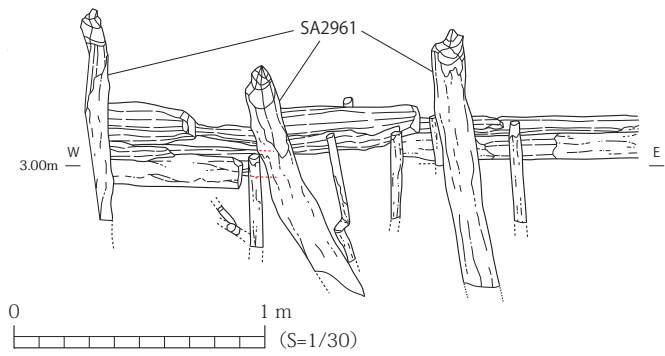
- ③ 最終的な盛土整形時に法面の上部に葺石を施す。

残存する葺石は一辺20cmの隅丸方形を呈し、厚さ10cm程の扁平な礫1点のみだが、横木より上部の壁面には葺石が剥がれ落ちた痕跡とみられる

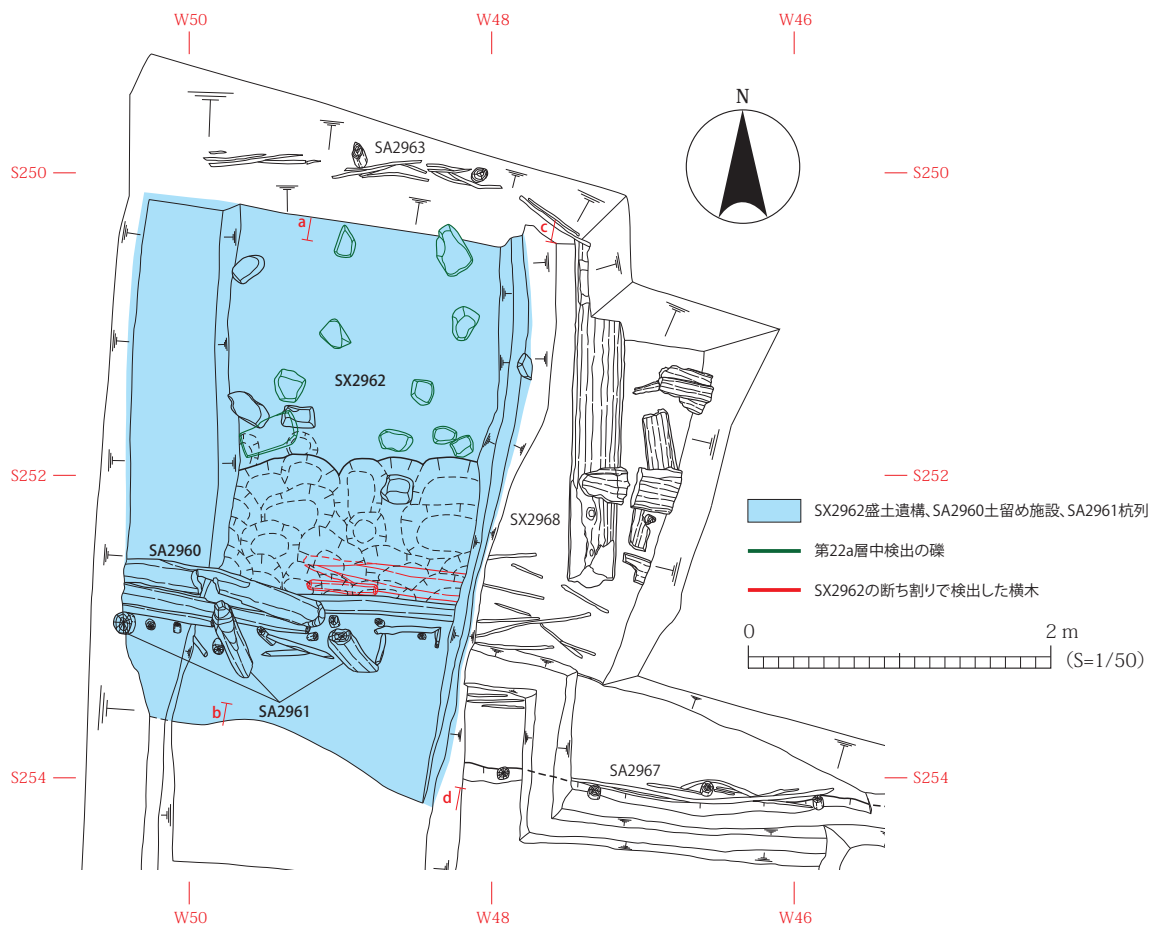
長軸20～50cm、短軸20～35cmの不整楕円形の凹みが、上下4段に並んで認められる。

- ④ SA2960の横木に沿ってその南側へ70cm前後の間隔で太い杭材を打ち込む(SA2961)。

SA2961の杭材は径12～15cm、長さ1.2m以上で、SA2960の杭材よりも3倍近く太く、樹皮が付いたままの丸材が用いられている。この杭列がSA2960の横木を押さえる位置にあることや、検出した3本の杭材のうち2本の頭が北側に大きく傾いており、杭が岸側から斜めに打ち込まれたとみられることから、SA2961はSA2960を補強するために後から設けられた杭列と判断した。

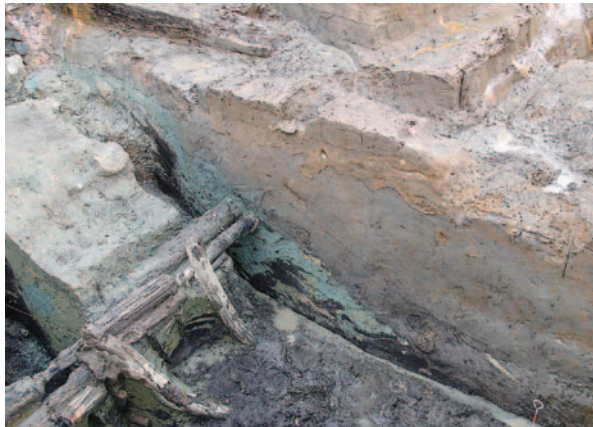


図版 10 SA2960 土留め施設、SA2961 杭列立面図



図版 11 SX2962 盛土遺構、SA2960 土留め施設、SA2961 杭列

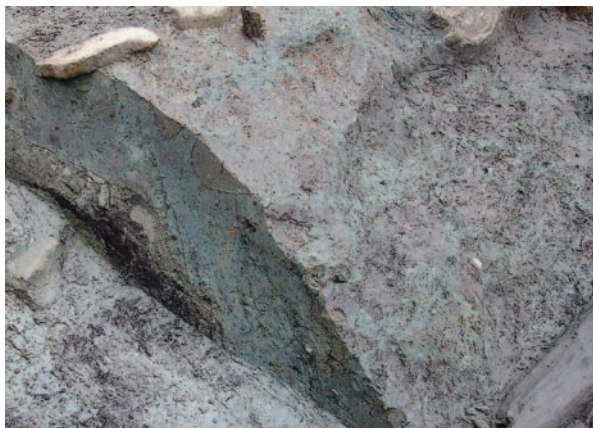




東側断ち割り断面 (南西から)



SA2960・2961 (南から)



葺石の痕跡 (南西から)



第 22a 層中で検出した礫の状況

図版 12 SX2962 盛土遺構、SA2960 土留め施設、SA2961 杭列写真



なお、盛土上面で3点、直上の第22a層中から十数点の礫が出土している。礫は長辺15～40cm、短辺10～20cmの不整な方形を基調とし、厚さ7～12cmで、扁平なものが多く、意図的に分割された可能性があるものや一面に受熱の痕跡があるものも含まれる。本護岸施設に関連するものの可能性もある。

遺物は、SX2962の盛土最下層から土師器、須恵器、丸瓦、平瓦が出土している。土師器はロクロ調整の坏体部破片が1点、甕体部破片が3点である。須恵器は稜碗体部破片が1点、甕体部破片が2点である。平瓦は、類型を識別できたものとしてⅡ類が1点ある。図示できるものはない。

A2960で取り上げた杭材は径3cm前後、長さ18～30cmの丸材（図版15-3・4）である。SA2961の杭材は取り上げなかった。

### 【SA2963 しがらみ】（図版13）

調査区北壁で東西2.0mにわたって検出したしがらみで、さらに東西両側へ延びる。最初の護岸施設（SX2962）より新しい。径7cm前後の杭材を約80cmの間隔で打ち込み、その間に径2cm程の樹枝を1～2本一組にして絡みつけている。確認した杭は2本で、丸材を用いていた。横に絡みつけた樹枝は遺存状態が悪く、高さ約10cmを残す。

また、SX2968盛土遺構中に据えられた南北方向の大型角材2本（角材①・③）がこのしがらみを越えて北側へ及んでいるが、未精査のためその構造や前後関係など詳細は不明である。杭材も取り上げていない。

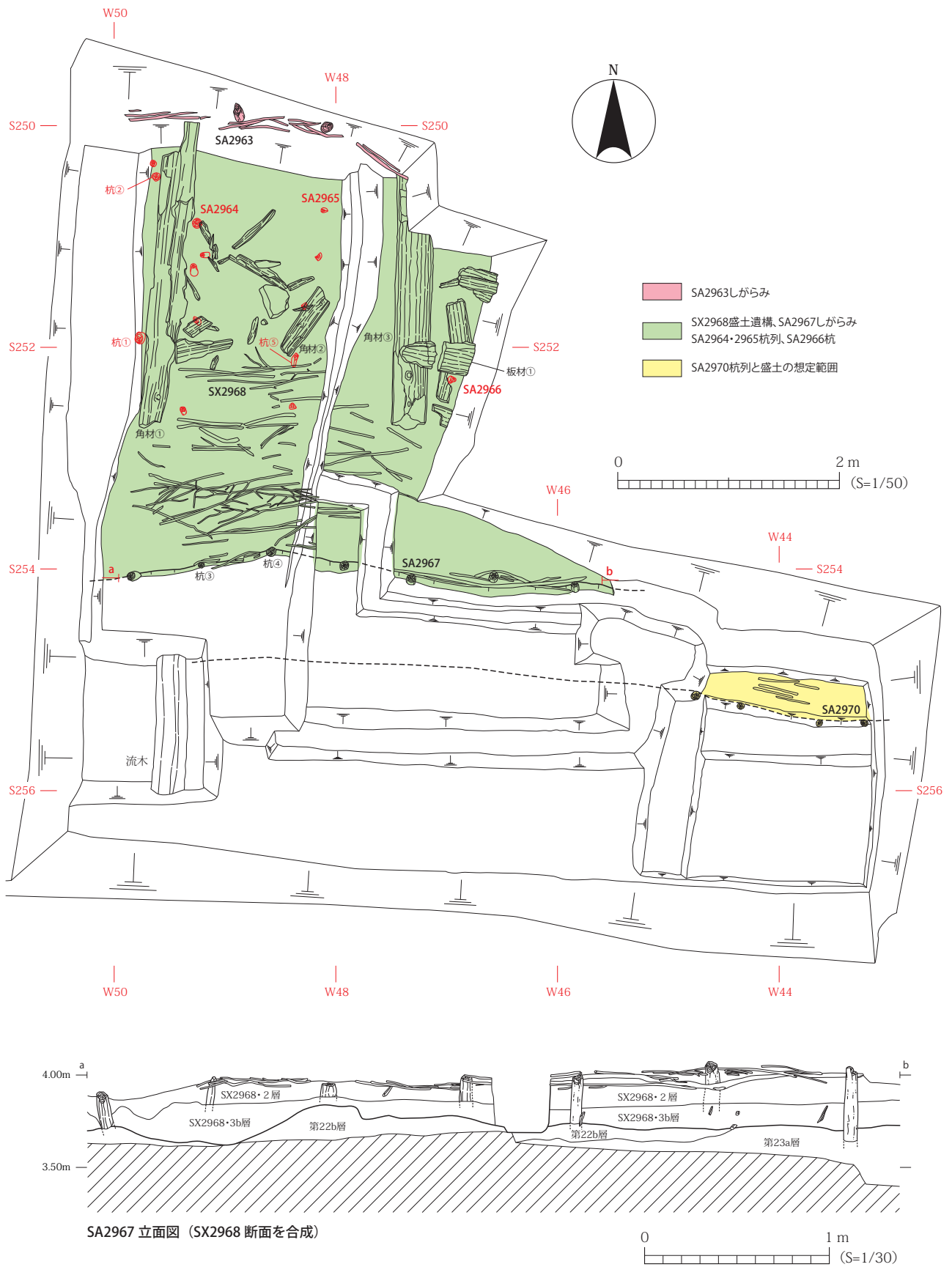
### 【SX2968 盛土遺構、SA2967 しがらみ、SA2964・2965 杭列、2966 杭】（図版3・7・13～19）

最初の護岸施設であるSX2962盛土遺構を嵩上げし、南側へ拡張して設けられた護岸施設である。検出範囲は東西5.0m・南北3.8mであるが、更に調査区の北と東西両側に続く。SK2969土壌より古い。

嵩上げたSX2968盛土遺構の残存高は最大で50cmある。その下部からSX2962上面までの間には第22・23層（砂層や粘土層）が0.2～1.3mの厚さで堆積しており、盛土時には比較的平坦な緩斜面となっている。積土は主に砂ブロックと白色粘土粒を含むオリーブ黒色土で、その築成土中には角材や板材、多数の樹枝などがサンドイッチ状に挟み込まれ、挟み込んだ大型の角材や板材を固定するために打ち込まれたと考えられるSA2964・2965杭列や2966杭が検出された。この盛土の南端はSA2967しがらみによって土留めされている。SA2967の打ち込み杭の並びにはやや凹凸がみられ、大まかな方向は東西の発掘基準線に対して東で南に2°前後振れる。以下、この護岸施設の構築工程に沿って詳細を説明する。

- ① 第22・23層上に厚さ5～30cmの第1次盛土（3a・b層）を行い、上面を平坦にする。
- ② 南端部に第1次盛土の上面から杭材を55～75cmの間隔（75cm間隔が多い）で打ち込み、その間に径2cm程の樹枝を1～2本一組にして絡みつけたしがらみを設ける（SA2967）。

杭材には径3～8cmの丸材が用いられており、樹皮が付いたままのものも認められる。残りの良



図版 13 SA2963・2967 しがらみ、SX2968 盛土遺構、SA2964~2966・2970 杭列



い東部で第1次盛土上面から20cm程の高さまで遺存し、取り上げた西端から3本の杭は長さ70～90cmで、先端が尖っていた。横に絡みつけた樹枝は遺存状態が悪く、高さ約10cmを残す。

- ③ しがらみの内側（北側）に厚さ20～30cm以上の第2次盛土（1・2層）を行う。その際、南端部から約2.0m（S 252以南）までの間にはしがらみに沿う方向で細い樹枝を密に敷き詰め、これより北側には角材や板材などをサンドイッチ状に挟み込んで打ち込み杭（SA2964～2966）で固定している。

樹枝は長さ1～2mで、径1cm前後の小枝が多く、木葉が付いたものも認められた。

北側には、大型の角材3本が1m前後の間隔で南北方向に据えられており、遺存状態の良好な東端の角材（角材③）は長さ2.3m以上、幅30cm、厚さ20cm、西端の角材（角材①）は長さ2.8m以上、幅約30cm、厚さ13cm以上である。中央の角材（角材②）は長さ65cm程が残るが、SK2969土壌に壊されて原位置を留めていない。これら大型角材の間では、板材や割材、杭材などが検出されているが、SK2969に壊されて遺存状態が悪く、大きさや置き方は判然としない。比較的残りの良い東部をみると、幅10～30cmの板材を角材の上に架けるように東西方向と、角材に沿うように南北方向に置いていたことが窺われる。

SA2964は角材①に沿ってW 49付近を南北に延びる2列の杭列で、西の杭列は角材①の西側に接し、東の杭列は角材①の東側に接する。東西杭列の間隔は40cm前後で、杭の間隔は15～145cmと一定していない。杭材には径4～10cmの丸材と割材が併用されている。

SA2965はW 48付近を南北に延びる杭列で、角材②に沿うものと考えられる。杭の間隔は40～50cmで、杭材には長軸5cm前後の割材が用いられている。

SA2966はW 47・S 252付近に位置する単独の打ち込み杭で、長軸7cmの割材が用いられている。東西方向に置いた板材の南側に接している。

遺物は、SX2968の盛土各層から出土しており、層ごとに記す。なお層位不明であるが、盛土中から須恵器蓋の折り縁の口縁部が1点出土している。

#### 〈1・2層〉

土師器、須恵器、平瓦が出土している。

土師器は非ロクロ調整の高坏脚部破片が1点、ロクロ調整の甕部破片が2点である。須恵器は甕体部破片が1点である。平瓦は、類型を識別できたものとしてⅡ類が1点ある。

#### 〈3a層〉

土師器、須恵器、丸瓦、平瓦、木製品が出土している。

土師器は、甕部破片が1点である。須恵器は瓶体部破片が2点、甕頸部破片が2点である。平瓦は、類型を識別できたものとしてⅡ類が3点ある。図示できるものはない。

木製品は曲物（図版18-2）、タモ網梓木（図版18-7）、建築材（図版16-4・5）、用途不明の組み合わせ部材（図版18-6）、棒状・板状・円盤状の不明木製品（図版18-3～5）、燃えさし（図版18-8）、杭材（図版16-2・3）などがある。





SX2968、SA2964~2967 (南から)



SA2967 東半部 (南西から)



SX2968 盛土中の樹枝 (北東から)



SX2968、SA2964~2967 (北東から)



SX2968 盛土中の角材③(東から)



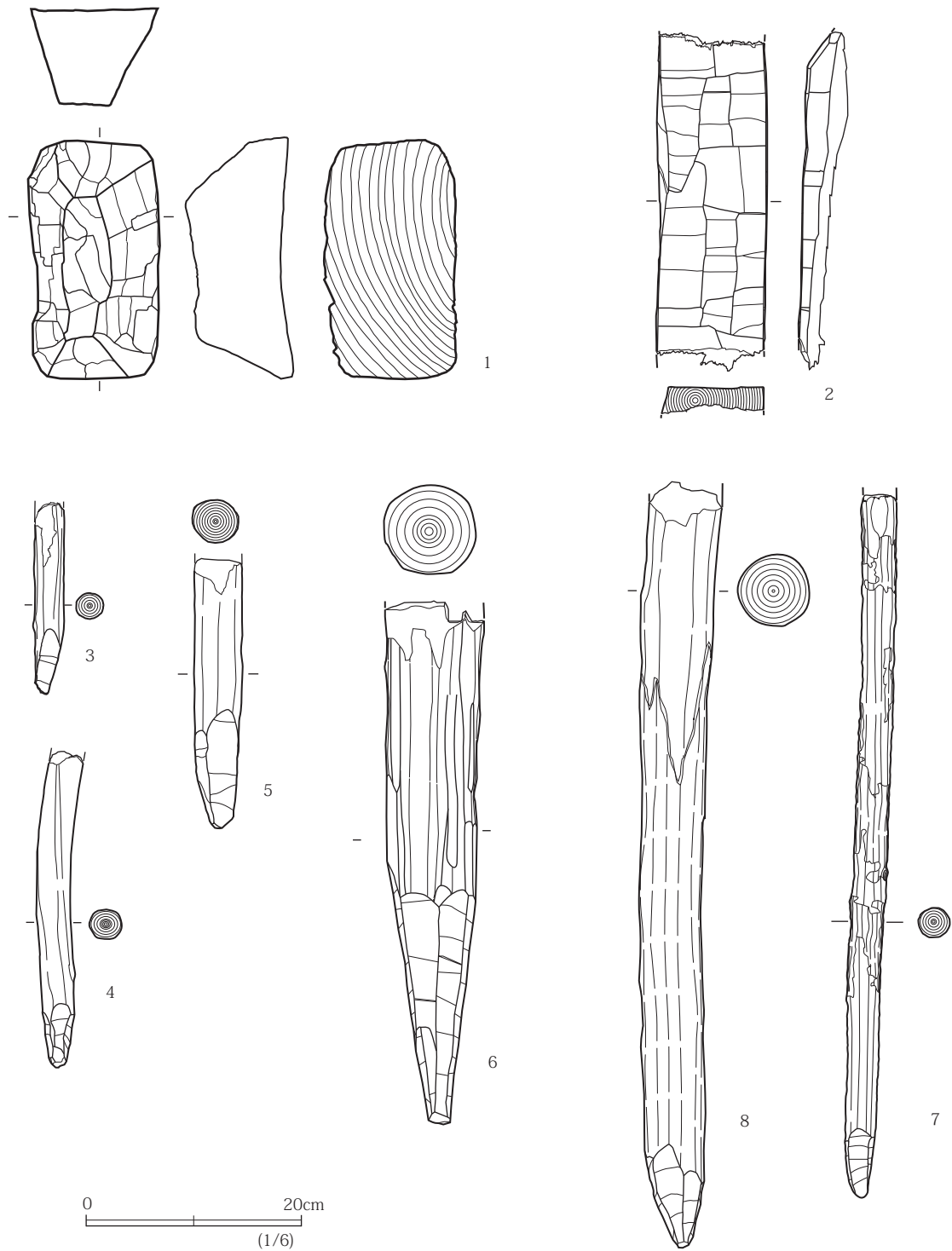
SA2963 (南から)



SA2970 (南西から)

図版 14 SA2963・2967 しがらみ、SX2968 盛土遺構、SA2964~2966・2970 杭列写真

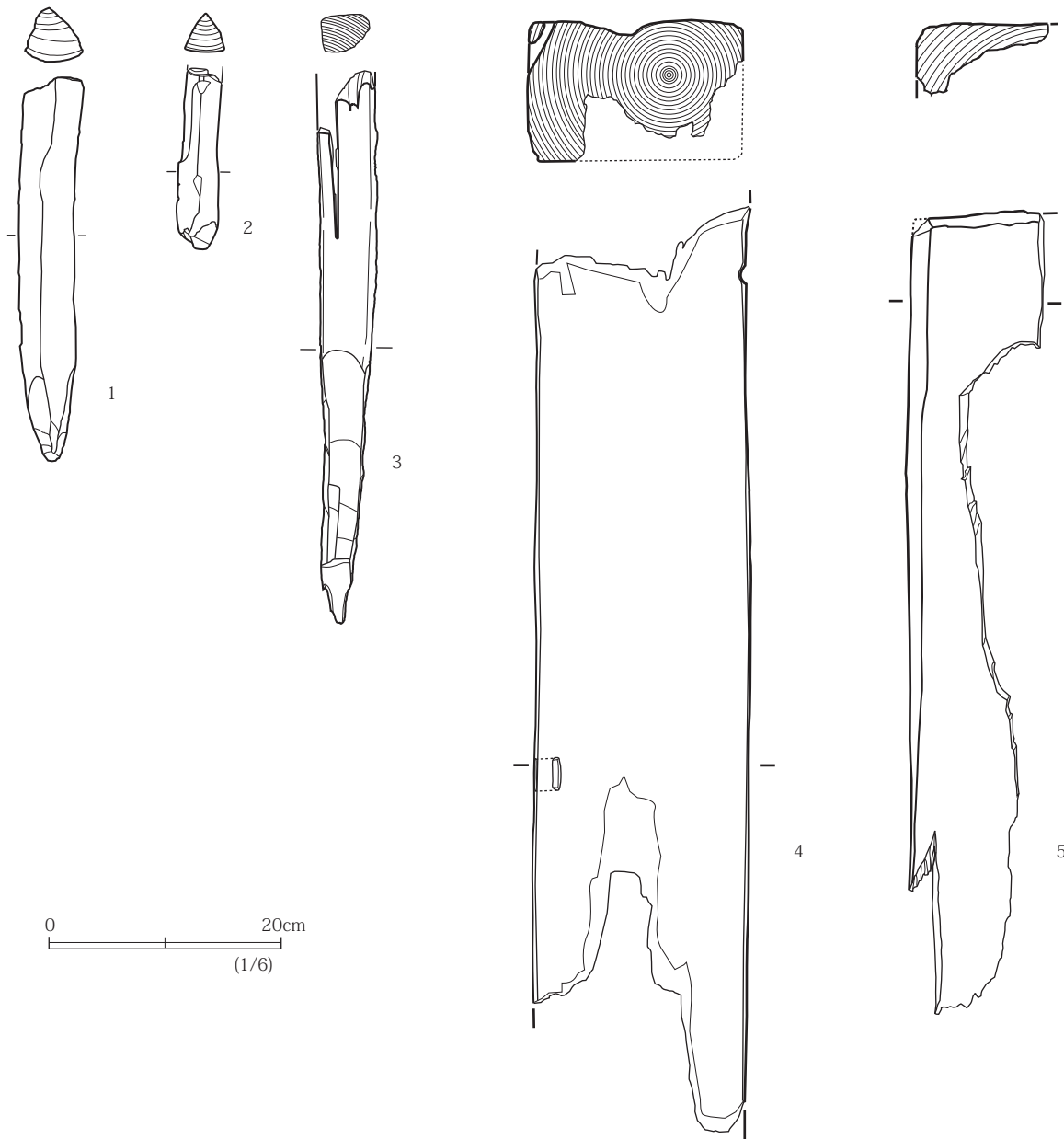




No	出土遺構	グリット	種類	法量	木取	特徴	登録
1	SX2959 積土		不明部材	長22、幅11.5cm	柱目		W-16
2	SX2959 最下層		端材	長32、幅10cm	板目	ハツリ痕跡	W-40
3	SA2960	IQ66	杭材	長18、径2.5cm	丸材	樹皮が残る	W-23
4	SA2960		杭材	長30、径2.9cm	丸材	樹皮が残る	W-26
5	SA2964 杭②		杭材	長25、径4cm	丸材	樹皮が残る	W-15
6	SA2964 杭①		杭材	長48、径9cm	丸材	樹皮が残る	W-69
7	SA2967 杭③		杭材	長65、径2.9cm	丸材	樹皮が残る	W-25
8	SA2967 杭④		杭材	長71、径6.5cm	丸材	樹皮が残る	W-36

図版15 SX2959、SA2960・2964・2967 杭材・出土木製品





No	出土遺構	グリット	種類	法量	木取	特徴	登録
1	SA2965 杭⑤	IQ66	杭材	長55、幅5cm	割材	樹皮が残る	W-33
2	SX2968 3a層	IP66	杭材	長15.5、径5cm	割材	樹皮が残る	W-27
3	SX2968 3a層		杭材	長48、径5cm	割材	樹皮が残る	W-28
4	SX2968 3a層		建築材	長70、幅12cm	板目	両端腐朽、側面に斜めの孔	W-12
5	SX2968 3a層		建築材	長80、径18cm	板目	一端腐朽	W-13

図版16 SX2968、SA2965 杭材・出土木製品



曲物 底板 (3a層)

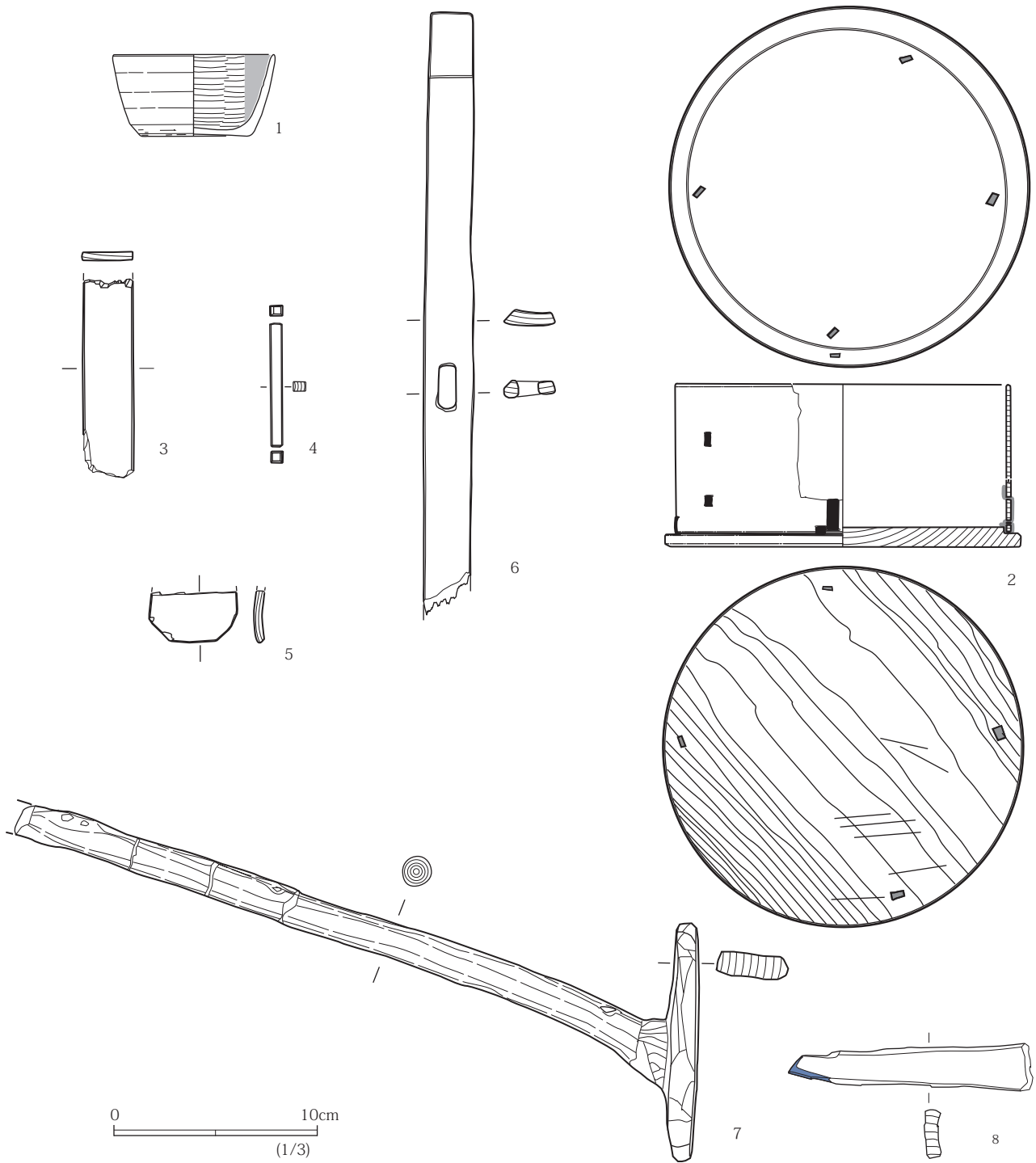


タモ網柵木 (3a層)



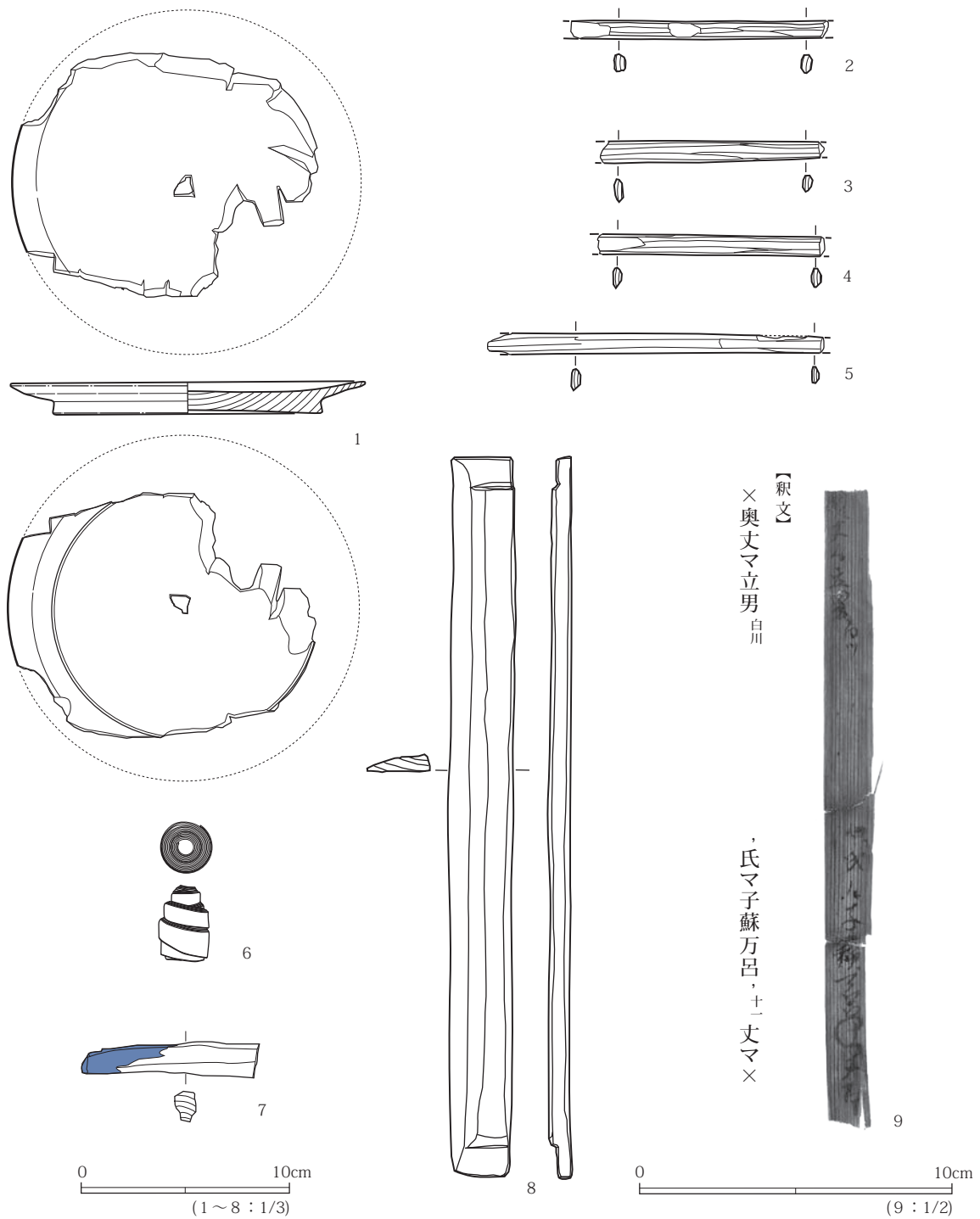
挽物 高台皿 (3b層)

図版17 SX2968 木製品出土状況



No	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	登録
1	SX2968 3b層	土師器 環	1/2	8.0	5.8	4.0	底：回転糸切 周縁：回転ケズリ	R-51
No	出土遺構	種類	法量	木取	特徴	登録		
2	SX2968 3a層	曲物 底板	直径17cm	板目	樺皮結合	W-5		
3	SX2968 3a層	板状	長10、幅2.5cm	板目		W-18		
4	SX2968 3a層	棒状	長6、角0.5cm	柁目		W-19		
5	SX2968 3a層	円盤状	直径4.5cm	板目		W-20		
6	SX2968 3a層	組合部材	長30、径2.5cm			W-31		
7	SX2968 3a層	夕毛網梓木	長38、径1.5cm	丸材		W-38		
8	SX2968 3a層	燃えさし	長12、幅2.5cm	割材		W-62		

図版18 SX2968 出土遺物



No	出土遺構	グリット	種類	法量	木取	特徴	登録
1	SX2968 3b層	IP66	挽物 高台皿	直径17cm	板目		W-2
2	SX2968 3b層	IP66	箸状木製品	長12、径0.5cm	板目		W-8
3	SX2968 3b層	IP66	箸状木製品	長11、径0.5cm	板目		W-9
4	SX2968 3b層	IP66	箸状木製品	長11、径0.5cm	板目		W-10
5	SX2968 3b層	IP66	箸状木製品	長16、径0.5cm	板目		W-11
6	SX2968 3b層		樺皮	直径2cm		曲げ物結縛用、未使用	W-17
7	SX2968 2~3b層	IO66	燃えさし	長8.5、幅1.5cm	割材	マツ	W-61
8	SX2968 3b層	IP66	組み合わせ材	35×3×1cm			W-70
9	SX2968 3b層		木筒	長(204)×幅(16)×厚2mm	柎目	081形式	

図版19 SX2968 出土木製品・木筒



〈3b層〉

土師器、須恵器、丸瓦、平瓦、木製品が出土している。

土師器はロクロ調整の坏が1点(図版18-1)ある。須恵器はへら切の坏底部が2点、甕体部破片が3点である。平瓦は、類型を識別できたものとしてⅠA類が3点、Ⅱ類が4点ある。

木製品の挽物高台皿(図版19-1)、箸状木製品(図版19-2～5)、組み合わせ部材(図版19-8)、樺皮(図版19-6)、燃えさし(図版19-7)、などがある。

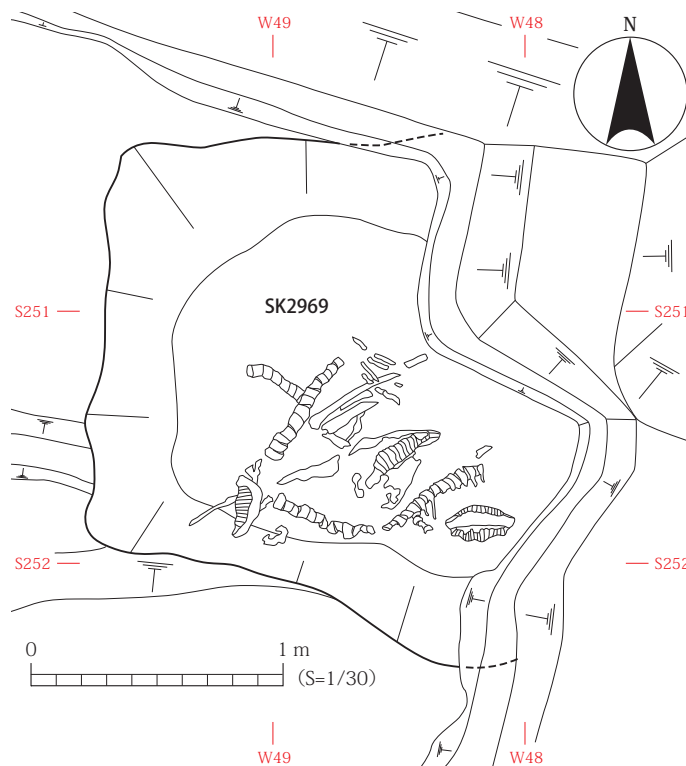
SA2967で取り上げた杭材は径3～7cm、長さ65～71cmの丸材(図版15-7・8)である。

SA2964で取り上げた杭材は径4～9cm、長さ25～48cmの丸材(図版15-5・6)である。

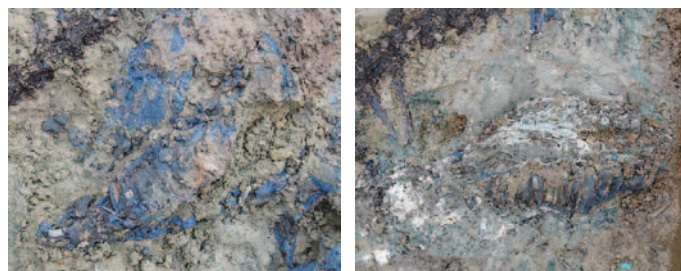
SA2965で取り上げた杭材は径5cm、長さ55cmの割材(図版16-1)である。

【SA2970 杭列】(図版3・13)

S255ライン付近を東西に延びる杭列で、2.0mにわたって検出した。径3～5cmの杭材を40～70cmの間隔で打ち込んだもので、この西側延長線上(W48～50の間)で打ち込み杭2本(実測図作成前に欠損)を確認したことから、途中に失われた部分もあるが、さらに東西両側へ延びていたと考えている。杭の並びにはやや凹凸がみられ、大まかな方向は東西の発掘基準線に対して東で南に7～8°振れる。杭材には丸材が用いられており、東端の杭以外は樹皮が付いたままであった。杭材は取り上げなかった。



ウマの骨出土状況(西から)



①拡大写真(頭蓋骨)

②拡大写真(下顎骨)

図版20 SK2969 土壌

SA2970 のすぐ北側の第 16 層上面では、この杭列に沿う方向に並んだ長さ 30cm 前後、径約 1 cm の樹枝が複数検出されている。その状況からみて、盛土下部に敷き詰められていた樹枝の残痕と考えられ、SA2970 はその盛土の南端を土留めするしがらみであった可能性が高い。その場合、盛土が残存しないものの、樹枝の検出層位から SX2968 盛土遺構、SA2967 しがらみよりも新しく、南側へ 80cm 程拡張して設けられた護岸施設となる。

### iii. 土壙

#### 【SK2969 土壙】(図版 20)

調査区北西部の第 20 層下にあたる SX2968 盛土遺構の第 2 次盛土上面で検出した土壙で、北・東部が調査区外に延びる。重複状況から SX2968 盛土遺構より新しい。平面形は東西に長い不整な方形を基調とするとみられ、規模は長軸 2.1 m 以上、短軸 2.0 m 前後である。深さは 20cm 程で、底面にはやや凹凸があり、底面～壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土はグライ化した丘陵部の地山土を主体とする暗青灰色土で、上下 2 層に細分されるが、いずれも人為的な埋土である。

本土壙の底面付近からは多量のウマの骨が出土している。ウマの骨には頭蓋・頸椎・胴・四肢骨がみられるが、遺存状態が悪く詳細な状況は判然としない。確認した下顎骨から算出される最小個体数は 3 頭で、いずれも成体である。骨は脆弱で取り上げられなかった。

この他に、埋土から土師器、須恵器、丸瓦が出土している。土師器はロクロ調整の坏体部破片が 3 点、甕体部破片が 2 点である。須恵器は坏体部破片が 1 点ある。丸瓦は、Ⅱ類が 2 点ある。

#### 【SK2972・2973 土壙】(図版 3・4・24)

SK2972・2973 は調査区深堀り部分の西壁で検出した土壙で、第 8 b 層上面から掘り込まれている。壁面でその存在を確認した時点で、調査区全体をさらに下層まで掘り下げていたために東半部が失われており、平面形は判然としない。断面をみる限り、SK2972 は南北軸 75cm、深さ 25cm、SK2973 は南北軸 60cm、深さ 20cm で、両者とも壁の立ち上がりはやや急である。いずれも堆積土は炭化物を含む黒褐色土で、自然流入土とみられる。

SK2972 では、1 層からは須恵系土器坏(図版 24-5)、高台坏、2 層から木製品の挽物合子(図版 24-6)が出土している。

SK2973 では、遺物は出土していない。

### iv. 溝

#### 【SD2974 溝、SX2975 一括土器】(図版 21・22)

SD2974 は調査区北西部の第 8 b 層上面に認められる南北方向の溝である。長さ 2.2 m 分を検出したが、さらに南側へ延び、北側は東西に分岐している。幅は 40～60cm、深さは 5～10cm で、断面は皿形となる。堆積土は炭化物を多く含む黒色土で、第 7 b 層と同一である。

この溝の底面から須恵系土器坏 19 点・高台坏 3 点がまとまって出土したため、これらを SX2975



一括土器として扱う。須恵系土器は主にA～Cの3箇所に分かれ、Aでは坏8点が伏せた状態、Bでは坏4点が伏せた状態、Cでは坏3点が正位の状態重なっていた。残りの坏・高台坏はこれらの周辺から出土した土器で、原位置は特定できないが、同様にA～Cのいずれかに重なっていたものが崩れ落ちたと考えられる。これらの一括土器は意図的に重ねて置かれたものの可能性がある。残りの良い11点を図示した(図版22)。

#### 【SD2978 A・B溝】(図版21・23・24)

調査区西半を南北に延びる溝で、A→B2時期の重複がみられる。A・Bともに第6層上面で検出したが、調査区北壁の断面観察から少なくともBは第4層上面から掘り込まれていることが判明した。いずれの溝も更に調査区の南北両側へ延びている。

#### 《SD2978 A》

Aは南北にほぼ直線的に延びる溝である。規模は長さが21.0m以上で、上端幅が40～70cm、深さは25～40cmである。断面形は「U」字形を呈する。堆積土は3層に分かれ、1・3層は暗緑灰色の粗粒砂、2層は細粒砂とスクモをラミナ状に含む黒褐色土で、いずれも自然流入土である。方向は南北の発掘基準線に対して北で西に10°前後振れている。

遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、瓦が出土している。土師器は坏、甕がある。坏は回転糸切の底部破片が4点、甕は口縁部破片が2点ある。須恵器は甕体部破片が1点である。須恵系土器は坏底部破片が73点、小皿が11点、不明が20点、高台坏が8点、器台高杯が1点ある(図版23-1～5)。

#### 《SD2978B》

BはAの上部を南北に延びる溝で、調査区南部で緩やかに東へ振れている。規模は長さが21.0m以上で、上端幅が0.8～1.7m、深さは20cm前後である。断面形は皿形を呈する。堆積土は2層に分かれ、1層は薄い細粒砂と粘土の互層、2層は細粒砂のブロックを含むオリーブ黒色粘土で、いずれも自然流入土である。

遺物は、堆積土各層から比較的多く出土しており、層ごとに記す。

#### 〈1層〉

土師器、須恵器、須恵系土器、瓦が出土している。

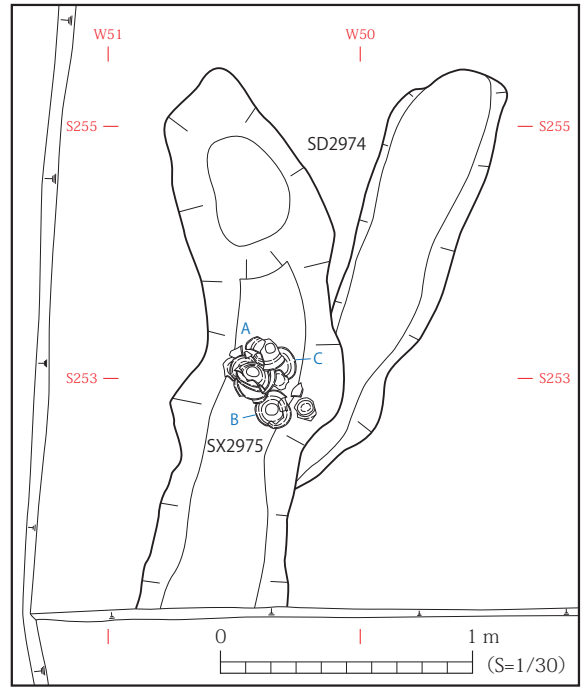
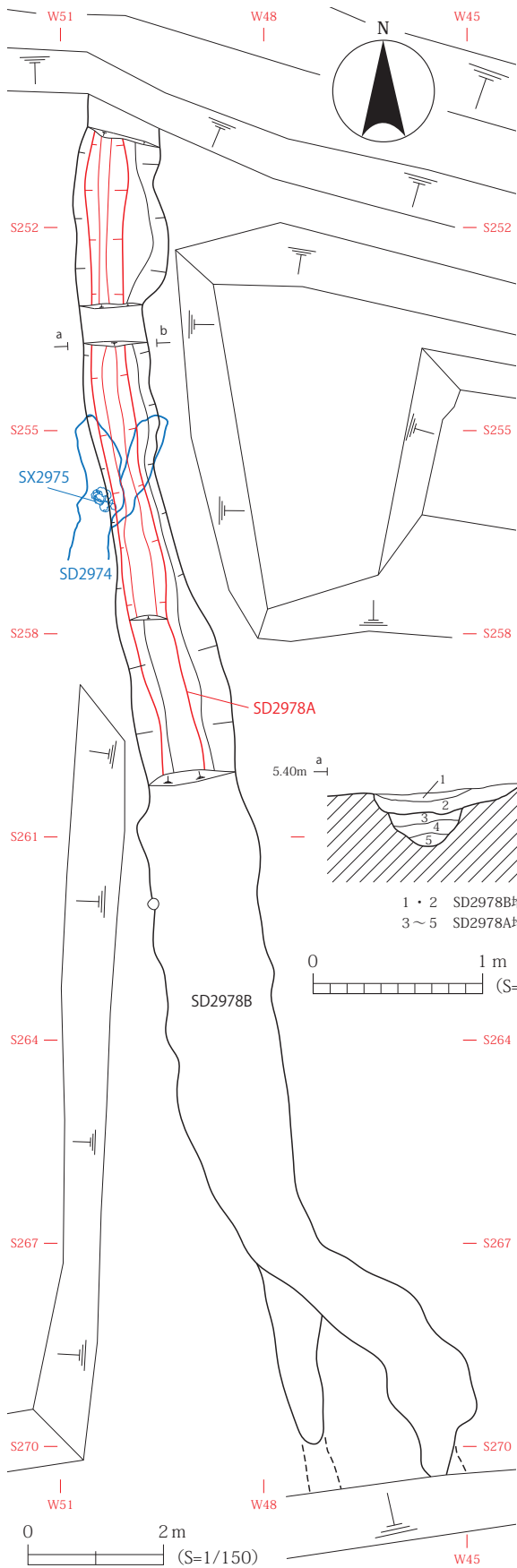
土師器は坏、鉢がある。坏は回転糸切の底部破片が1点、鉢は体部破片が1点ある。須恵器は甕体部破片が1点、瓶底部破片が1点(図版23-20)である。須恵系土器は坏底部破片が5点、小皿が12点、高台坏が1点(図版23-14)である。台付鉢は体部破片が1点ある。

#### 〈2層〉

土師器、須恵器、須恵系土器、瓦、フイゴ羽口、木製品が出土している。

土師器は坏、甕がある。坏は回転糸切の底部破片が5点、甕は口縁部破片が2点ある。須恵器はヘラ切の坏底部破片が1点、瓶の底部破片が1点、甕体部破片が1点である。須恵系土器は坏底部破片が78点(図版23-9～13)、高台坏が16点である。台付鉢は体部破片が2点ある。

木製品は曲物底板(図版24-2)、燃えさし(図版24-4)などがある。



SD2974、SX2975 平面図



SX2975 検出状況 (東から)



SD2978A・B (南から)



SD2978A・B 断面 (南から)

図版 21 SD2974 溝、SX2975 一括土器、SD2978A・B 溝

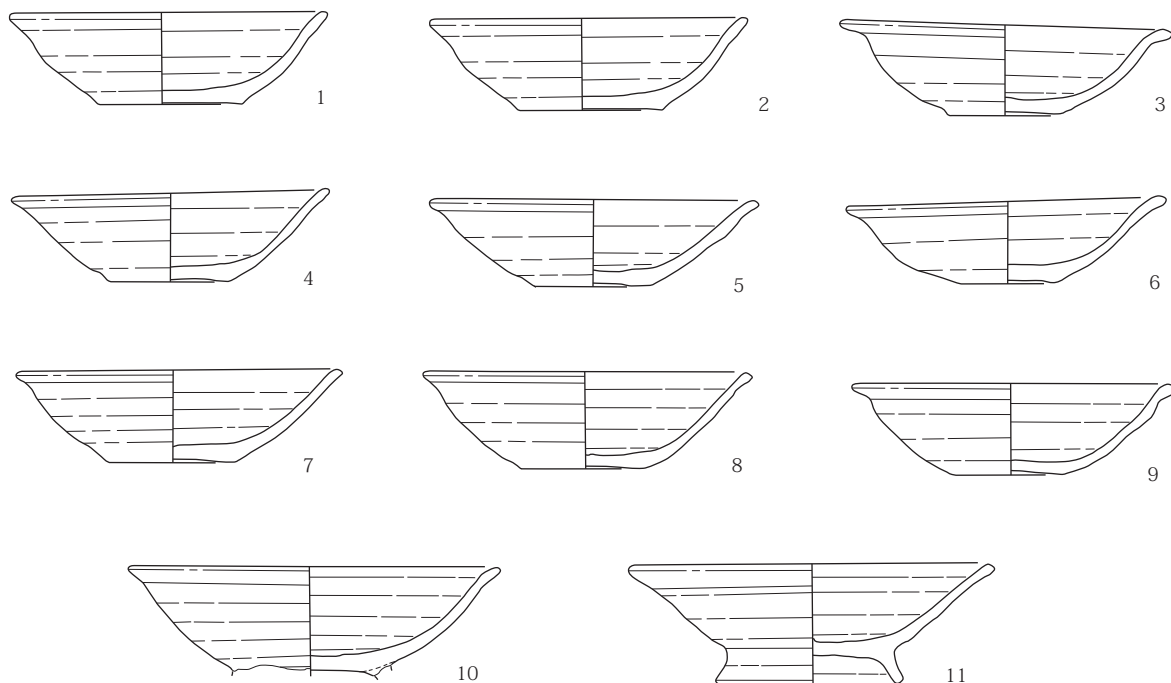


〈底面〉

土師器、須恵系土器、瓦、木製品が出土している。

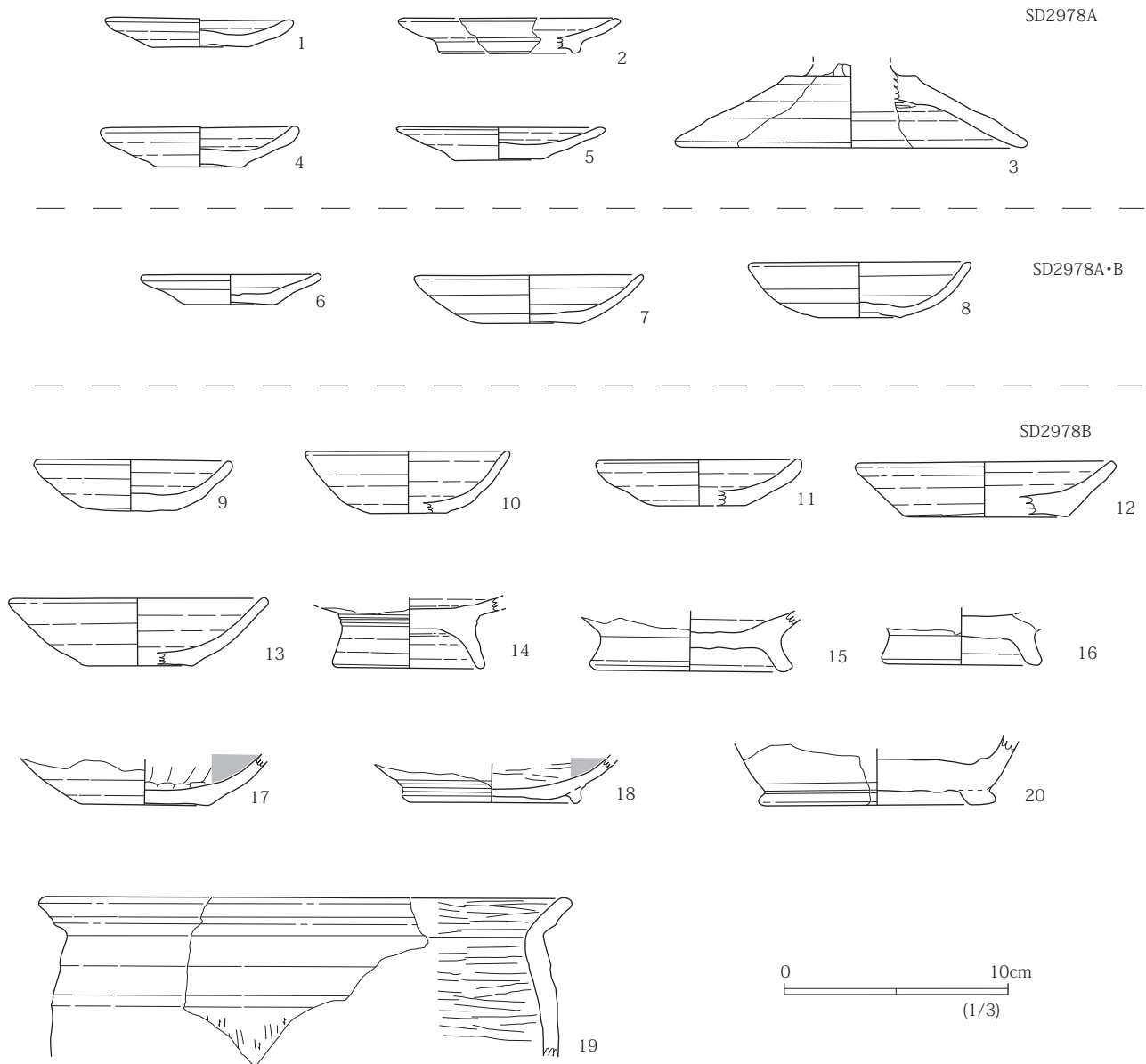
土師器は、回転糸切の坏底部破片が1点、高台坏底部破片が1点ある。須恵系土器は底部破片で坏が2点、高台坏が1点である（図版 23-15～19）。台付鉢は体部破片が1点ある。

木製品は曲物底板（図版 24-1）、燃えさし（図版 24-3）などがある。



No	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SX2975	須恵系土器 坏	ほぼ完形	12.8	5.1	3.6	底：回転糸切 簧の子状圧痕	32上	R-81	B14796
2	SX2975	須恵系土器 坏	ほぼ完形	12.6	5.2	3.6	底：回転糸切	32上	R-82	B14796
3	SX2975	須恵系土器 坏	ほぼ完形	13.2	4.3	3.5	底：回転糸切	32上	R-83	B14796
4	SX2975	須恵系土器 坏	ほぼ完形	12.6	4.8	3.6	底：回転糸切	32上	R-84	B14796
5	SX2975	須恵系土器 坏	ほぼ完形	13.2	4.5	3.5	底：回転糸切 簧の子状圧痕	32上	R-85	B14796
6	SX2975	須恵系土器 坏	ほぼ完形	12.7	3.2	3.2	底：回転糸切	32上	R-86	B14796
7	SX2975	須恵系土器 坏	ほぼ完形	12.9	5.1	3.6	底：回転糸切 簧の子状圧痕	32上	R-87	B14796
8	SX2975	須恵系土器 坏	ほぼ完形	13.1	4.8	3.8	底：回転糸切	32上	R-88	B14796
9	SX2975	須恵系土器 坏	ほぼ完形	12.9	4.2	3.6	底：回転糸切 簧の子状圧痕	32上	R-89	B14796
10	SX2975	須恵系土器 高台坏	ほぼ完形	14.9	—	—	内面：炭化物付着、高台剥離	32上	R-90	B14796
11	SX2975	須恵系土器 高台坏	ほぼ完形	14.5	7.5	4.8		32上	R-91	B14796

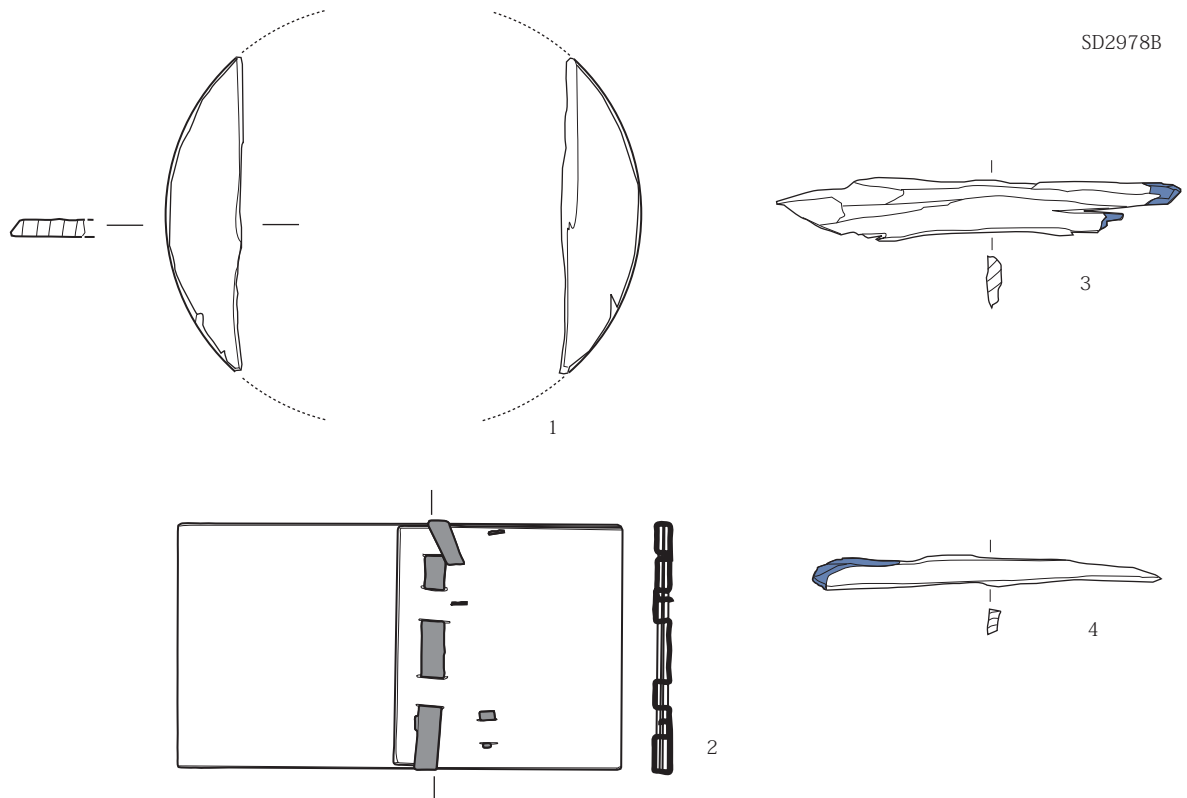
図版22 SX2975 一括土器



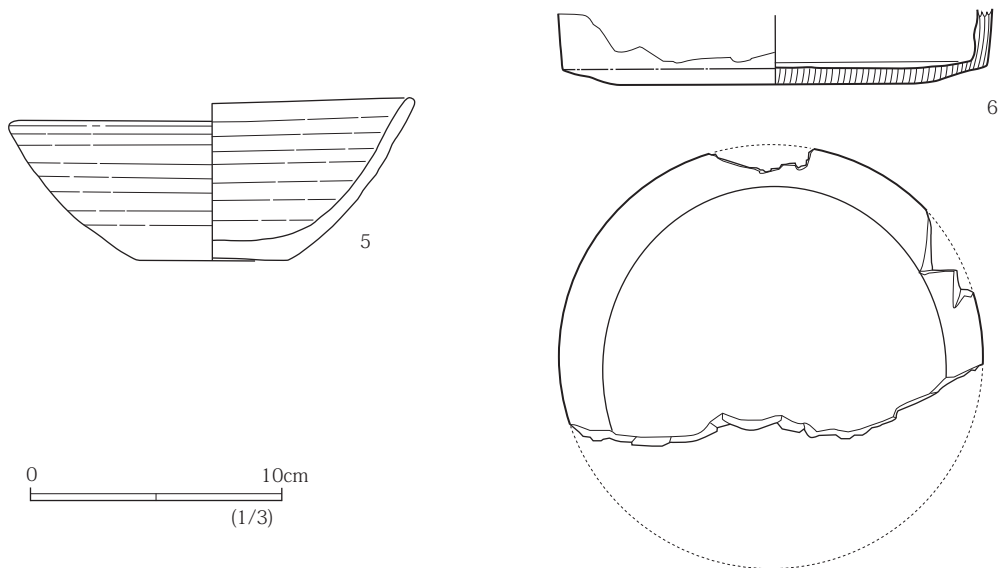
No	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SD2978A 1層	須恵系土器 小皿	ほぼ完形	8.4	4.2	1.2	底：回転糸切		53	B14795
2	SD2978A 1層	須恵系土器 高台皿	1/4	9.8	6.2	1.6	底：回転糸切		54	B14795
3	SD2978A 1層	器台高坏	脚部破片	—	15.8	—			52	B14795
4	SD2978A 3層	須恵系土器 小皿	ほぼ完形	8.8	4.0	1.8	底：回転糸切		59	B14795
5	SD2978A 3層	須恵系土器 小皿	ほぼ完形	9.6	4.0	1.5	底：回転糸切		60	B14795
6	SD2978A・B	須恵系土器 小皿	1/4	8.0	4.0	1.3	底：回転糸切		63	B14795
7	SD2978A・B	須恵系土器 小皿	ほぼ完形	10.2	4.4	2.1	底：回転糸切	32下	61	B14795
8	SD2978A・B	須恵系土器 小皿	ほぼ完形	10	3.6	2.4	底：回転糸切	32下	62	B14795
9	SD2978B 2層	須恵系土器 小皿	ほぼ完形	10	4.2	2.2	底：回転糸切	32下	65	B14795
10	SD2978B 2層	須恵系土器 小皿	1/4	11	3.4	2.8	底：回転糸切	32下	66	B14795
11	SD2978B 2層	須恵系土器 小皿	1/3	10.2	4.2	2	底：回転糸切	32下	67	B14795
12	SD2978B 2層	須恵系土器 小皿	1/4	11.8	7.2	2.4	底：回転糸切	32下	68	B14795
13	SD2978B 2層	須恵系土器 小皿	1/8	(11.8)	(5.0)	3.0	底：回転糸切	32下	69	B14795
14	SD2978B 1層	須恵系土器 高台坏	底部破片	—	6.8	—		32下	70	B14795
15	SD2978B 底面	須恵系土器 高台坏	底部破片	—	9.2	—	底：回転糸切	32下	73	B14795
16	SD2978B 底面	須恵系土器 高台坏	底部破片	—	7.2	—	底：回転糸切 胎土精良	32下	74	B14795
17	SD2978B 底面	土師器 坏	底部破片	—	5.8	—	底：回転糸切 内面：ナデ		71	B14795
18	SD2978B 底面	土師器 高台坏	底部破片	—	7.4	—	底：回転糸切 内面：ナデ	32下	72	B14795
19	SD2978B 底面	土師器 甕	口縁部破片	(24)	—	—	外面：ケズリ 内面：ミガキ		75	B14795
20	SD2978B 1層	須恵系土器 瓶	底部破片	—	10.8	—	底：敷き藁痕跡	32下	64	B14795

図版23 SD2978A・B 出土土器





SK2972



No	出土遺構・層位	種類	法量	木取	特徴	登録
1	SD2978B 底面	曲物 底板	直径17cm	板目		W-14
2	SD2978B 2層	曲物 側板	直径17cm	板目		W-37
3	SD2978B 底面	燃えさし	長16、幅2cm	割材		W-41
4	SD2978B 2層	燃えさし	長14、幅1cm	割材		W-63

No	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
5	SK2972 1層	須恵系土器 坏	完形	16.2	6.2	6.2	底：回転糸切 内外面：タール状附着物		R-76	B14795

No	出土遺構・層位	種類	法量	木取	特徴	登録
6	SK2972 1層	挽物合子	直径17cm	板目		W-3

図版24 SD2978B、SK2972 出土遺物

## v. 基本層序各層の出土遺物

基本層序各層から出土した遺物について概要を順に記す。

### 【第3層】

須恵系土器、丸瓦、平瓦類の破片が出土している。出土状況にまとまりはない。

須恵系土器はいずれも坏類の破片で、底部数は坏が1点、高台坏・皿類が3点である。このうち高台皿（図版 25-2）を図示した。

### 【第4層】

須恵系土器、白磁、丸瓦、平瓦類の破片が出土している。須恵系土器と白磁は、調査区北東部からややまとまって出土している。

須恵系土器は坏類の破片で、底部数は坏が5点、高台皿が1点である。白磁は皿の破片が2点（図版 51-170・171）ある（太宰府市分類Ⅳ類、Ⅴ-2a類）。このうち須恵系土器高台皿（図版 25-3）を図示した。

### 【第5層】

土師器、黒色土器、須恵器、須恵系土器、丸瓦、平瓦が出土している。須恵系土器は、調査区北東部からややまとまって出土している。

土師器は坏、甕類がある。坏類の底部数は坏が2点、高台坏が3点、甕は口縁部が1点である。黒色土器は内外面黒色処理された高台坏底部破片が1点ある。須恵器は坏、瓶、甕類がある。坏はヘラ切の底部破片が2点、瓶体部破片が4点、甕体部破片が3点である。須恵系土器は坏・小皿類の破片が多量に出土しており、底部数は坏が25点、小皿が18点、不明が10点で、高台坏・皿類が3点である。平瓦は、類型を識別できたものとしてⅡC類が1点ある。このうち須恵系土器小皿4点（図版 25-4～7）、高台皿1点（図版 25-8）、坏3点（図版 25-9～11）を図示した。

### 【第6層】

土師器、須恵器、須恵系土器、丸瓦、平瓦、木製品が出土している。出土状況にまとまりはない。

土師器は坏、甕類がある。坏類の底部数は坏が5点、高台碗が1点、甕は口縁部が7点である。須恵器は坏、甕類がある。坏は回転糸切の底部破片が1点、甕体部破片が2点である。須恵系土器は多量の坏類破片に加え、台付鉢、脚付土器が出土している。坏類は底部の数でみると坏が95点、高台坏は18点である。台付鉢は台部破片が2点、脚付土器は脚部破片が2点である。このうち須恵系土器小皿1点（図版 25-12）、高台皿1点（図版 25-13）、脚付土器2点（図版 25-15・16）、土師器高台碗1点（図版 25-14）を図示した。碗は内外黒色処理された土器で、1～7b層出土の口縁部破片に同形態とみられるものがある（図版 25-1）。

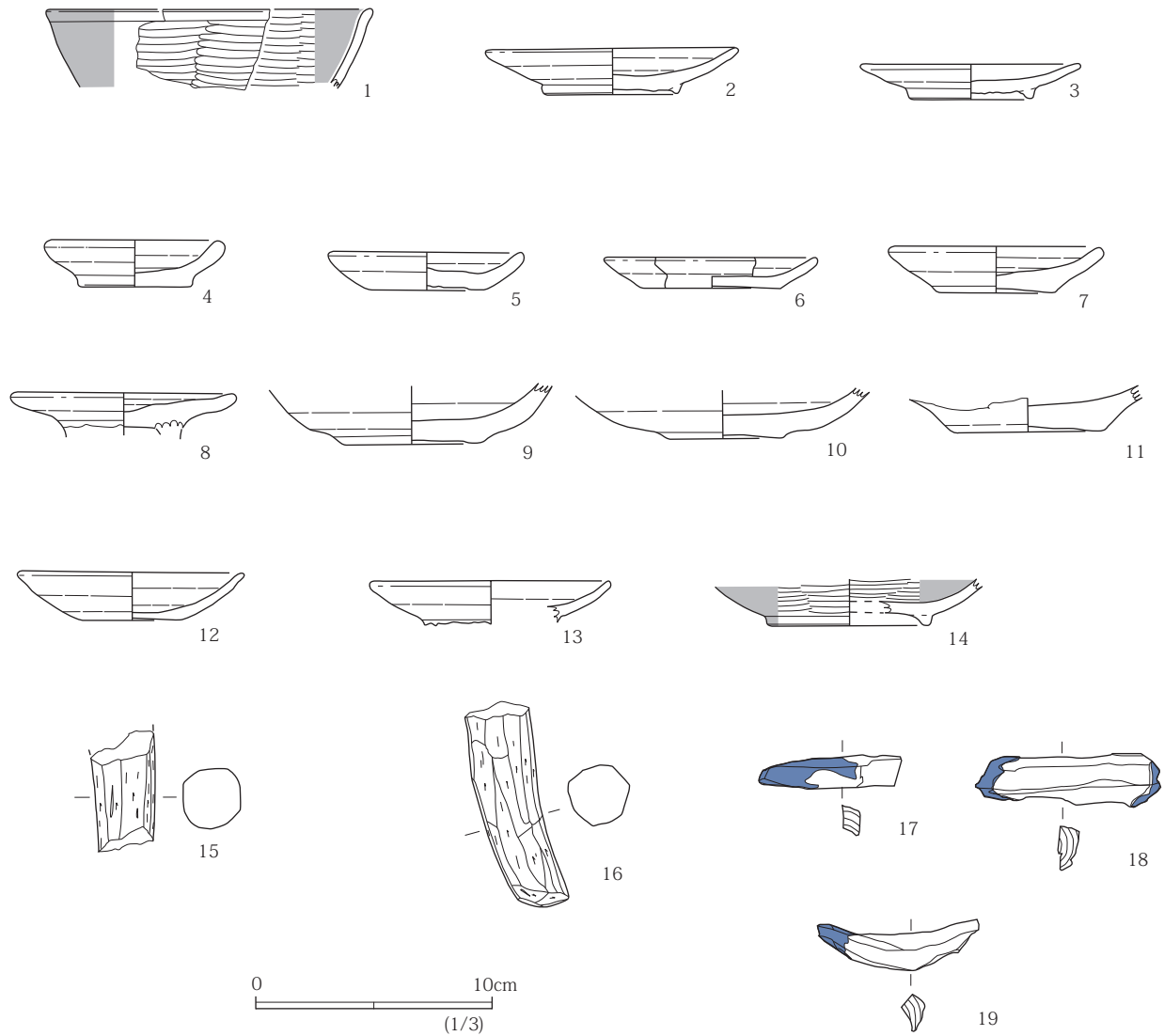
木製品は燃えさし（図版 25-17～19）が出土している。

### 【第7層】

#### 《第7a層》

土師器、須恵系土器、丸瓦、平瓦、木製品が出土している。調査区北半部からまとまって出土して





No	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	第1~7b層	土師器 埴	1/8	(13.9)	—	—	内外面黒色処理		R-1	B14790
2	第3層	須恵系土器 高台皿	完	10.6	5.8	2.0			R-2	B14790
3	第4b層	須恵系土器 高台皿	完	9.2	5.2	1.5			R-3	B14790
4	第5層	須恵系土器 小皿	完	7.6	5.0	2.0	底：回転糸切	33上	R-4	B14790
5	第5層	須恵系土器 小皿	完	8.2	5.0	1.6	底：回転糸切	33上	R-5	B14790
6	第5層	須恵系土器 小皿	1/4	8.8	6.0	1.3	底：回転糸切	33上	R-6	B14790
7	第5層	須恵系土器 小皿	2/3	9.0	5.0	2.0	底：回転糸切	33上	R-7	B14790
8	第5層	須恵系土器 高台皿	1/2	9.6	—	—		33上	R-8	B14790
9	第5層	須恵系土器 坏	底部破片	—	6.0	—	底：回転糸切	33上	R-9	B14790
10	第5層	須恵系土器 坏	底部破片	—	5.0	—	底：回転糸切	33上	R-10	B14790
11	第5層	須恵系土器 坏	底部破片	—	6.4	—	底：回転糸切	33上	R-11	B14790
12	第6層	須恵系土器 小皿	完	9.4	4.2	2.0	底：回転糸切	33中	R-12	B14790
13	第6層	須恵系土器 高台皿	1/2	10.2	—	—	底：回転糸切	33中	R-13	B14790
14	第6層	土師器 高台埴	1/8	—	6.8	—	内外面黒色処理	33中	R-14	B14790
15	第6層	脚付土器	脚部	—	—	—		33中	R-15	B14790
16	第6層	脚付土器	脚部	—	—	—		33中	R-16	B14790
No	出土遺構・層位	種類	法量			木取	樹種・特徴	登録		
17	第6層	木製品 燃えさし	長6、幅1.5cm			割材	マツ	W-58		
18	第6層	木製品 燃えさし	長8、幅2.5cm			割材	マツ	W-59		
19	第6層	木製品 燃えさし	長7、幅1.5cm			割材	マツ	W-60		

図版25 第3~6層 出土遺物

いる。

土師器は坏、甕類がある。坏類の底部数は坏が2点、高台坏が1点、甕は口縁部が6点ある。須恵系土器は多量の坏類破片に加え、台付鉢が出土している。坏類の底部数は坏が159点、高台坏は18点で、坏の中に墨書土器が1点含まれる。台付鉢は口縁部破片が1点ある。平瓦は、類型を識別できたものとしてⅡ類が3点、ⅡC類が2点ある。このうち須恵系土器坏3点（図版26-1・2・5）、小皿1点（図版26-3）を図示した。図版26-1・2は墨書土器である。

木製品は燃えさし（図版28-6・7・10）が出土している。

#### 《第7b層》

土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器、丸瓦、平瓦、木製品、金属製品が出土している。調査区北半部からまとまって出土している。

土師器は坏、甕類がある。坏類の底部数は坏が25点、高台坏が1点、甕は口縁部が24点である。須恵器は瓶、甕類がある。瓶底部破片が2点、甕体部破片が3点である。須恵系土器は多量の坏類破片に加え、台付鉢、脚付土器が出土している。坏類は底部の数でみると坏が161点、高台坏は66点である。台付鉢は口縁部破片が6点、台部破片が2点ある。灰釉陶器は小型の壺（図版52-152）である。平瓦は、類型を識別できたものとしてⅡC類が1点ある。このうち須恵系土器坏11点（図版26-6～16）、高台坏5点（図版27-1～5）、高台皿1点（図版27-6）、台付鉢1点（図版27-8）、土師器甕2点（図版27-10・11）、須恵器大瓶2点（図版27-13・14）、灰釉陶器壺1点（図版27-15）を図示した。

木製品は燃えさし（図版28-5・8・9）、金属製品は鉄鉗（図版28-14）が出土している。

また、a・bに分けられなかったが、第7層で一括して取り上げた遺物には土師器、黒色土器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器、丸瓦、平瓦、木製品がある。

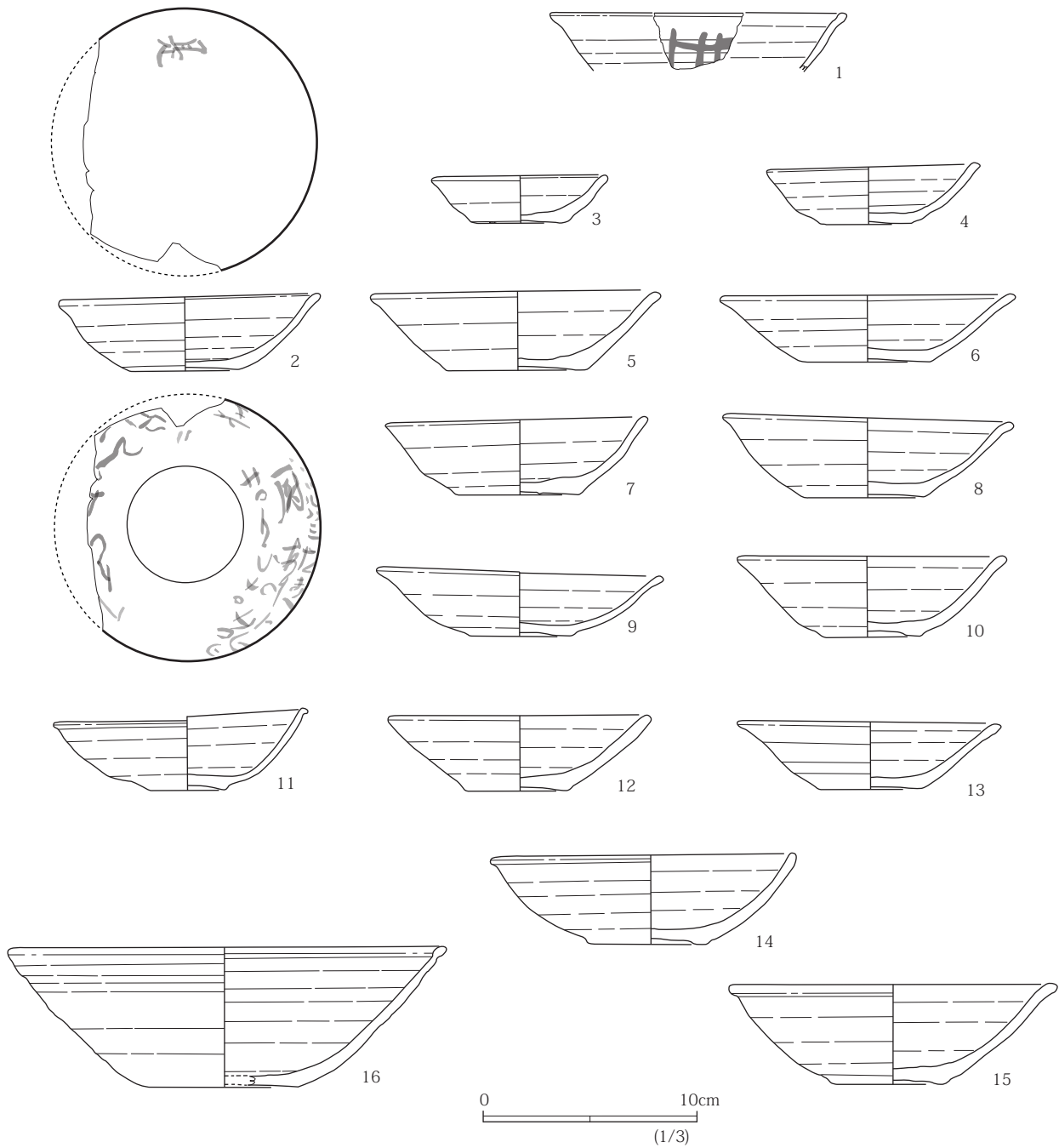
土師器は坏、甕類がある。底部数は坏が47点、高台坏が4点、甕は口縁部が14点ある。黒色土器は内外面黒色処理された高台坏底部破片が1点ある。須恵器は瓶、甕類がある。短頸壺の底部破片が1点、瓶体部破片が2点、甕体部破片が3点である。須恵系土器は多量の坏類破片に加え、台付鉢、脚付土器が出土している。坏類は底部の数でみると坏が613点、高台坏は85点で、墨書土器が1点含まれる。台付鉢は台部破片が1点、脚付土器は脚部破片が1点である。灰釉陶器は、瓶類の体部破片が2点である。平瓦は、類型を識別できたものとしてⅠ類が3点、ⅡB類が4点、ⅡC類が9点ある。このうち須恵系土器小皿1点（図版26-4）、台付鉢1点（図版27-7）、土師器坏1点（図版27-9）、脚付土器（図版27-12）を図示した。

木製品は曲物底板（図版28-1）、箸状木製品（図版28-13）、燃えさし（図版28-2～4・11・12）が出土している。

#### 【第10層】

土師器、須恵器、須恵系土器、丸瓦、平瓦、木製品が出土している。出土状況にまとまりはない。

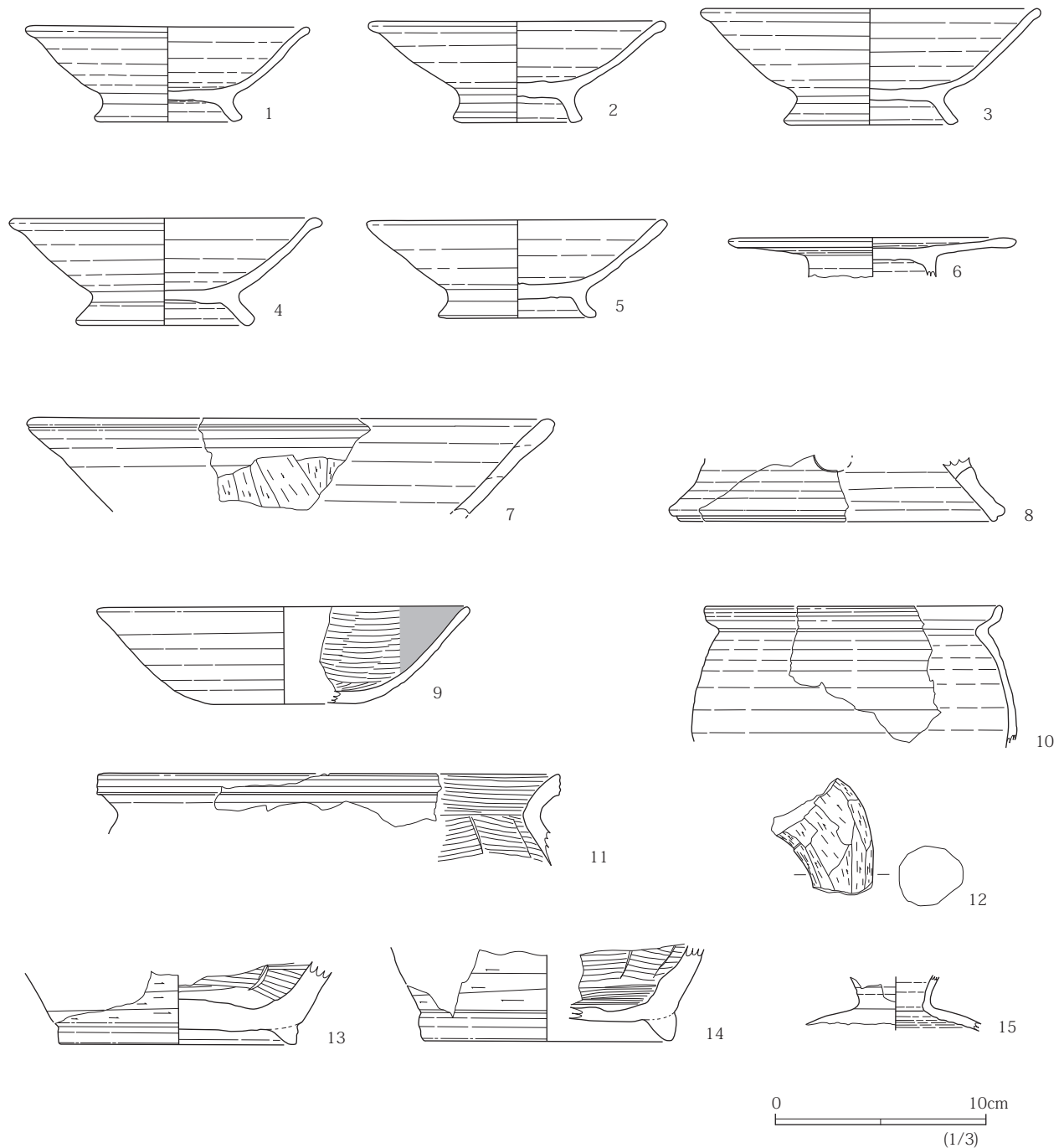
土師器は坏、甕類がある。坏類の底部数は坏が3点、高台坏が1点、甕は口縁部が2点ある。須恵



No	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	第7a層	須恵系土器 坏	口縁部破片	13.8	—	—	墨書土器 「九字？」	33下	R-44	B14791
2	第7a層	須恵系土器 坏	ほぼ完形	12.4	5.0	3.6	底：回転糸切 墨書土器	33下	R-17	B14791
3	第7a層	須恵系土器 小皿	ほぼ完形	8.2	4.4	2.1	底：回転糸切 底部周縁：回転ケズリ	33下	R-19	B14791
4	第7層	須恵系土器 小皿	ほぼ完形	10.0	4.0	2.7	底：回転糸切 簧の子状圧痕		R-42	B14791
5	第7a層	須恵系土器 坏	ほぼ完形	13.5	4.7	6.5	底：回転糸切		R-18	B14791
6	第7b層	須恵系土器 坏	ほぼ完形	14.0	6.0	3.2	底：回転糸切	33下	R-20	B14791
7	第7b層	須恵系土器 坏	ほぼ完形	12.0	5.6	3.6	底：回転糸切 内面：灯心状すす付着	33下	R-21	B14791
8	第7b層	須恵系土器 坏	ほぼ完形	13.6	5.5	3.9	底：回転糸切 内面：灯心状すす付着	33下	R-22	B14791
9	第7b層	須恵系土器 坏	ほぼ完形	13.4	4.8	3.1	底：回転糸切	33下	R-23	B14791
10	第7b層	須恵系土器 坏	ほぼ完形	12.6	4.5	3.8	底：回転糸切	33下	R-24	B14792
11	第7b層	須恵系土器 坏	ほぼ完形	11.8	3.6	3.7	底：回転糸切	33下	R-25	B14792
12	第7b層	須恵系土器 坏	ほぼ完形	12.2	4.8	3.6	底：回転糸切 内面：灯心状すす付着	33下	R-26	B14792
13	第7b層	須恵系土器 坏	ほぼ完形	12.4	4.8	3.2	底：回転糸切	33下	R-27	B14792
14	第7b層	須恵系土器 坏	ほぼ完形	13.6	5.2	4.2	底：回転糸切 内面：灯心状すす付着	33下	R-28	B14792
15	第7b層	須恵系土器 坏	ほぼ完形	15.4	5.2	4.7	底：回転糸切 内面：灯心状すす付着	33下	R-29	B14792
16	第7b層	須恵系土器 坏	1/2	20.6	7.0	6.5	底：回転糸切 外面にタール状付着物	33下	R-30	B14792

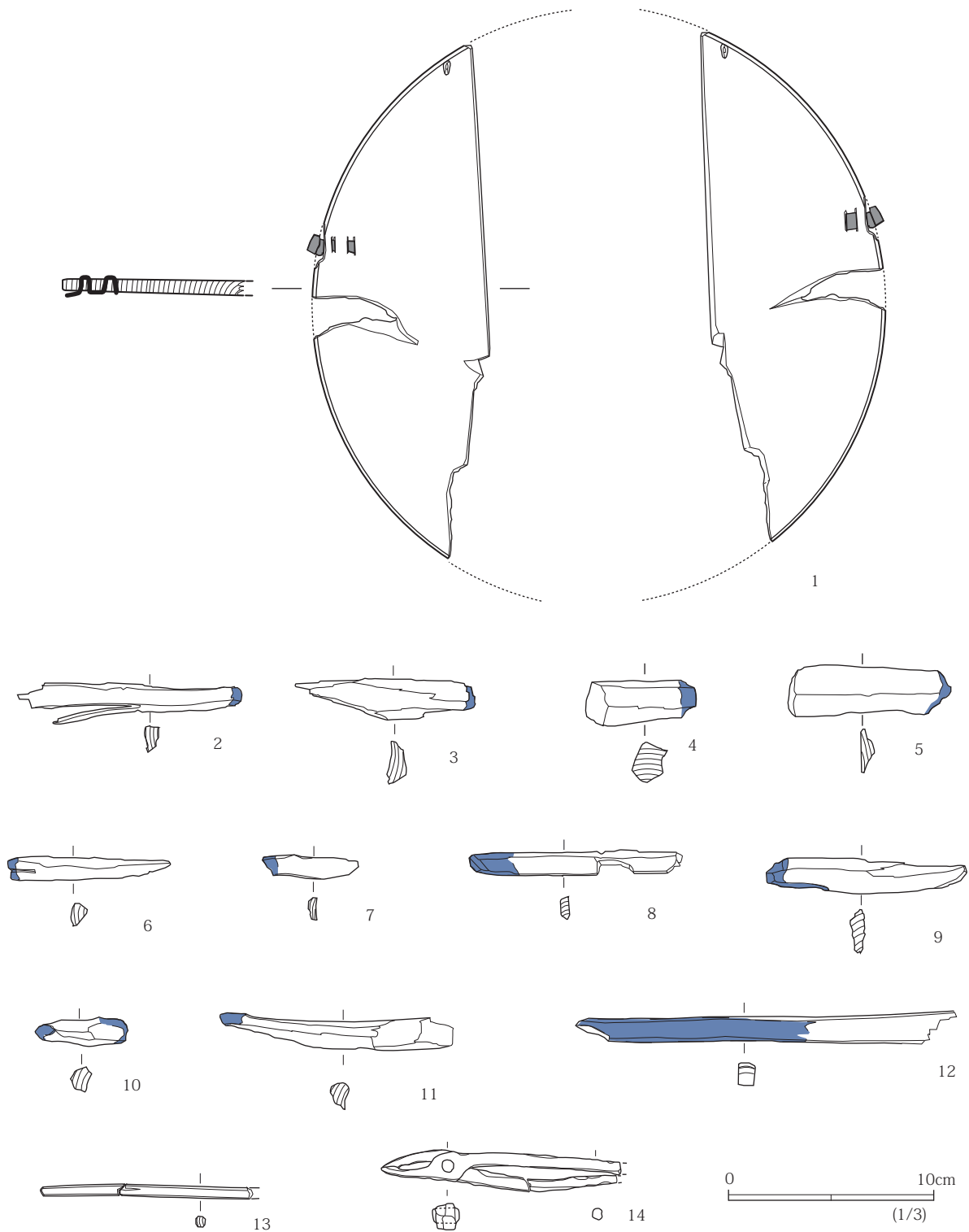
図版26 第7層 出土土器(1)





No	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	第7b層	須恵系土器 高台杯	ほぼ完形	13.5	7.0	4.5	底：回転糸切 高台下端：篋の子状圧痕		R-31	B14793
2	第7b層	須恵系土器 高台杯	ほぼ完形	14.2	6.2	4.8	底：回転糸切 高台下端：篋の子状圧痕		R-32	B14793
3	第7b層	須恵系土器 高台杯	ほぼ完形	16.2	8.2	5.5	底：回転糸切 高台下端：篋の子状圧痕	33下	R-33	B14793
4	第7b層	須恵系土器 高台杯	ほぼ完形	14.8	8.4	5.0	底：回転糸切 高台下端：篋の子状圧痕	33下	R-34	B14793
5	第7b層	須恵系土器 高台杯	ほぼ完形	14.2	7.6	3.6	底：回転糸切		R-35	B14793
6	第7b層	須恵系土器 高台皿	台部欠損	13.6	(6.6)	—		33下	R-36	B14793
7	第7層	須恵系土器 台付鉢	口縁部破片	(25.0)	—	—	外面：縦ケズリ		R-45	B14793
8	第7b層	須恵系土器 台付鉢	台部破片	—	(16.0)	—	円窓	33下	R-46	B14793
9	第7層	土師器 杯	1/4	15.6	7.4	4.5	底：回転糸切 内面：黒色処理		R-43	B14793
10	第7b層	土師器 甕	口縁部破片	(14.0)	—	—	外面：炭化物付着		R-37	B14793
11	第7b層	土師器 甕	口縁部破片	(22.0)	—	—	外面：炭化物付着		R-38	B14793
12	第7層	脚付土器	脚部	—	—	—	底：回転糸切	33下	R-47	B14793
13	第7b層	須恵系土器 大瓶	底部破片	—	(11.0)	—	体部外面下端：回転ケズリ 大戸産	33下	R-39	B14793
14	第7b層	須恵系土器 大瓶	底部破片	—	(12.0)	—	体部外面下端：回転ケズリ 大戸産		R-40	B14793
15	第7b層	灰釉陶器 壺	頸部破片	—	—	—		33下	R-41	B14793

図版27 第7層 出土土器(2)



No	出土層位	グリット	種類	法量	木取	特徴	登録
1	第7層	IQ66	曲物 底板	直径31cm	板目	樺皮綴じ	W-4
2	第7層	IQ66	燃えさし	長11、幅1cm	割材	マツ	W-43
3	第7層	IQ66	燃えさし	長16、幅2cm	割材	マツ	W-44
4	第7層	IQ66	燃えさし	長8.5、幅2cm	割材	マツ	W-45
5	第7b層	IO66	燃えさし	長5.5、幅2cm	割材	マツ	W-46
6	第7a層		燃えさし	長8、幅1.5cm	割材	マツ	W-51
7	第7a層		燃えさし	長5、幅1cm	割材	マツ	W-52
8	第7b層	IQ66	燃えさし	長11、幅1cm	割材	マツ	W-53
9	第7b層	IQ66	燃えさし	長10.5、幅2cm	割材	マツ	W-54
10	第7a層		燃えさし	長5、幅1.5cm	割材	マツ	W-55
11	第7層		燃えさし	長12、幅1.5cm	割材	マツ	W-56
12	第7層	IQ67	燃えさし	長18、幅1.5cm	割材	板材を割り割いたもの	W-57
13	第7層	IQ66	箸状製品	長10.5、幅0.5cm		箸か	W-64
14	第7b層	IO66	鉄針	長12.0、幅2.0cm		鉄製 図版33-下	I-01

図版28 第7層 出土木製品・鉄製品

器は瓶、甕類がある。いずれも体部破片が1点である。須恵系土器は多量の坏類破片が出土している。底部数は坏が30点、高台坏は6点ある。平瓦は、類型を識別できたものとしてⅡB類が1点ある。図示したものはない。

木製品は燃えさし（図版 30-2）が出土している。

#### 【第 10～19 層】

土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器、丸瓦、平瓦、木製品が出土している。出土状況にまとまりはない。

土師器は坏、甕類がある。坏類の底部数は坏が9点、高台坏が1点、甕は体部破片が1点である。須恵器は坏、甕類がある。坏口縁部破片が1点、甕体部破片が3点である。須恵系土器は坏、台付鉢破片が出土している。坏底部破片が4点、台付鉢は1点である。灰釉陶器は小瓶の肩部破片である。平瓦は、類型を識別できたものとしてⅡ類が1点ある。図示したものはない。

木製品は、主なものでは13b層から挽物皿（図版 29-1）、板状木製品（図版 29-5・7）、14層から径1.7cm、長さ30cmの棒状丸材（図版 30-5）、用途不明の組み合わせ部材（図版 29-3）、曲物底板（図版 29-2）、方形板材（図版 29-4）、割材木杭（図版 30-7）などが出土している。

#### 【第 21 層】

土師器、須恵器、丸瓦、平瓦が出土している。出土状況にまとまりはない。

土師器は甕底部破片が1点である。須恵器は坏、瓶、甕類がある。坏は漆が付着した回転糸切の底部破片が1点、大戸産瓶体部破片が1点、甕体部破片が2点である。平瓦は、類型を識別できたものとしてⅠ類が1点、Ⅱ類が6点ある。丸瓦は、類型を識別できたものとしてⅠ類が1点、Ⅱ類が3点ある。図示したものはない。

#### 【第 22 層】

土師器、須恵器、丸瓦、平瓦、道具瓦が出土している。出土状況にまとまりはない。

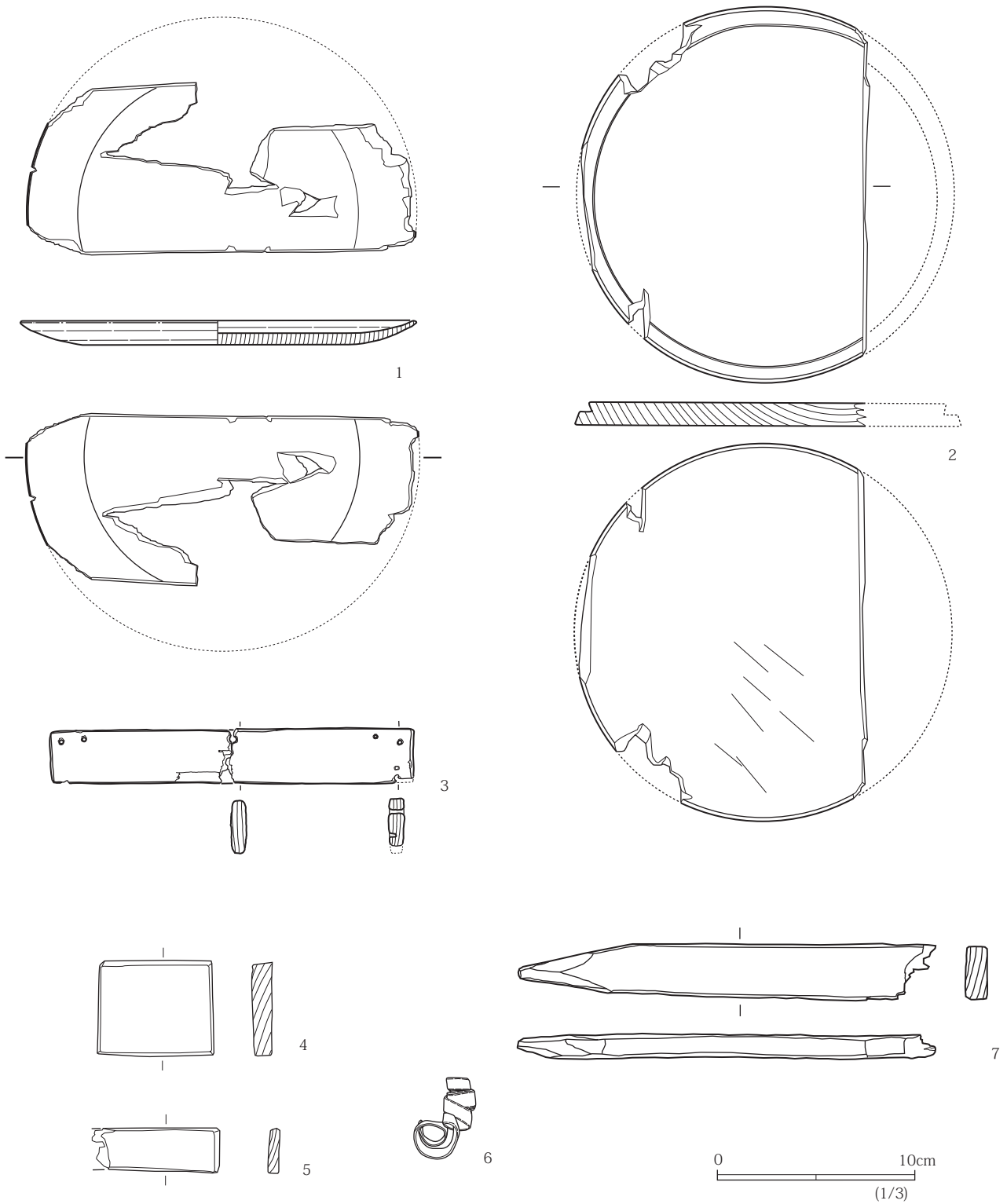
土師器は坏口縁部破片が1点（図版 31-1）、須恵器は回転糸切底の坏底部破片が1点（図版 31-2）、甕体部破片が7点ある。平瓦は、類型を識別できたものとしてⅡ類が12点ある。道具瓦は棟平瓦もしくは隅木蓋瓦とみられる破片が1点（図版 31-3）ある。

#### 【第 23 層】

土師器、須恵器、丸瓦、平瓦、塼が出土している。出土状況にまとまりはない。

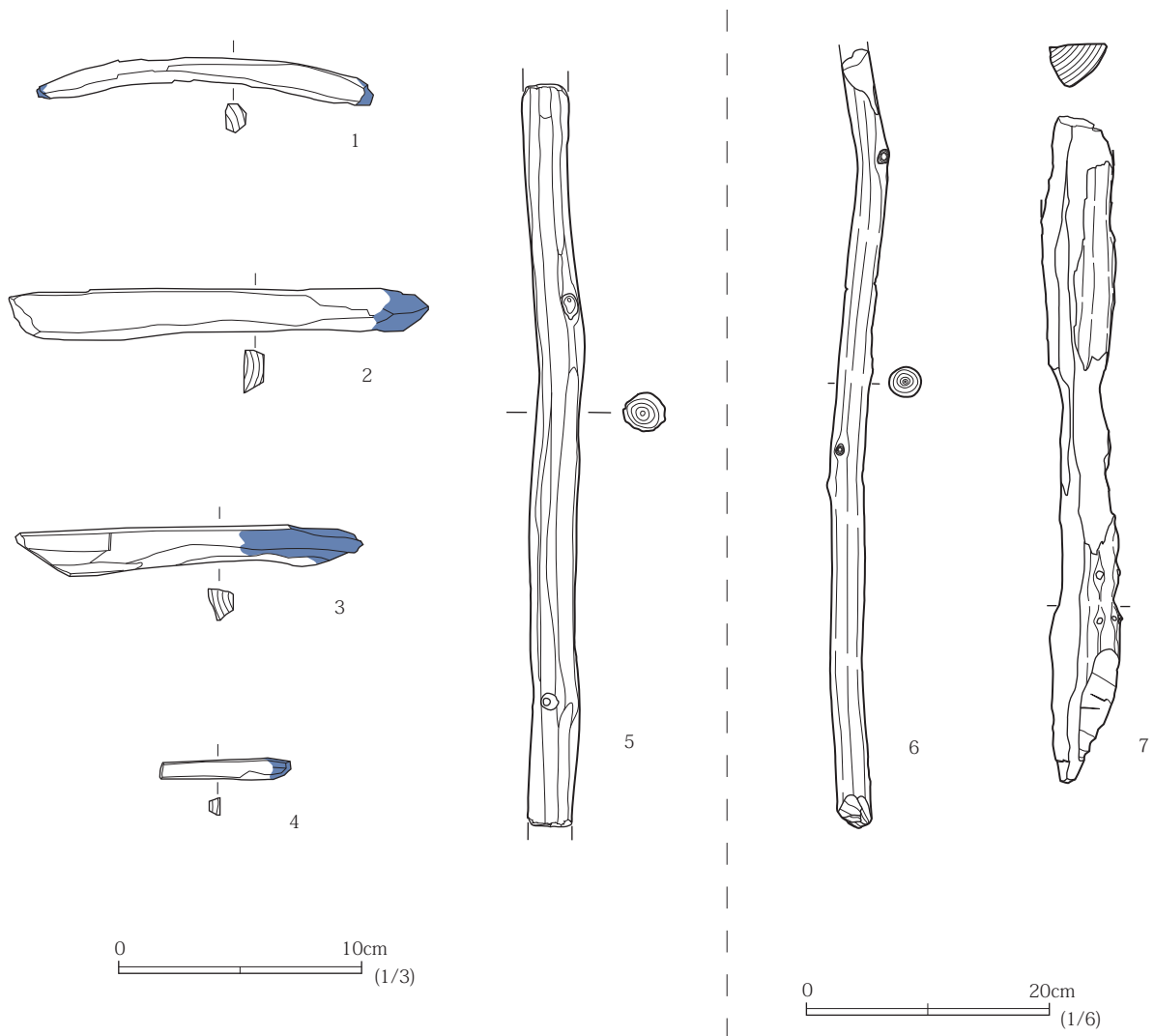
土師器は甕体部破片が1点、須恵器は甕体部破片が8点ある。平瓦は、類型を識別できたものとしてⅠA類が2点、Ⅱ類が6点ある。丸瓦は、類型を識別できたものとしてⅡ類が8点ある。塼が1点（図版 31-4）ある。





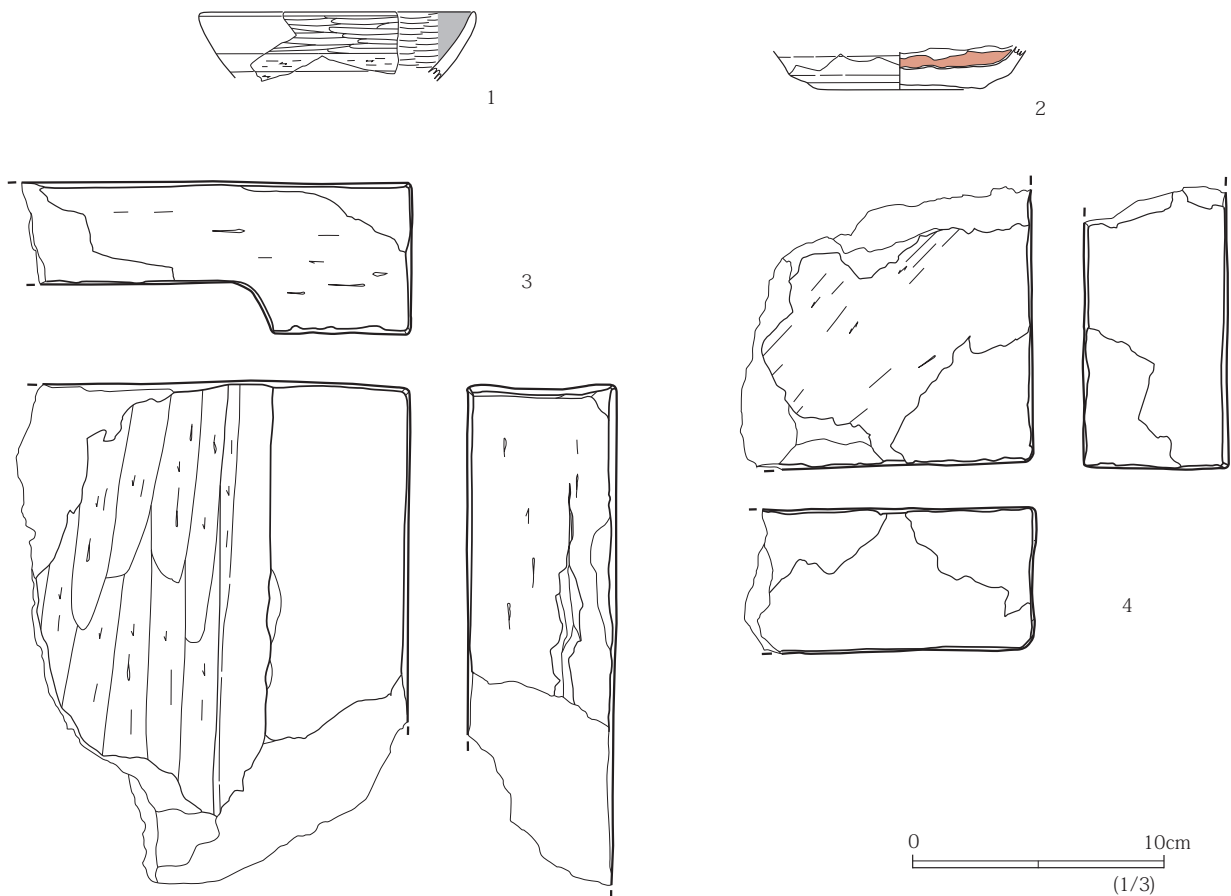
No	出土層位	グリット	種類	法量	木取	特徴	登録
1	第13b層	IO65	挽物 皿	直径20cm	柾目		W-1
2	第14層	IR66	曲物 底板	直径20cm	板目		W-6
3	第14層	IP66	組合部材	長17.4、径2.7cm	割材	両端に釘孔2個1対、中央に孔1	W-32
4	第14層	IR66	方形板	6×5×1cm	板目		W-66
5	第13b層	IO66	板状	7×2.5×0.5cm	板目		W-67
6	第14層	IQ66	櫛皮			曲げ物結縛用、未使用	W-68
7	第13b層	IO65	板状	21×3.0×0.8cm	板目	一端を尖らせる	W-71

図版29 第10～15層 出土木製品(1)



No	出土層位	グリット	種類	法量	木取	特徴	登録
1	第11層	IO66	燃えさし	長14、幅1.5cm	割材	マツ	W-47
2	第10層	IO65	燃えさし	長17、幅2cm	割材	マツ	W-48
3	第14層	IP65	燃えさし	長14.5、幅2cm	割材	マツ	W-49
4	第14層	IP66	燃えさし	長5.5、幅1cm	割材	マツ	W-50
5	第14層	IP66	棒状	長30.5、径1.7cm	丸材	両端欠損	W-29
6	第15層	IO66	棒状	長81、径3.3cm	丸材	一端欠損	W-24
7	第14層	IP66	杭材	長68、径7.5cm	割材	立っていたものではない。風化顕著	W-39

図版30 第10～15層 出土木製品(2)



No	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	第22a・b層	土師器 坏	口縁部破片	15.6	7.4	4.5	外面下部：回転ケズリ 内面：黒色処理		R-48	B14794
2	第22a・b層	須恵器 坏	底部破片	—	6.6	—	底：回転糸切 内面：漆付着刷毛目		R-49	B14794
3	第22a・b層	道具瓦	端部破片	—	—	—	棟平瓦 or 隅木蓋瓦か？	33下	R-50-1	B14794
4	第23a・b層	埴	端部破片	—	—	—		33下	R-50-2	B14794

図版31 第22・23層 出土遺物



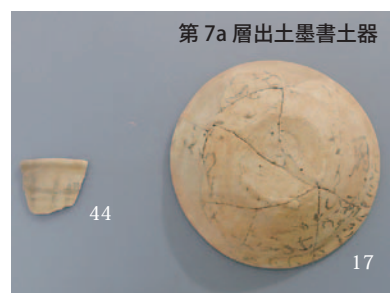
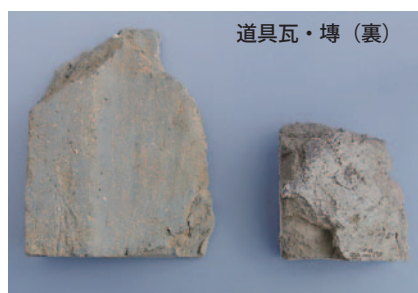
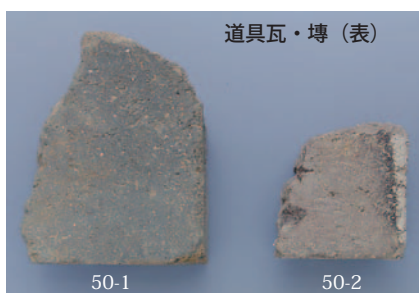
SX2975 出土土器



SD2978 溝出土土器

図版 32 鴻ノ池地区 出土遺物写真 (1)





図版 33 鴻ノ池地区 出土遺物写真 (2)

## (2) 政庁南西地区

### A. 基本層序 (図版 37)

政庁南西地区は政庁の西側へ南から入り込む広い沢の内部に位置する。全体が南へ傾斜すると共に、その中央部東端を縦断する沢筋を境にこれより東側は西へ、西側は東へ緩やかに傾いている。遺構確認面の比高差は東西で最大 0.7 m、南北で最大 1.7 m あり、南側への傾斜が強い。東部北半と中央部南半では、現代の畑の畝間が遺構面まで及んでいる。以下に層序の特徴を記す。なお、第Ⅶ・Ⅸ層はそれぞれ SK2986 土壌堆積土・SX2979 整地層であるが、広域に分布することから基本層序に含めてその前後関係を示した。

【第Ⅰ層】調査区全体を覆う黒褐色 (7.5YR3/2) シルトの表土で、厚さは 20 ~ 40cm である。西部では、地山 (第Ⅺ層) 直上に堆積している。

【第Ⅱ層】黒褐色 (10YR3/2) シルト層で、調査区の中央部東端を南北に縦断する沢筋に沿ってその両側に堆積している。北~中央部では厚さ 10 ~ 20cm で分布するが、南部で東西に広がり、厚みを増す。南端部では 1.0 m 程の厚みがあり、周辺の遺構を壊して堆積している。

【第Ⅲ層】炭化物を多量に含む層で、褐色 (7.5YR4/3) シルトのⅢ a 層と黒褐色 (10YR3/2) シルトのⅢ b 層に細分される。Ⅲ a 層は調査区北寄りの中央~東部に堆積し、厚さは 5 ~ 30cm である。Ⅲ b 層は調査区の北部中央に堆積しており、須恵系土器の小片が多く含まれる。厚さは 5 ~ 15cm である。

【第Ⅳ層】暗赤褐色 (5YR3/2) の砂質シルト層で、調査区北寄りの中央~東部に堆積している。北部中央では SX2980 石敷面を直接覆っており、層中には小礫と酸化鉄が多く含まれる。厚さは 5 ~ 15cm である。



図版 34 政庁南西地区 全景写真



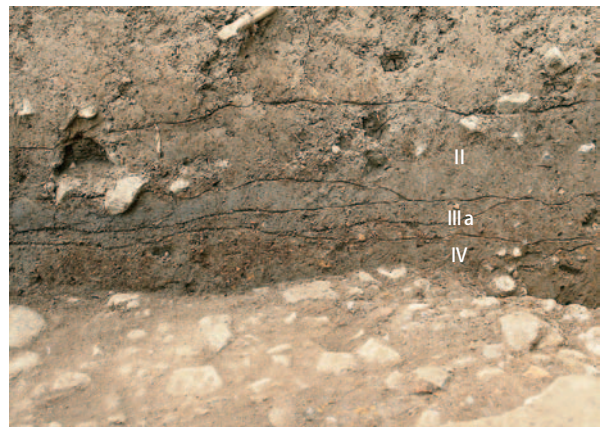




- 【第V層】暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト層で、調査区北東部に部分的に堆積している。層中に灰白色火山灰のブロックを含み、厚さは5cm前後である。
- 【第VI層】暗褐色（10YR3/3）シルト層で、調査区北東部に堆積している。厚さは5～20cmである。
- 【第VII層】炭化物を含む暗褐色（7.5YR3/4）シルト層で、調査区東部全体に広がるSK2986土壌の堆積土である。層中には礫が集中する部分が認められ、断ち割った箇所で見ると、厚さは20cm前後である。SX2980石敷遺構の東部はこの土壌によって壊されている。
- 【第VIII層】黒褐色（7.5YR2/2～3/2）シルト層で、沢筋に沿った低い部分と調査区南半の中央部に堆積している。分布する範囲ではSX2980石敷面を直接覆っており、層中には礫と炭化物が多く含まれる。厚さは10～20cmである。
- 【第IX層】礫を多量に含む暗褐～灰褐色シルトの整地層（SX2979）で、調査区北端から南部にかけてSX2980石敷面の直下に広がる。断ち割った箇所で見ると、厚さは10～50cmで、沢筋に沿ってその周辺が南側ほど厚くなっている。
- 【第X層】黒褐色（7.5Y2/2）シルトの旧表土で、調査区北東隅に残る。
- 【第XI層】灰黄褐～にぶい黄褐色の砂質シルト～シルト層で、地山土である。砂質シルト中には酸化鉄が縞状に集積しており、更に下層は砂礫層となる。



北東部の第V層分布状況（南東から）



W74 付近の北壁（南から）

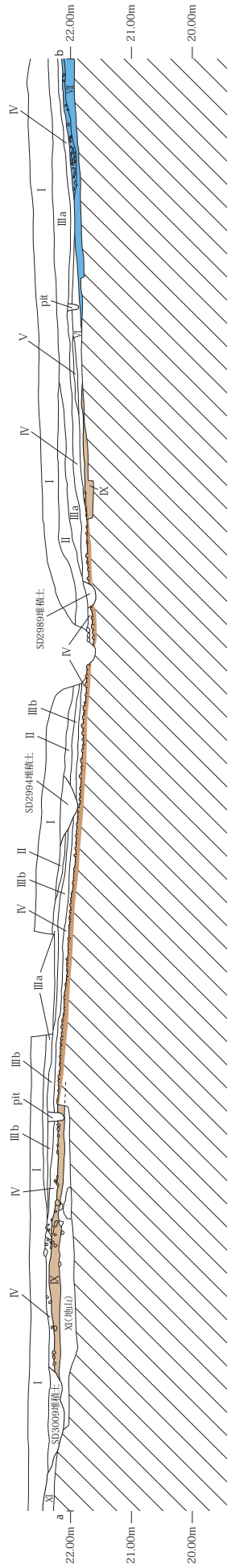


W81 付近の北壁（南西から）

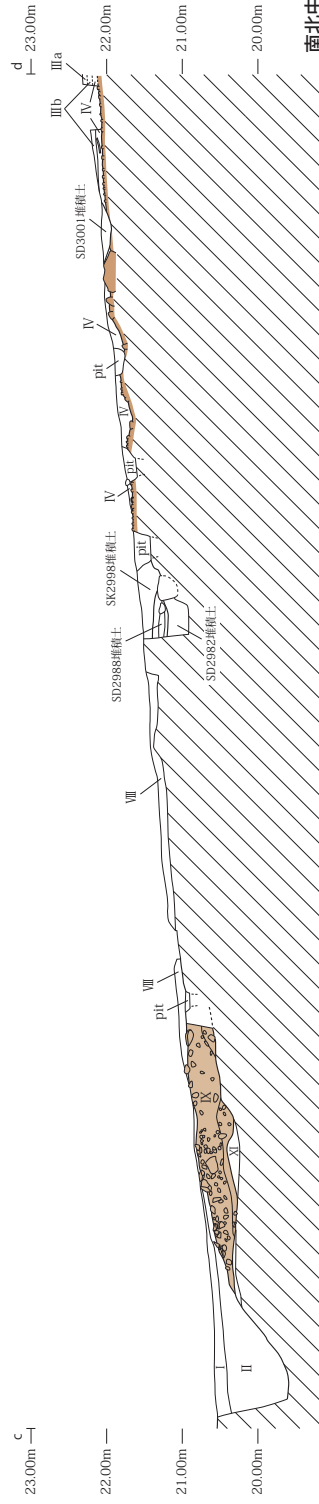


W83～89 付近の北壁（南西から）

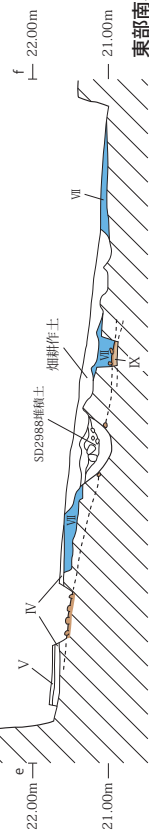
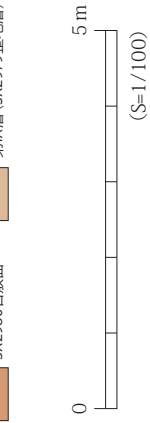
図版 36 政庁南西地区 北壁写真



調査区北壁断面

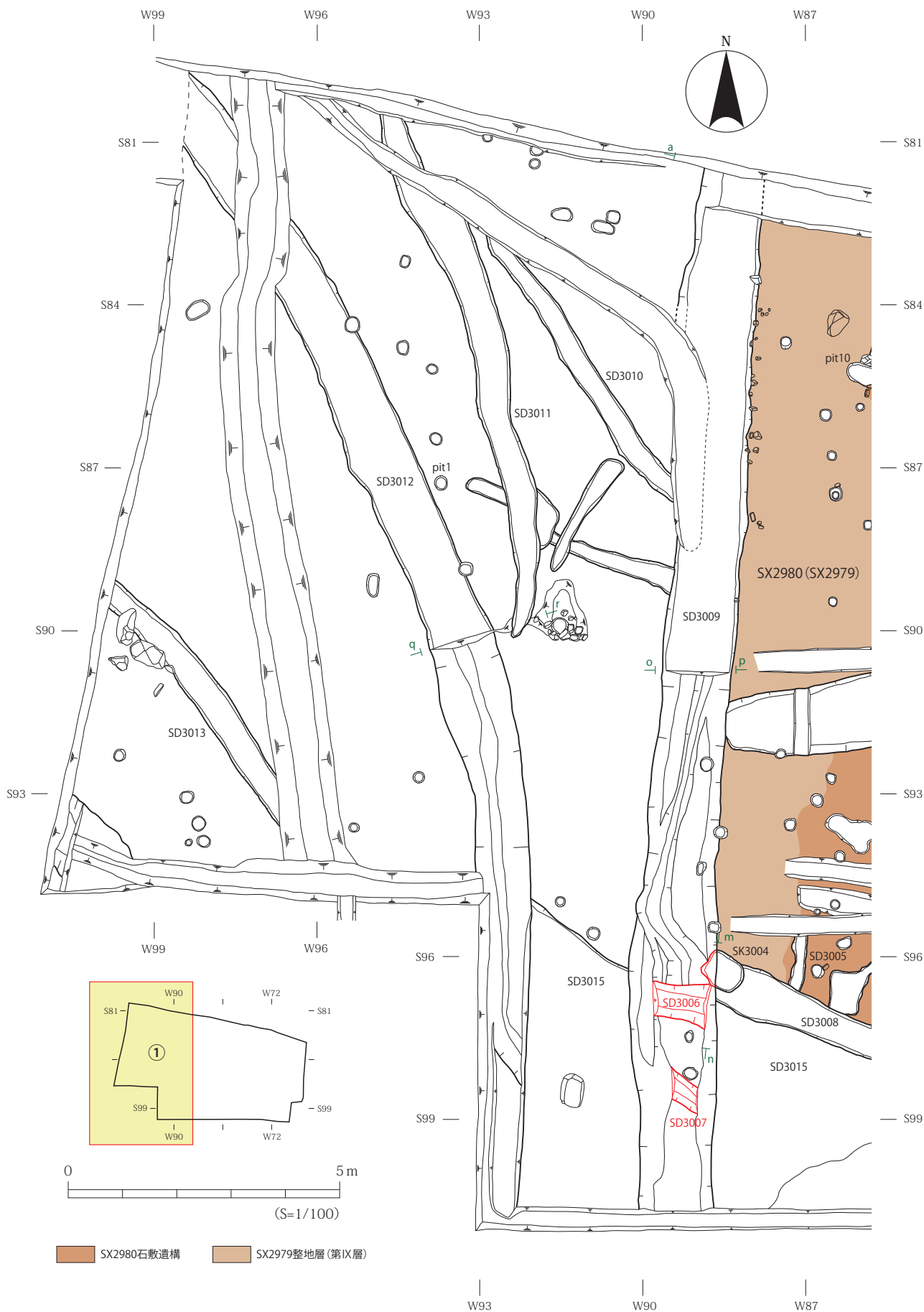


南北中央ベルト断面



東部南北断面

図版37 政庁南西地区 北壁及び南北断面図



图版38 政庁南西地区 分割图①





图版39 政庁南西地区 分割图②



## B. 発見遺構と出土遺物 (図版 35)

発見した遺構には、塀跡 1、石敷遺構とそれに伴う整地層 1、整地層 1、井戸跡 1、土壙 8、溝 24、ピットなどがあり、土器、瓦などが出土している。以下では、主な遺構とその出土遺物、遺構以外から出土した主な遺物について概要を説明する。

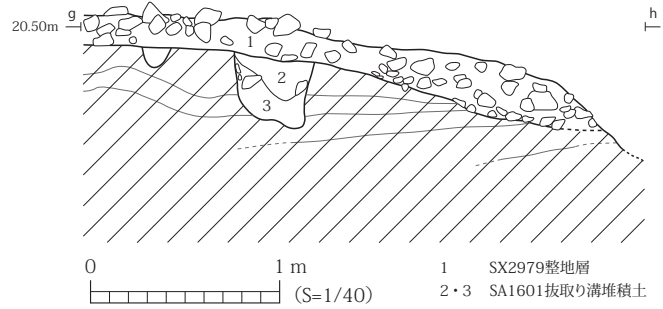
### i. 塀跡

#### 【SA1601 塀跡】 (図版 40・41)

SA1601 塀跡は第 50・77 次調査で検出した SB1599 門跡から西へ延びる材木塀である。第 80 次調査で W64 ラインまで続くことを確認していたが、今回の調査ではこの塀跡が更に西へ延び、S97・W78.5 付近で途切れることを確認した。確認面は地山面で、新たに検出した長さは 14.5m、SB1599 からの長さは約 56.5m となる。方向は東西の発掘基準線に対して東で北に 3° 振れている。SX2930・2979 整地層、SX2980 石敷遺構、SD2988～2991・3017 溝、SK2986 土壙より古く、これらの遺構によって上部が壊されている。

今回検出した範囲では、布掘もしくは抜き取り・切り取り溝が上幅 30～40cm で残存しており、断ち割って断面を確認した西端部は深さが 35cm あった。この西端部では抜き取り溝が布掘底面まで及んでいたため、材木の痕跡は確認できなかった。抜き取り溝の堆積土は黒褐色シルトで、自然流入土とみられる。

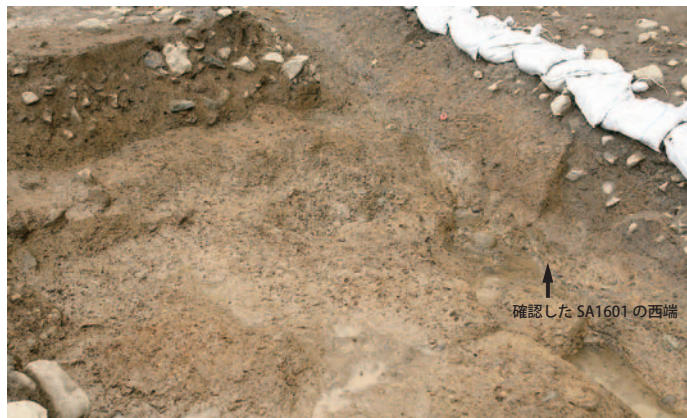
遺物は出土していない。



断面写真 (西から)



SD2989 下での検出状況 (南から)



西端部の状況 (南西から)

図版 41 SA1601 塀跡断面図及び写真



## ii. 石敷遺構とそれに伴う整地層

### 【SX2980 石敷遺構、SX2979 整地層】(図版 37・42～45・51)

調査区中央部で東西 15.0m 以上、南北 16.0m 以上の範囲に礫と少量の瓦・土器片を敷き詰めた SX2980 石敷遺構を検出した。この石敷遺構の直下には東西 17.5m 以上、南北 16.0m 以上の範囲で SX2979 整地層(第Ⅸ層)が分布しており、石敷面の造成に伴うものと考えられる。これらの東端は SK2986 土壇、西端は SD3009 溝、南端は SD3015 溝と第Ⅱ層の落ち込みによって壊されているため不明であるが、北側は調査区外へ更に広がる。

SE2997 井戸跡、SK2986・2987・2993・2998・3002・3004 土壇、SD2988～2990・2994～2996・3001・3005・3008・3009・3015 溝より古く、SA1601 塀跡、SK2981 土壇、SD2982・2984・2985 溝より新しい。

整地層は地山直上に認められ、厚さは 10～50cm で、沢筋に沿ってその周辺が南側ほど厚くなっている。整地には径 10～30cm の礫を多量に含む暗褐色～灰褐色シルトが用いられており、厚みを増す南部の沢筋周辺では 2～3 層に細分できる。

石敷面の精査を行ったのは調査区の南北中央ベルトと北側の東西ベルトで区切られた北東部(S82～90、W75～81)のみである。敷石には主に径 5～15cm の礫が用いられ、瓦や須恵器甕の破片も少量使用されていた。その隙間には径 1～2cm の小礫が詰められており、径 1.0m 前後の大きな礫が頭を突き出すかたちで据えられた場所も数カ所確認している。石敷面には緩やかな起伏があり、全体として北から南へ傾斜している。調査区北壁際でみると東西の比高差は最も低い沢筋部分と最も高い西端で約 60cm あり、南側への傾斜角は約 5° である。また、精査した北東部では石敷に部分的な使用面の補修が行われているものの、明確な時期差は認められなかった。石敷面直上には北部中央では第Ⅳ層、それ以外の場所では第Ⅷ層が堆積しており、第Ⅷ層上には灰白色火山灰のブロックを含む第Ⅴ層の堆積が部分的に認められた。

遺物は、石敷面直上の堆積層(主に第Ⅳ層か?)から須恵系土器、白磁、瓦が出土している。須恵系土器は坏底部破片が 8 点、小皿が 1 点、高台坏が 2 点、柱状高台が 1 点である。白磁は碗の小破片が 2 点(図版 51-181・182)ある。このうち柱状高台(図版 44-1)のみ図示した。

## iii. 整地層

### 【SX2930 整地層】(図版 40)

調査区南東隅の SK2986 上面および地山面で検出した整地層で、東西 2.0 m、南北 3.6 m の範囲に分布する。本整地層は昨年度の第 80 次調査で確認していた SX2930 整地層の西側への続きで、政庁の南西側に位置する SX2931 平場跡の造成に伴うものである。その西端は SD2988 に壊されているものの、概ね W69 ラインで、後世の削平を考慮しても当時の整地範囲(平場の範囲)はこのラインより大きく西側へは広がらないと推定される。SD2988 溝より古く、SK2986 土壇より新しい。

精査を行っていないため詳細は不明であるが、整地には地山の黄褐色粘土を主体とした土が用いら







北東部の石敷面（南から）



石敷面拡大（南から）



石敷面上部に堆積した第Ⅴ層（灰白色火山灰ブロックを含む、東から）



SX2979 断面（南北中央ベルトの南部、東から）

図版 43 SX2980 石敷遺構（SX2979 整地層）写真



れており、厚さは 30cm程で、数枚に分層できる。最上面には焼けて赤色化する部分も認められた。

遺物は、上面から須恵系土器、瓦が出土している。須恵系土器は坏底部破片が 4 点ある。図示できるものはない。

#### iv. 井戸跡

##### 【SE2997 井戸跡】（図版 39）

調査区北部中央（S85・W79 付近）の SD2994・2995 堆積土および第Ⅱ層の上面で確認した素掘りの井戸跡である。SX2979 整地層、SX2980 石敷遺構、SD2994・2995 溝より新しい。

平面形は直径約 1.4 m の円形を呈する。完掘していないが、深さ約 70cm まで掘り下げており、湧水が認められた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上部がやや開く。堆積土は最上部に黒褐色シルトの自然流入土が認められ、以下は地山の大ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

遺物は、堆積土最上層から白磁小片が出土している。図示できるものはない。

#### v. 土壙

##### 【SK2981 土壙】（図版 39）

SA1601 堀跡の延びを確認するために掘り下げた調査区南部中央（S96・W79 付近）の地山面で検出した土壙で、SX2979 整地層、SX2980 石敷遺構より古い。

平面形は南北に長い楕円形を呈し、規模は長軸 1.7 m、短軸 1.5 m である。深さは 20cm 程で、底面にはやや凹凸があり、底面～壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は砂質シルト～シルトの地山土が混じり合った褐色土で、自然堆積とみられる。人為的に掘り込まれたものかどうか判別し難い。

遺物は出土していない。

##### 【SK2986 土壙】（図版 37・40・44・45）

調査区の東部全体に広がる大土壙で、北側が調査区外へ延びる。西半部は第Ⅷ層上面、東半部は旧表土または地山面で検出しており、SX2930 整地層、SK2987 土壙、SD2988～2992 溝より古く、SA1601 堀跡、SX2979 整地層、SX2980 石敷遺構、SD2984・2985 溝より新しい。

平面形は南北に長い不整形を呈し、規模は長軸 13.5 m 以上、短軸約 6.5 m である。断ち割った箇所で見ると、深さは 20cm 前後で、底面にはやや凹凸があり、底面～壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は礫と炭化物を含む暗褐色シルトで、自然流入土である。

遺物は、確認面から須恵系土器の坏・小皿底部破片が 6 点、台付鉢の台部破片が 1 点出土している。このうち小皿 1 点（図版 44-2）と坏 3 点（図版 44-3～5）を図示した。

##### 【SK2987 土壙】（図版 40・45）

調査区北東部（S87・W74 付近）の SK2986 堆積土上面で検出した土壙で、南側を SD2988、西側を SD2989 によって壊されている。SD2988・2989 溝より古く、SX2979 整地層、SX2980 石敷

遺構、SK2986 土壇、SD2984・2985 溝より新しい。

平面形は北西・南東方向に長い不整形を呈し、規模は長軸 3.8 m 以上、短軸 1.4 m 前後である。深さは約 20cm で、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は灰白色火山灰のブロックを含む暗褐色シルトで、自然流入土である。

遺物は、確認面から須恵系土器の小皿底部破片が出土している。図示できるものはない。

**【SK2998 土壇】** (図版 37・39・45・51)

調査区中央部 (S90・W81 付近) の SD2988・2996 堆積土および第IV層の上面で確認した土壇で、南辺は調査区の東西ベルト下に及ぶため未検出である。SX2979 整地層、SX2980 石敷遺構、SD2982・2988・2996 溝より新しい。

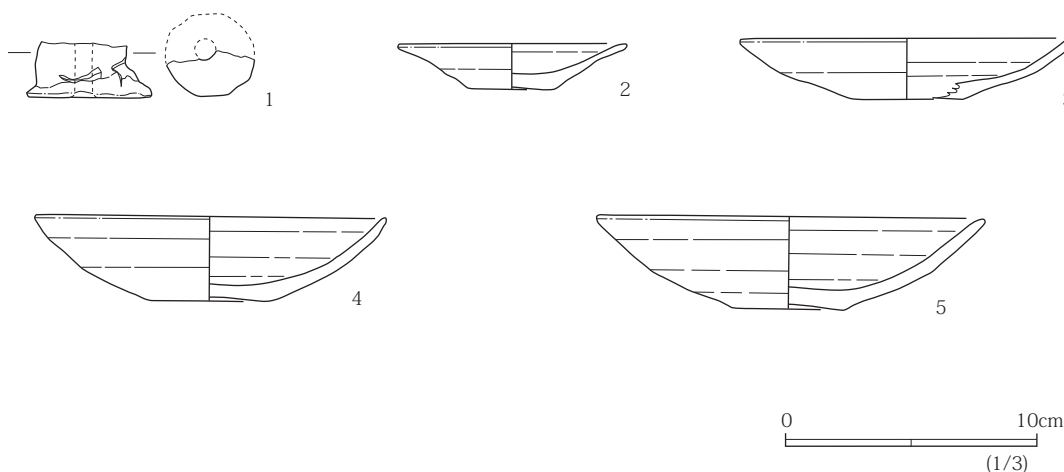
平面形は東西に長い楕円形を呈し、規模は長軸 3.9 m、短軸 1.6 m 前後である。深さは約 15cm で、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は 2 層に分かれ、1 層は炭化物を含む黒褐色シルト、2 層は黒褐色の砂質シルトで、いずれも自然流入土である。

遺物は、白磁碗の破片 (太宰府市分類V類) が 1 点 (図版 51-180) 出土している。

**【SK3002 土壇】** (図版 39)

調査区北部中央 (S85・W85 付近) の第IV層上面で検出した土壇である。SX2979 整地層、SX2980 石敷遺構より新しい。平面形は直径約 1.5 m の円形を呈する。一段下げたのみで精査を行っていないが、堆積土の最上層は黒褐色シルトの自然流入土である。

遺物は、軒平瓦 (波状文) が出土している。



No	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SX2980 直上堆積層	柱状高台	1/2	—	4.9	—	底：回転糸切、貫通孔		R-122	B14797
2	SK2986 確認面	須恵系土器 小皿	1/4	9.2	3.4	1.8	底：回転糸切		R-119	B14797
3	SK2986 確認面	須恵系土器 皿	1/2	13.2	4.3	2.4	底：回転糸切		R-118	B14797
4	SK2986 確認面	須恵系土器 环	1/2	14.0	4.4	3.4	底：回転糸切		R-120	B14797
5	SK2986 確認面	須恵系土器 环	2/3	15.6	4.4	3.6	底：回転糸切		R-121	B14797

図版44 SX2980、SK2986 出土土器

**【SK3004 土壌】** (図版 38・47・48)

調査区南西部 (S96・W89 付近) の SD3008 および第Ⅷ層の上面で検出した土壌である。SD3009 溝より古く、SX2979 整地層、SD3006・3008・3015 溝より新しい。

平面形は長辺 75cm、短辺 60cmの隅丸長方形を呈する。SD3009 と重複する部分を掘り下げており、深さは約 20cmで、底面～壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は小礫と土器片を多量に含む黒褐色シルトで、人為堆積土とみられる。

遺物は、手捏かわらけ小皿 (図版 48-1)、緑釉陶器 (小片のため器形不明) が出土している。

**【SK3016 土壌】** (図版 39)

SD3015 を掘り下げた際に、その下部の地山面で確認した土壌で、調査区南部中央 (S98・W83 付近) に位置する。SD3015 溝より古い。平面形は直径 50cmの円形を呈する。一段下げたのみで精査を行っていないが、堆積土の最上層は黒褐色シルトの自然流入土である。

遺物は出土していない。

vi. 溝

**【SD2982 溝】** (図版 39・45)

SD2988 を掘り下げた際に、その下部の地山面で確認した溝で、調査区中央部 (S90・W81 付近) を南北方向に延びる。SX2979 整地層、SX2980 石敷遺構、SK2998 土壌、SD2988 溝より古い。

検出した長さは 0.8 mで、上端幅が約 2.3 m、深さは 40cm程である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は径 10～50cmの礫を多量に含む灰褐色シルトで、人為堆積土とみられる。

遺物は出土していない。

**【SD2984 溝】** (図版 40・45)

調査区北東部 (S87・W73 付近) をトレンチ状に深掘りした際に、地山面で確認した南北方向の溝である。SX2979 整地層、SX2980 石敷遺構、SK2986・2987 土壌、SD2985・2989 溝より古い。

検出した長さは 0.7 mで、上端幅は西側上端が未確認のため 1.2 m以上、深さは 40～50cmである。断面形は逆台形を呈するが、底面にやや凹凸がみられる。堆積土は 2層に分かれ、1層は暗褐色の砂質シルト、2層は灰黄褐色の粘土質シルトで、いずれも自然流入土である。

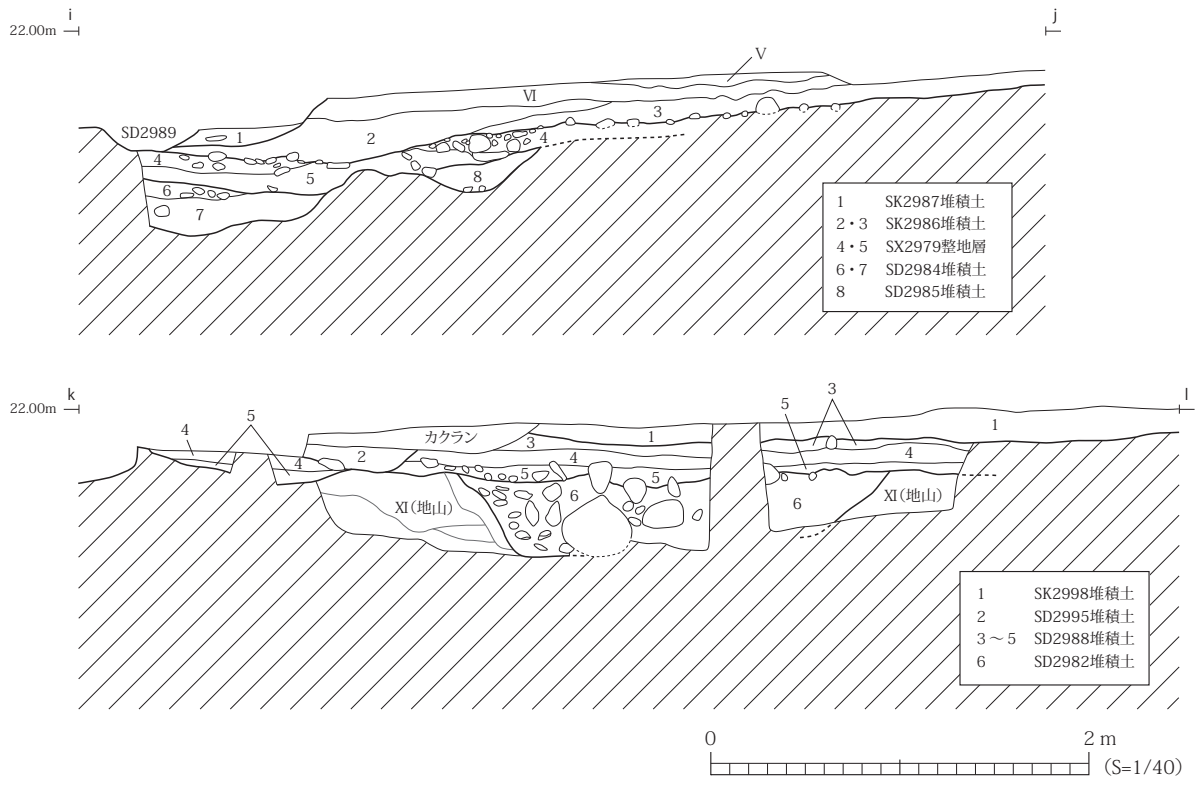
遺物は、平瓦破片が 4点出土しており、すべてⅡ類である。図示できるものはない。

**【SD2985 溝】** (図版 40・45)

調査区北東部 (S87・W73 付近) をトレンチ状に深掘りした際に、地山面で確認した南北方向の溝である。SX2979 整地層、SX2980 石敷遺構、SK2986・2987 土壌より古く、SD2984 溝より新しい。

検出した長さは 0.7 mで、上端幅は約 80cm、深さは 30cm程である。断面形は皿形を呈する。堆積土は暗褐色の砂質シルトで、自然流入土である。





i-j 断面写真 (南から)



k-l 断面写真 (ベルト東側、北から)



k-l 断面写真 (ベルト西側、北から)

図版 45 土壌、溝断面 (1)

遺物は出土していない。

**【SD2988 溝】** (図版 37・39・40・45・46)

調査区中央～東部を西-東-南方向に「L」字状に延びる溝で、SX2930・2979・2980、SK2986・2987 上面および地山面で確認した。溝は更に調査区の南側へ延びており、検出範囲の両端部以外を掘り下げている。SK2993・2998 土壌、SD2989・2992・2995・3009 溝より古く、SX2930・2979 整地層、SX2980 石敷遺構、SK2986・2987 土壌、SD2982 溝より新しい。SD2996 溝との前後関係は不明である。

規模は、長さが東西約 19.0 m、南北 8.0 m 以上で、上端幅は 0.5 ～ 1.7 m、深さは完掘した部分で最大 40cm ある。断面形は「U」字形を呈する。堆積土は 2 層に大別され、上層は礫と炭化物を多く含む灰褐色シルト、下層は土器片と炭化物を多く含む黒褐色シルトで、いずれも自然流入土である。方向は発掘基準線に対して東西溝が東で北へ約 10°、南北溝が北で西へ約 11° 振れている。

遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、かわらけ、中世陶器、瓦が出土している。土師器は甕口縁部破片が 1 点ある。須恵器は瓶の底部破片が 1 点、甕体部破片が 3 点である。須恵系土器は坏類と柱状高台が出土している。坏類底部破片が 22 点、小皿が 5 点、高台坏が 5 点、柱状高台 1 点である。このうち小皿 2 点 (図版 46-1・2) と坏 3 点 (図版 46-3 ～ 5)、高台坏 1 点 (図版 46-6) を図示した。手捏かわらけは坏・小皿の口縁部破片が各 1 点 (図版 46-7・8) である。中世陶器は壺口縁部破片 (図版 46-9)、体部破片が各 1 点ある。

**【SD2989 溝】** (図版 40)

調査区東部をやや蛇行しながら南北方向に延びる溝で、SX2979・2980、SK2986・2987 上面で確認した。溝は更に調査区の南側へ延びるとみられ、検出範囲の北半と南部を掘り下げている。SA1601 塀跡、SX2979 整地層、SX2980 石敷遺構、SK2986・2987 土壌、SD2984・2988 溝より新しい。

規模は、長さが 14.8 m 以上で、上端幅は 0.7 ～ 1.5 m、深さは完掘した部分で最大 45cm ある。断面形は両側へやや開く「V」字形を呈する。堆積土は暗褐色シルトで、自然流入土である。

遺物は、須恵器、須恵系土器、かわらけ、灰釉陶器、瓦が出土している。須恵器は瓶の底部破片が 1 点、甕体部破片が 2 点である。須恵系土器は坏類底部破片が 4 点、高台坏が 1 点ある。手捏かわらけは坏口縁部破片が 1 点である。灰釉陶器は瓶の体部破片が 1 点ある。図示できるものはない。

**【SD2990 溝】** (図版 40)

調査区南東部を南北方向に延びる溝で、SK2986 上面で確認した。SA1601 塀跡、SX2979 整地層、SK2986 土壌より新しい。

検出した長さは 3.0 m で、更に南北両側へ延びる。上端幅は 0.4 ～ 1.0 m、深さは 20cm 前後である。断面形は両側へやや開く「U」字形を呈する。堆積土は黒褐色シルトで、自然流入土である。

遺物は、須恵器、須恵系土器、かわらけ、瓦が出土している。須恵器は瓶の頸部破片が1点、甕体部破片が2点である。須恵系土器は坏類底部破片が2点ある。手捏かわらけは坏口縁部破片が1点である。図示できるものはない。

【SD2991 溝】（図版 40）

調査区南東部を南北方向に延びる溝で、SK2986 上面で確認した。SD3017 溝より古く、SA1601 堀跡、SK2986 土壌より新しい。SD2992 溝との前後関係は不明である。

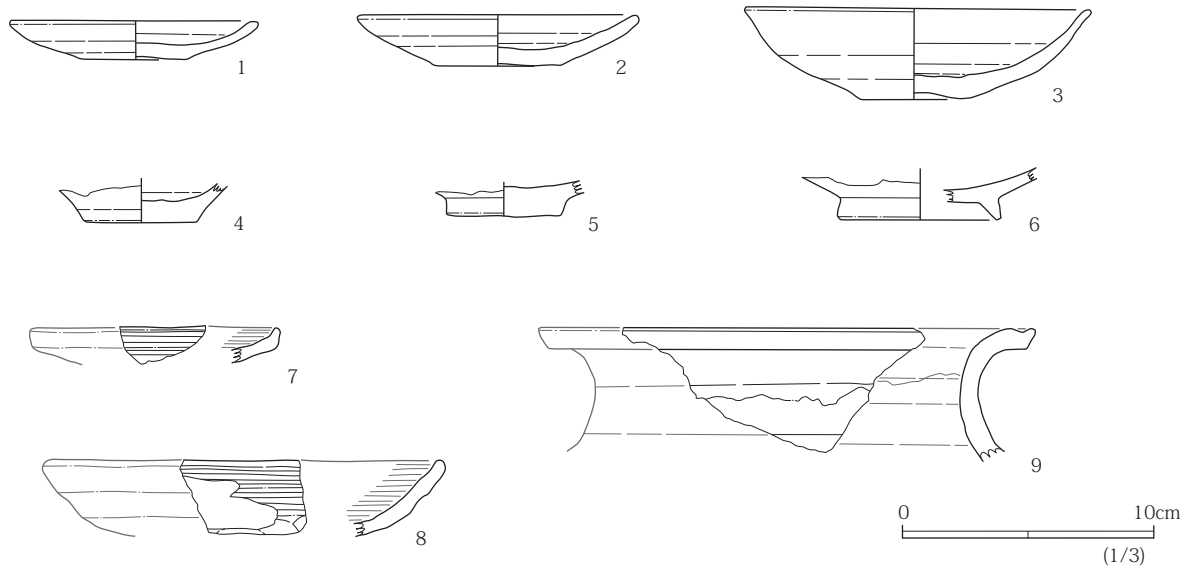
検出した長さは 3.0 m で、更に南北両側へ延びる。上端幅は 1.4 m 前後、深さは 20 ～ 30cm で、南側へ向かって階段状に深くなっている。断面形は両側へやや開く「U」字形を呈する。堆積土は黒褐色シルトで、自然流入土である。

遺物は、平瓦・丸瓦が出土している。図示できるものはない。

【SD2992 溝】（図版 40）

調査区南東部を南北方向に延びる溝で、SK2986 上面で確認した。SK2986 土壌、SD2988 溝より新しい。SD2991・3017 溝との前後関係は不明である。

検出した長さは 1.4 m で、上端幅は 30cm 前後、深さは約 5 cm である。断面形は皿形を呈する。堆



No	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SD2988 1層	須恵系土器 小皿	ほぼ完形	9.8	4.2	1.6	底：回転糸切		R-110	B14797
2	SD2988 1層	須恵系土器 小皿	ほぼ完形	11.2	5.2	2	底：回転糸切		R-116	B14797
3	SD2988 1層	須恵系土器 坏	ほぼ完形	14.0	4.4	3.5	底：回転糸切		R-109	B14797
4	SD2988 1層	須恵系土器 坏	底部破片	—	4.4	—	底：回転糸切		R-112	B14797
5	SD2988 1層	須恵系土器 坏	底部破片	—	4.6	—	底：回転糸切		R-113	B14797
6	SD2988 1層	須恵系土器 高台坏	底部破片	—	6.4	—	胎土：白色緻密		R-111	B14797
7	SD2988 1層	手捏かわらけ 小皿	1/4	10.0	—	—	胎土：白色緻密		R-115	B14797
8	SD2988 1層	手捏かわらけ 坏	底部破片	16.0	—	—			R-114	B14797
9	SD2988 1層	陶器 壺	底部破片	19.8	—	—	渥美		R-117	B14800

図版46 SD2988 出土土器



積土は暗褐色シルトで、自然流入土である。

遺物は、須恵系土器の坏類底部破片が1点と、瓦が出土している。図示できるものはない。

#### 【SD2994 溝】（図版 37・39）

調査区北端中央の第Ⅱ層上面で確認した南北方向の溝である。SE2997 井戸跡より古く、SX2979 整地層、SX2980 石敷遺構より新しい。

検出した長さは 1.5 m で、更に調査区北側へ延びる。上端幅は 0.9 ～ 1.2 m、深さは 30cm 程である。断面形は皿形を呈する。堆積土は暗褐色シルトで、自然流入土である。

遺物は土師器、須恵系土器、灰釉陶器、瓦が出土している。土師器は甕口縁部破片が1点である。須恵系土器は坏類底部破片が1点ある。灰釉陶器は瓶の体部破片が1点出土している。図示できるものはない。

#### 【SD2995 溝】（図版 39・45）

調査区中央部を南北方向に延びる溝で、第Ⅱ層または第Ⅳ・Ⅷ層上面で確認した。SE2997 井戸跡より古く、SX2979 整地層、SX2980 石敷遺構、SK2993 土壇、SD2988 溝より新しい。

規模は、長さが約 9.0 m で、上端幅は 30 ～ 70cm、深さは 10 ～ 15cm である。断面形は「U」字形を呈する。堆積土は酸化鉄粒を多く含む黒褐色の粘土質シルトで、自然流入土である。方向は南北の発掘基準線にほぼ一致している。

遺物は、須恵系土器、灰釉陶器、瓦が出土している。須恵系土器は坏・小皿類底部破片が4点ある。灰釉陶器は瓶の底部破片が1点出土している。図示できるものはない。

#### 【SD2996 溝】（図版 39）

調査区中央部を南北方向に延びる溝で、第Ⅳ層または第Ⅷ層上面で確認した。溝の南部が調査区南北ベルト下に位置するため、南側への延びは判然としない。溝の北半部を掘り下げている。SK2998 土壇より古く、SX2979 整地層、SX2980 石敷遺構より新しい。SD2988 溝との前後関係は不明である。

規模は、長さが 6.6 m 以上で、上端幅は 40cm 前後、深さは 10 ～ 15cm である。断面形は皿形を呈する。堆積土は暗褐色シルトで、自然流入土である。方向は南北の発掘基準線に対して北で東へ約 11° 振れている。

遺物は、須恵系土器、瓦が出土している。須恵系土器は坏・小皿類底部破片が3点ある。図示できるものはない。

#### 【SD3005 溝】（図版 38・51）

調査区南西部（S96・W87 付近）の SX2980 上面で確認した南北方向の溝である。SD3008 溝より古く、SX2979 整地層、SX2980 石敷遺構より新しい。

検出した長さは 1.0 m で、上端幅は 20cm 前後である。一段下げたのみで精査を行っていないが、

堆積土の最上層は黒褐色シルトの自然流入土である。

遺物は、白磁壺もしくは水注破片（図版 51-179）が出土している。

#### 【SD3006 溝】（図版 38・47・52）

SD3009 を掘り下げた際に、その下部の地山面で確認した溝で、調査区南西部（S97・W89 付近）を東西方向に延びる。SK3004 土壙、SD3008・3009・3015 溝より古い。

検出した長さは 1.0 m で、上端幅が約 70cm、深さは 30cm 程である。断面形は皿形を呈する。堆積土は黒褐色シルトの自然流入土で、上下 2 層に細分される。

遺物は土師器、かわらけ、山茶碗系陶器が出土している。土師器は甕底部破片が 2 点である。手捏かわらけは、坏口縁部破片が 3 点、小皿 1 点である。このうち坏 2 点（図版 48-2・3）を図示した。山茶碗系陶器は鉢の体部破片が 1 点（図版 52-161）ある。

#### 【SD3007 溝】（図版 38）

SD3009 を掘り下げた際に、その下部の地山面で確認した溝で、調査区南西部（S98・W89 付近）を北西 - 南東方向に延びる。SD3009・3015 溝より古い。

検出した長さは 0.5 m で、上端幅が約 40cm、深さは 5 cm 程である。断面形は皿形を呈する。堆積土は黒褐色シルトで自然流入土である。

遺物は出土していない。

#### 【SD3008 溝】（図版 39・47）

調査区の南部中央を東西方向に延びる溝で、SD3015 および第Ⅷ層上面で確認した。SK3004 土壙、SD3009 溝より古く、SX2979 整地層、SX2980 石敷遺構、SD3006・3015 溝より新しい。

西端を SD3009、東端を第Ⅱ層の落ち込みによって壊されており、検出した長さは 6.8 m で、上端幅は 40 ~ 90cm である。一段下げたのみで精査を行っていないが、SD3009 と重複する部分の断面で見ると、深さは 10cm 程で、断面形は皿形を呈する。堆積土は暗赤褐色シルトで、自然流入土である。方向は東西の発掘基準線に対して東で南へ 20° 前後振れている。

遺物は出土していない。

#### 【SD3009 溝】（図版 38・47・48・51）

調査区西部を南北方向に縦断する溝で、SX2979、SD3015 上面および地山面で確認した。溝は更に調査区の南北両側へ延びており、検出範囲の南半部を掘り下げている。SX2979 整地層、SK3004 土壙、SD2988・3006 ~ 3008・3015 溝より新しい。SD3010 溝との前後関係は不明である。

規模は、長さが 19.5 m 以上で、上端幅は 1.2 ~ 1.6 m、深さは完掘した部分で最大 30cm である。断面形は概ね皿形を呈するが、底面にやや凹凸があり、中央付近が浅く溝状に一段窪む箇所も認められる。堆積土は 2 層に分かれ、1 層は小礫を含む黒褐色シルト、2 層はややグライ化した黒褐色シルト

で、いずれも自然流入土である。方向は南北の発掘基準線に対して北で東へ3°振れている。

遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、かわらけ、灰釉陶器、白磁、青白磁、瓦が出土している。土師器は坏底部破片が1点ある。須恵器はヘラ切の坏底部破片が1点、甕体部破片が2点である。須恵系土器は坏類底部破片が12点ある。手捏かわらけは坏口縁部破片（図版48-4）が1点である。灰釉陶器は瓶の底部破片が1点出土している。白磁、青白磁はいずれも小片が各1点（図版51-183・190）出土している。

#### 【SD3010 溝】（図版38）

調査区の北西部を北西-南東方向に延びる溝で、地山面で確認した。SD3009 溝と重複しているが、重複部分が新しい攪乱溝に壊されているため、その前後関係は不明である。

検出した長さは5.8mで、上端幅は30～50cmである。一段下げたのみで精査を行っていないが、堆積土の最上層は黒褐色シルトの自然流入土である。方向は南北の発掘基準線に対して北で西へ約35°振れている。

遺物は、須恵系土器の坏類底部破片が1点と瓦類が出土している。

#### 【SD3011 溝】（図版38・47・48）

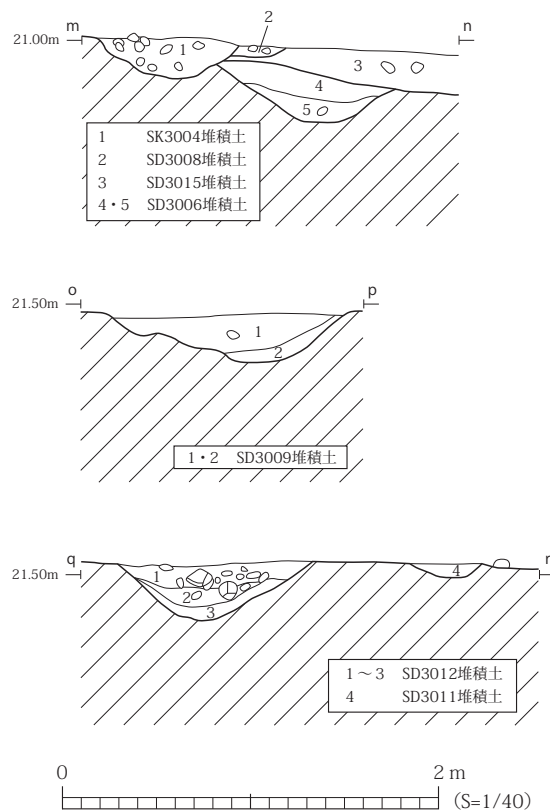
調査区の北西部を緩やかに弧を描きながら南北方向に延びる溝で、地山面で確認した。溝は更に調査区の北側へ延びている。

検出した長さは9.8mで、上端幅は35～80cmである。一段下げたのみで精査を行っていないが、堆積土の最上層は拳大の礫を多量に含む黒褐色シルトで、人為堆積土とみられる。

遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、かわらけ、灰釉陶器、中世陶器、瓦が出土している。土師器は坏底部破片、高坏が各1点ある。須恵器は甕体部破片が1点である。須恵系土器は小皿底部破片が2点、高坏1点、三脚土器脚部1点（図版48-7）がある。手捏かわらけは坏口縁部破片が1点、小皿が3点である。このうち小皿2点（図版48-5・6）を図示した。灰釉陶器は瓶の体部破片が2点出土している。中世陶器は摺鉢体部破片が1点出土している。

#### 【SD3012 溝】（図版38・47・48）

調査区の西部を緩やかに弧を描きながら南北方



図版47 土壌、溝断面（2）



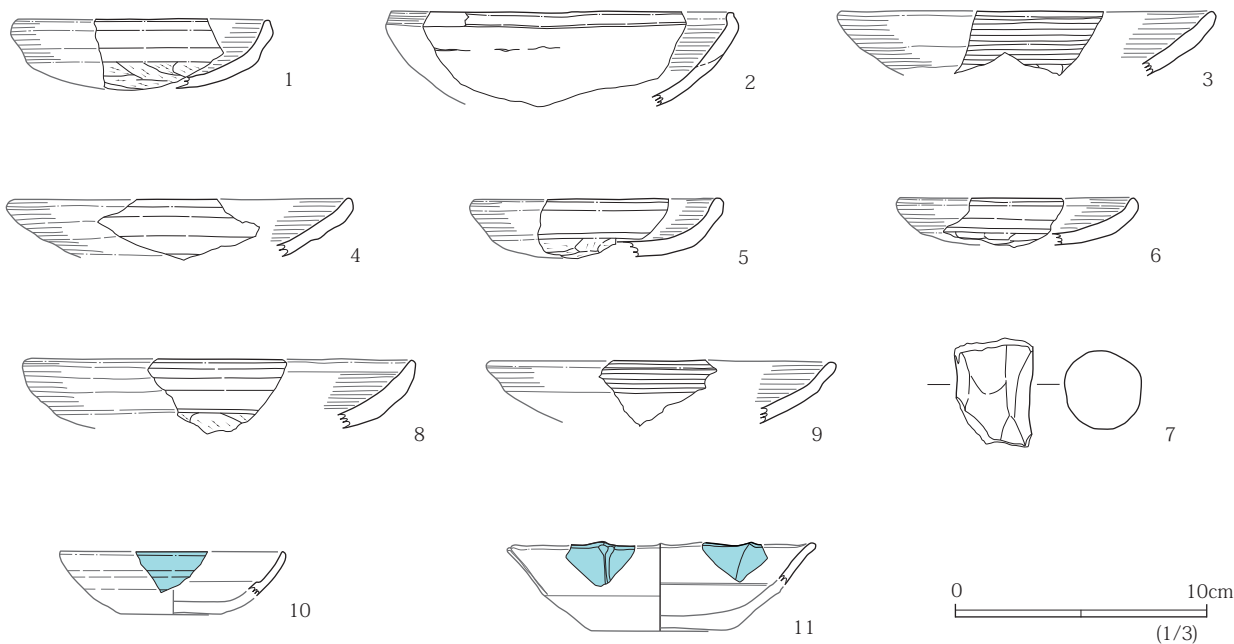
向に延びる溝で、地山面で確認した。溝の両端は更に調査区外へ延びており、検出範囲の南半部を掘り下げている。SD3015 溝より古い。

規模は、長さが 19.5 m 以上で、上端幅は 1.0 m 前後、深さは完掘した部分で最大 45cm ある。断面形は両側へ大きく開く「V」字形を呈する。堆積土は 2 層に大別される。上層は拳大の礫を多く含む暗赤褐色シルトで、人為堆積土とみられる。下層は粘土・シルト・砂が互層状に堆積した黒褐色土で、自然流入土である。

遺物は、須恵器、須恵系土器、かわらけ、灰釉陶器、中世陶器、瓦が出土している。須恵器は口縁部破片が 1 点ある。須恵系土器は坏底部破片が 1 点、小皿が 2 点、高台坏が 2 点、台付鉢が 1 点ある。手捏かわらけは坏口縁部破片（図版 48-8）が 1 点である。灰釉陶器は瓶の底部破片が 1 点出土している。中世陶器常滑甕体部破片が 1 点出土している。

### 【SD3013 溝】（図版 38）

調査区の南西部を北西 - 南東方向に延びる溝で、地山面で確認した。溝の両端は更に調査区外へ延びている。



No	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SK3004	手捏かわらけ 小皿	1/6	10.0	—	—	胎土緻密		R-123	B14798
2	SD3006	手捏かわらけ 坏	1/4	13.4	—	—	胎土緻密		R-124	B14798
3	SD3006	手捏かわらけ 坏	1/6	15.2	—	—	胎土緻密		R-125	B14798
4	SD3009	手捏かわらけ 坏	1/7	13.5	—	—	胎土緻密		R-126	B14798
5	SD3011	手捏かわらけ 小皿	1/6	10.0	—	—	胎土緻密		R-127	B14798
6	SD3011	手捏かわらけ 小皿	1/7	9.6	—	—	胎土緻密		R-128	B14798
7	SD3011	脚付土器	脚部	—	—	—			R-129	B14798
8	SD3012	手捏かわらけ 坏	1/8	15.6	—	—	胎土緻密		R-130	B14798
9	SD3015	手捏かわらけ 坏	1/7	14.0	—	—	胎土緻密		R-131	B14798
10	SD3015	白磁 皿	口縁部破片	—	—	—	内面に沈線状の段 大宰府VI-1b類	51下	J-177	B14314
11	SD3015	白磁 皿	口縁部破片	—	—	—	輪花 大宰府XI類	51下	J-178	B14314

図版48 SK3004、SD3006・3009・3011・3012・3015 出土土器

検出した長さは 5.2 m で、上端幅は 50 ～ 60cm である。一段下げたのみで精査を行っていないが、堆積土の最上層は黒褐色シルトの自然流入土である。方向は南北の発掘基準線に対して北で西へ約 38° 振れている。

遺物は出土していない。

#### 【SD3015 溝】（図版 38・39・47・48・51・52）

調査区南辺の近くを東西方向に延びる溝で、SX2979 上面および地山面で確認した。北側上端のみを検出したもので、南側へ向かって切られた地形の落ち込みの可能性も残る。溝は更に調査区の東西両側へ延びており、沢筋付近では第Ⅱ層の落ち込みによって壊されている。SD3008・3009 溝より古く、SX2979 整地層、SK3016 土壙、SD3006・3007・3012 溝より新しい。

検出した長さは 20.5 m で、上端幅は最大で 5.5 m 以上ある。部分的に断ち割りを行った以外は一段下げたのみで、精査を行っていない。調査区西壁際の南北トレンチの断面をみると、深さは 30cm 以上で、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は小礫を多く含む黒褐～暗青灰色のシルトで、自然流入土である。

遺物は、手捏かわらけ、白磁、瓷器系陶器、古瀬戸、瓦が出土している。手捏かわらけ 1 点（図版 48-9）、白磁 2 点（図版 48-10・11）を図示した。白磁はいずれも皿で太宰府市分類Ⅳ-1b 類（図版 51-177）、Ⅺ-4 類（図版 51-178）である。古瀬戸は底卸目皿口縁部破片（図版 52-172）、瓷器系陶器は渥美壺体部破片（図版 52-163）である。

#### 【SD3017 溝】（図版 40）

調査区南東部を南北方向に延びる溝で、SD2991 上面で確認した。SA1601 堀跡、SK2986 土壙より新しい。SD2992 溝との前後関係は不明である。

検出した長さは 1.0 m で、上端幅は 20 ～ 30cm、深さは 15cm 程である。断面形は「U」字形を呈する。堆積土は黒褐色シルトで、自然流入土である。

遺物は出土していない。

#### vii. その他の出土遺物

ここでは、ピットや遺物量の多い基本層序第Ⅲ層、遺構確認面、新しい攪乱溝、表土などから出土した遺物について主なものを記す。

【pit 1】白磁皿の小破片（太宰府市分類碗Ⅳ類？）が 1 点（図版 51-176）ある。

【pit10】白磁碗の内面に櫛目文のある小破片が 1 点（図版 51-185）ある。

#### 【第Ⅲ層】

a、b に分けられなかったが、第Ⅲ層で一括して取り上げた遺物には土師器、須恵器、須恵系土器、丸瓦、平瓦がある。

土師器は坏が1点（図版49-8）出土している。須恵器は甕体部破片が1点のみである。須恵系土器は坏底部が14点、小皿が14点、高台坏が2点、台付鉢が1点である。このうち坏1点（図版49-7）、小皿6点（図版49-1～6）、高台坏2点（図版49-9・10）を図示した。

【遺構確認面】

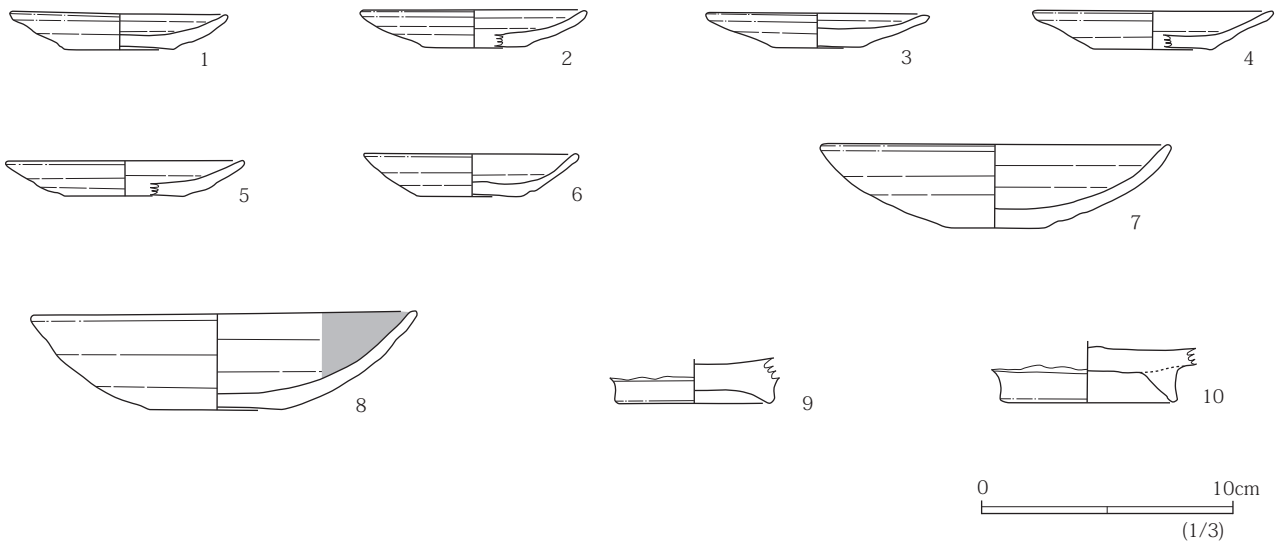
土師器、須恵系土器、かわらけ、灰釉陶器、白磁、丸瓦、平瓦が出土している。

土師器は坏類で、底部の数で見ると坏が2点、高台坏が4点である。須恵系土器は坏底部が49点、小皿が21点、高台坏が14点、台付鉢が2点である。このうち小皿4点（図版50-1～4）、坏1点（図版50-5）を図示した。手捏かわらけは坏もしくは小皿の口縁部破片が17点ある。灰釉陶器は瓶の体部破片が2点ある。白磁は碗破片が1点（図版51-174、太宰府市分類碗Ⅶ類）と壺体部破片が2点（図版51-175・187）ある。

【新しい攪乱溝】

調査区西壁沿いを南北に延びる新しい攪乱溝からは、須恵系土器、中世陶器が出土している。

須恵系土器は坏類底部破片が2点、高台坏が2点、器台高坏が1点（図版50-7）ある。中世陶器は常滑甕体部破片（図版52-108）である。



No	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	第Ⅲ層	須恵系土器 小皿	ほぼ完形	8.6	4.4	1.4	底：回転糸切	51上	R-132	B14798
2	第Ⅲ層	須恵系土器 小皿	1/3	9.9	4.1	1.5	底：回転糸切		R-133	B14798
3	第Ⅲ層	須恵系土器 小皿	1/4	9.8	3.8	1.4	底：回転糸切	51上	R-134	B14798
4	第Ⅲ層	須恵系土器 小皿	1/3	9.6	4.8	1.5	底：回転糸切		R-135	B14798
5	第Ⅲ層	須恵系土器 小皿	1/4	9.5	4.6	1.4	底：回転糸切		R-140	B14798
6	第Ⅲ層	須恵系土器 小皿	1/4	8.6	4.2	1.7	底：回転糸切	51上	R-141	B14798
7	第Ⅲ層	須恵系土器 坏	ほぼ完形	14.0	4.0	3.3	底：回転糸切	51上	R-136	B14798
8	第Ⅲ層	土師器 坏	2/3	15.8	5.2	3.9	底：回転糸切 内面：黒色処理	51上	R-137	B14798
9	第Ⅲ層	須恵系土器 高台坏	底部破片	—	6.0	—			R-138	B14798
10	第Ⅲ層	須恵系土器 高台坏	底部破片	—	7.2	—			R-139	B14798

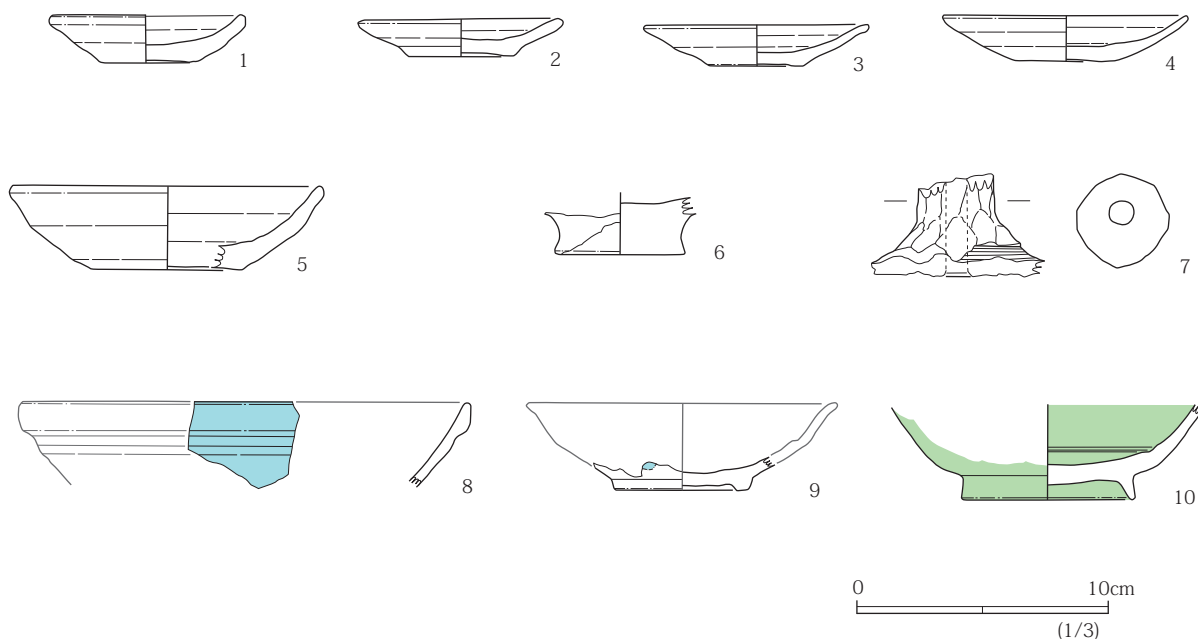
図版49 第Ⅲ層 出土土器



【表土（第1層）】

土師器、黒色土器、須恵系土器、かわらけ、灰釉陶器、白磁、青磁、丸瓦、平瓦が出土している。

土師器は坏、甕類がある。坏類は底部の数でみると坏が2点、高台坏が2点である。須恵系土器は坏底部が17点、小皿が11点、高台坏が7点、台付鉢が2点である。手捏かわらけは坏口縁部破片が4点、小皿が1点、柱状高台が1点（図版50-6）である。灰釉陶器は瓶の体部破片が3点ある。白磁は碗・皿・壺がある。このうち碗1点（図版50-8）、皿1点（図版50-9）を図示した（太宰府市分類碗IV類、皿XI-3類）。青磁は越州系の碗（図版50-10）である（太宰府市分類越州碗Ⅲ-1a類）。

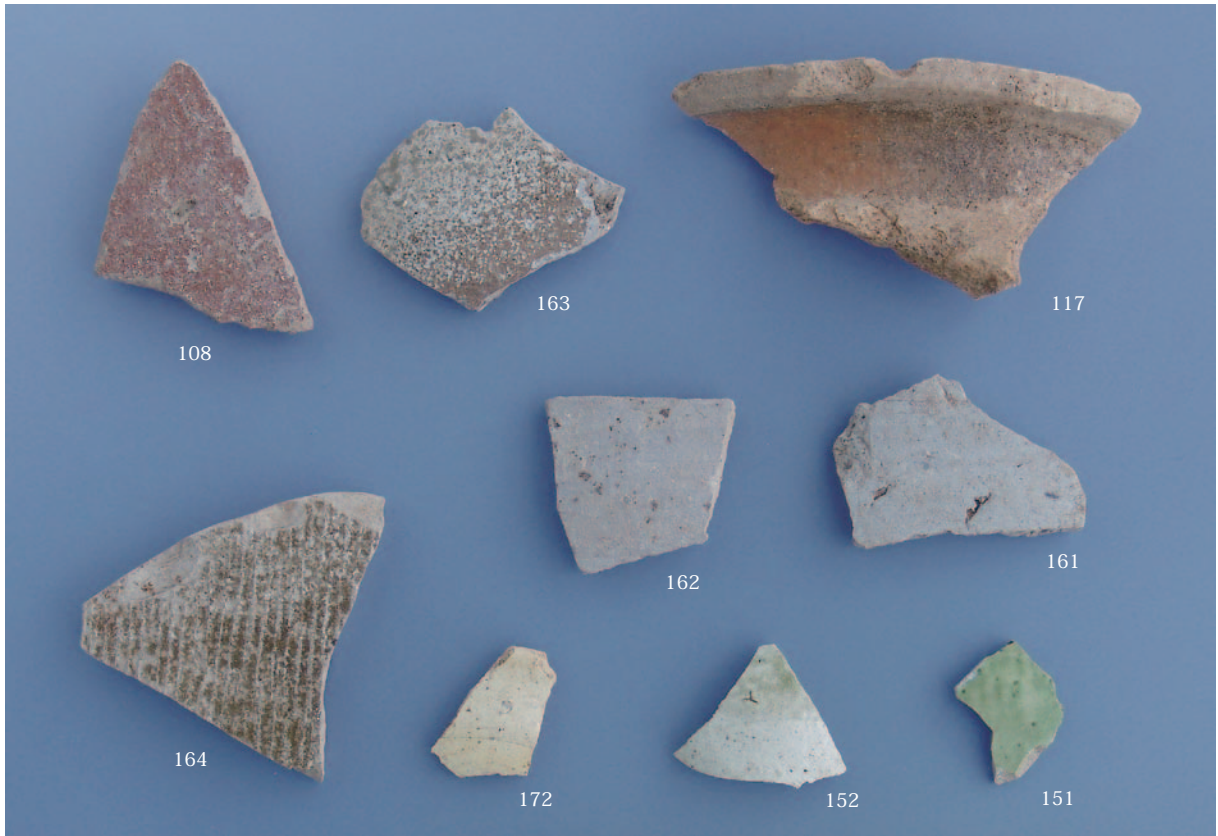


No	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	遺構確認面	須恵系土器 小皿	ほぼ完形	7.8	3.8	2.0	底：回転糸切	51上	R-101	B14798
2	遺構確認面	須恵系土器 小皿	ほぼ完形	8.2	4.2	1.5	底：回転糸切	51上	R-102	B14798
3	遺構確認面	須恵系土器 小皿	1/2	9.0	3.8	1.6	底：回転糸切	51上	R-103	B14798
4	遺構確認面	須恵系土器 小皿	ほぼ完形	9.6	3.8	1.8	底：回転糸切	51上	R-104	B14798
5	遺構確認面	須恵系土器 坏	1/4	12.4	6.0	3.3	底：回転糸切		R-105	B14798
6	表土	柱状高台	底部破片	—	5.2	—	底：回転糸切	51上	R-106	B14798
7	攪乱溝	器台	脚部破片	—	—	—	貫通孔	51上	R-107	B14798
8	表土	白磁 碗	1/8	—	—	—	玉縁口縁 大宰府市IV類	51下	J-173	B14314
9	表土	白磁 皿	底部破片	—	5.2	—	外：底部露胎 大宰府市X1-3類	51下	J-172	B14314
10	表土	青磁 碗	底部破片	—	7.0	—	内面：沈線状の段、外面底部：白色棒状目痕 越州Ⅲ-1a類	51下	J-186	B14314

図版50 遺構確認面、表土、攪乱溝 出土土器



図版 51 政庁南西地区 出土遺物写真（1）



中世陶器、灰釉・緑釉陶器（外面）



中世陶器、灰釉・緑釉陶器（内面）

図版 52 政庁南西地区 出土遺物写真（2）



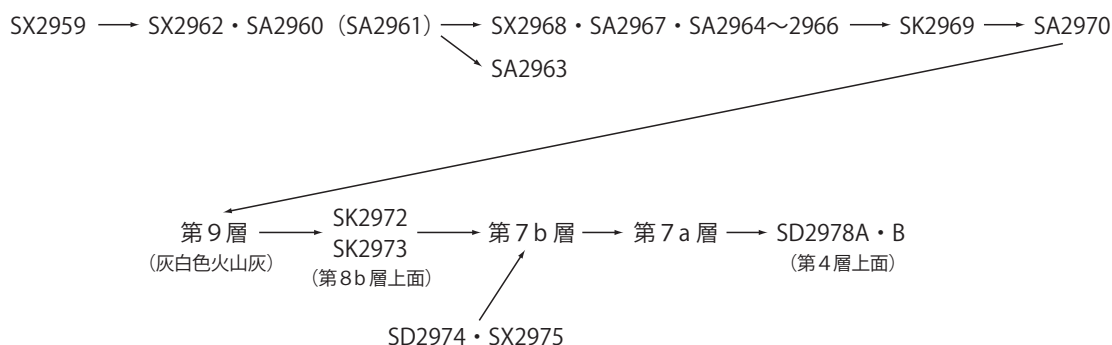
### 3. 総括

鴻ノ池地区、政庁南西地区の順に調査成果を総括する。

#### (1) 鴻ノ池地区

##### A. 遺構の年代について

発見した遺構には、基礎地業、盛土遺構とその土留め施設（しがらみ）、杭列、土壇、溝などがある。これら遺構の変遷を重複関係と掘り込み面の違いから整理すると次のようになる。



併せて各遺構から出土した遺物を見ると、灰白色火山灰層である第9層が堆積する以前の遺構からはSX2968 盛土遺構を除いてほとんど遺物が出土していない。

そこで、まずSX2968 とこれに伴う SA2964～2967 の年代についてみる。これらは2時期目以降の護岸施設である。SX2968 の盛土中からロクロ調整の土師器坏、底部ヘラ切の須恵器坏、須恵器蓋の折縁の口縁部破片などが出土しており、8世紀後半～9世紀前半頃のものと考えられる。なお、本護岸施設の機能時に堆積したとみられる第21層からは須恵器坏の回転糸切底部破片や大戸産の須恵器瓶体部破片が出土しており、年代観に矛盾はない。

次にSX2968 より古い遺構をみると、SX2959 とSX2962、SA2960・2961 がある。SX2959 は今回検出した最も古い遺構であるが、木製品以外の遺物が出土していない。SX2962、SA2960・2961 は最初の護岸施設で、SX2962 の盛土最下層からロクロ調整の土師器坏体部破片が1点出土しているが、それ以外の土師器、須恵器は8世紀後半頃のものである。両者とも出土遺物から時期を特定することは難しく、SX2968 との関係から8世紀後半～9世紀前半以前のものとなる。

SX2968 より新しく、灰白色火山灰層が堆積する以前の遺構には、SK2969 とSA2970 がある。SK2969 はSX2968 の上面から掘り込まれた土壇で、ロクロ調整の土師器坏体部破片が出土しており、9世紀代のものと考えられる。SA2970 は打ち込み杭列のみが残存するもので、時期を限定することは難しい。

灰白色火山灰が堆積した以降には、SK2972・2973、SD2974 とSX2975、SD2978A・B などが認められる。SK2972・2973 は第8b層上面から掘り込まれており、SK2972 からは須恵系土器坏・高台坏が出土している。SK2973 では遺物は出土していないが、両者の掘り込み面や堆積土の特徴が共通することから、いずれも10世紀前半頃（915年以降）の年代を考えておきたい。

SD2974 は第 8b 層上面で確認した溝で、底面から須恵系土器 22 点が重なった状態で出土している (SX2975)。これらの一括土器は、坏類の法量における大・小の分化が不明瞭で、組成において高台坏が一定の割合を占めているなどの特徴から、10 世紀中頃のものと考えられる。

SD2978 は A → B 2 時期の重複がみられる溝で、古い A 期の溝からはきわめて小型で低平な須恵系土器の小皿が一定量出土しており、12 世紀前半頃の年代が想定される。B 期の溝はこれよりも古い 10 世紀後半～11 世紀代の土器を多く出土しているが、この溝は 11 世紀後半～12 世紀前半頃の白磁皿が出土した第 4 層上面から掘り込まれており、A 期と同様に 12 世紀前半頃のものと理解しておきたい。

なお基本層序各層については、その出土土器の特徴から、第 22・23 層が 8 世紀後半～9 世紀前半頃、第 21 層が 9 世紀代、第 10～19 層が 9 世紀後半～10 世紀前半頃、第 7b 層が 10 世紀中頃、第 7a 層が 10 世紀後半頃、第 6 層が 11 世紀前半頃、第 5 層が 11 世紀後半頃、第 4 層が 12 世紀前半頃に堆積したと考えられる。

## B. 主な遺構について

鴻ノ池地区で検出した基礎地業、護岸施設、馬の骨が出土した土壌の概要をまとめ、性格などについて若干の検討を加える。また、その後の溝・土壌が検出された 10 世紀以降の状況について概括する。

### i. SX2959 基礎地業について

地山スクモ層 (第 24 層) 上に丸材を敷き並べた筏地業とその上部に積み上げた厚さ約 0.7 m の盛土からなる SX2959 基礎地業を発見した。南北 1.6 m、東西約 2.0 m にわたって検出したが、更に調査区の北と東西両側へ延びている。この場所から約 255 m 東方の低湿地部を調査した第 38 次調査 (年報 1981) では、今回検出した基礎地業と同様な構造の SX1261 基礎地業が検出されており、その上部中央で SA1260 材木列 (塀) が確認されている。このことを踏まえると、SX2959 も材木塀の基礎地業である可能性が高いと考えられる。

鴻ノ池地区の東方では、政庁 - 外郭南門間道路上の地山面で掘立式八脚門と推定される SB2776 建物跡 (第 74・79 次調査: 年報 2003・2007) が発見されている。門の中心はほぼ政庁中軸線上にあるとみられ、残存する東半部の柱穴をみる限り、桁行脇間が 3.1m、梁間片間が 3.3m で、城内最大規模の門となる可能性がある。方向は南北の発掘基準線に対して北で東に 3° 振れている。

また、この門のすぐ東側で SX2909 積土遺構 (第 79 次調査)、さらに東方の低湿地部で SX1261 基礎地業・SA1260 材木列、外郭東辺部で SX1339 積土遺構 (第 41 次調査: 年報 1982) が検出されており、ほぼ一直線上に並ぶことから一連の区画施設である可能性を考えてきた。今回、門の西側で SX2959 を発見したことで、門を中心として東側だけでなく、西側にも一直線上に区画施設が並ぶことになり、その長さが 420m 以上にも及ぶことで、これらが一連の区画施設となる可能性がより高まった。

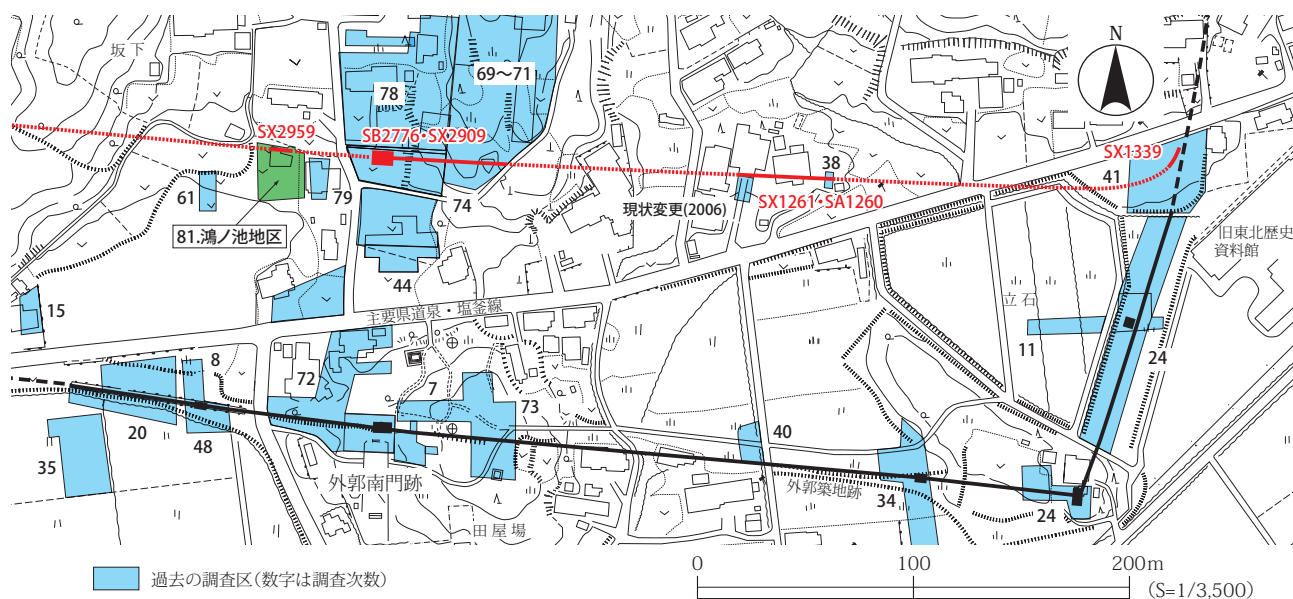
## ii. 外郭南辺の再検討について

前述の区画施設もしくはその基礎地業を一連のものとみた場合、政庁南門から南へ約 190m、外郭南門から北へ約 120m に位置し、その方向は東西の発掘基準線に対して東で南へ 2～3° 振れ<sup>(註1)</sup>、概ね門の棟通りに向かって延びることになる。政庁南辺築地、外郭南辺築地と比較すると、政庁中軸線を基準とした東西の軸線から東でやや南へ振れている点で外郭南辺築地と共通しているが、その振れ幅は本区画施設の方が小さい。

構造についてみると、低湿地部では先に述べたように筏地業を伴う基礎地業上に構築された材木塀の存在が想定される。丘陵部では SX2909・1339 が検出されているが、いずれも残りが悪く、その構造は判然としない。しかし、これらの積土遺構は 2.0～2.2m の間隔で平行して延びる柱列・溝の間に積土が残存する点で共通している。積土の幅が約 2m で一定し、均質な厚さでほぼ水平に積まれていること、積土上部では柱穴や柱痕跡、溝などが確認されていないこと、SX2909 の北側に土採り穴とみられる SK2891 土壌が存在すること、SX1339 の西側に地山削り出しによる段が残存することなどを注視すると、築地塀の可能性が考えられ、少なくとも土塀であった可能性は高い。積土の両側で検出されている柱列や溝の性格は、添柱穴や堰板の据方の可能性も考えられるが、柱穴が対になっておらず、間隔にも疎密があり一定していないことから特定できない。

年代についてみると、丘陵部の SB2776 と SX2909 は層序および周辺遺構との関係を整理した上で、政庁第 I 期に位置付けられ、SX1339 は 8 世紀末頃の整地層に覆われている。低湿地部の SX1261・SA1260 は 9 世紀後半以前、SX2959 基礎地業は 9 世紀前半以前のものである。これらを一連の区画施設とみると、SX2909 の年代観から第 I 期に属する遺構となる。

その場合、この場所から約 120m 南に位置する外郭南辺との関係が問題となる。外郭南辺では SF202A (第 7・8・20・34・48 次調査: 年報 1970・1973・1979・1985)・202a (第 72 次調査:



図版53 区画施設の位置



2001) 築地塀跡を検出し、一連のものとして第 I 期に位置付けてきた。第 I 期に SX2909・1339、SA1260 など構成される区画施設が存在したとすると、この外郭南辺築地と併存していたか、もしくは外郭南辺築地との間で区画線の移動があった可能性が考えられる。

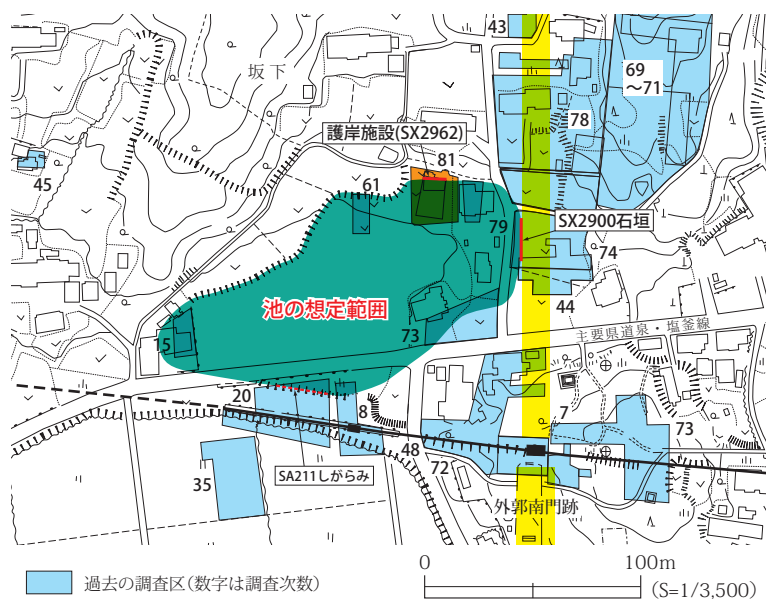
本区画施設は、外郭南辺築地よりも政庁に近い北側（内側）に位置しており、低湿地部で築地塀が採用されていないとみられることなど外郭南辺築地より古く解せる要素もあるが、年代決定の根拠となる遺物が全く出土していないことをはじめ、構造やその後の西側への延び、外郭他辺との関係など判然としない点や課題が多い。今後、本年度の調査区より西側を中心に調査を進め、その成果を踏まえて外郭南辺の移動について結論を出したいと考えている。

### iii. 護岸施設について

SX2959 基礎地業の高まりを利用して構築された護岸施設を発見した。少なくとも 3 時期の変遷があり、SA2963 しがらみの位置付けが問題となるが、基本的に新しくなるごとに南側へ拡張し、構造も簡略化してゆく様子が窺われる。上限を特定できないが、8 世紀後半頃には設けられ、改修を重ねながら 9 世紀末頃まで機能していたと考えている。

本護岸施設の南側の状況をみると、遅くとも政庁第 II 期には約 120m 南に外郭南辺築地が設けられることによって排水口が塞がれている。今回の調査地点では、護岸施設の南側にスクモ、粘土を中心とした堆積層が形成されており、鴻ノ池地区の中央北寄りを調査した第 61 次調査（年報 1991）でも、花粉分析の結果や層相、遺物の出土状況から灰白色火山灰の降灰以前は水がある程度の深さで溜まった状態であったことが判明している。これらのことを踏まえると、今回検出した護岸施設は南側に広がる池沼の北岸を護岸する施設と考えられる。

特に、最初の施設（SX2962・SA2960・SA2961）は斜面に葺石を伴うことから、見栄えが意識されていたと考えられ、池と庭園（園池）の池部分にあたる可能性がある。その機能時とみている 8 世紀後半頃には、政庁 - 外郭南門間道路の西端に SX2900 石垣（第 79 次調査：年報 2007）が存在し、池の北岸から東岸にかけては石で装飾された状態であったことが推測される。なお、南辺築地の基礎地業の北側土留めとして SA211 しがらみ（第 20 次調査：年報 1973）が検出されており、南岸は当時からしがらみであった可能性がある。SX2962 の傾斜は約 24° で、SX2900 の傾斜は約 80° と急角度である。これまでの調査



図版54 護岸施設と池の想定範囲

成果と現況地形から当時の池の範囲を想定すると、東西約 160 m、南北約 100 m で、政庁 - 外郭南門間道路・外郭南辺と接する部分以外は地形に合わせて屈曲する自然な形となる。

何れにしても、調査範囲が狭く、護岸施設の状況を十分に把握できておらず、類例も見出せない。今後更に周辺部を含めた鴻ノ池地区の調査を進め、護岸施設の構造や年代、池の状況を把握してゆく必要があるが、多賀城内の南西部（低湿地部）の使われ方を具体的に捉えることができる重要な発見であった。

#### iv. SK2969 土壙について

SK2969 は池沼の護岸施設である SX2968 盛土遺構の上面で検出した 9 世紀代の土壙で、長軸 2.1 m 以上、短軸 2.0 m 前後の東西に長い不整な方形を呈する。本土壙は人為的に埋め戻されており、その底面から馬の骨がまとまって出土している点で注目される。馬は成体で、骨には頭蓋・頸椎・胴・四肢骨がみられるが、遺存状態が悪く、埋納時の詳細な状況は分からない。しかし、確認した頭蓋骨（下顎骨）の数から少なくとも 3 頭分の骨が一度に埋納されていることや、本土壙が政庁 - 外郭南門間道路から近い池の岸辺に配置されていることなどの特殊な状況からみて、意図的に馬を殺して埋納した遺構の可能性が考えられる。

このような土壙の類例は、平城京跡の東一坊坊間東小路との交差点に近い七条条間北小路南側溝の底に掘られた SX444 土坑（奈文研：1996）、長岡京跡の東二坊大路と二条条間大路交差点の二条条間大路南側溝底面で検出された SX16207（向日市教委：1989）などがある。SX444 は長軸 6.4 m の土壙で、人面墨書土器、土師器甕、須恵器坏・壺と一緒に馬の顎骨・四肢骨が埋められていた。SX16207 は長軸 6.1 m 以上の土壙で、人面墨書土器、土馬、ミニチュアカマド、鉄鏃、鳴鏑などと一緒に頭部が切断された馬が出土している。双方とも条坊の交差点付近の側溝内に位置し、祭祀具が用いられていることから祭祀遺構と考えられている。

今回検出した SK2969 は、祭祀具とみられる遺物が出土していない点でこれらの土壙とは異なるが、主要な場所の水辺に位置し、生き馬を殺して納めている可能性が高い点で共通しており、祭祀遺構と思われる。

#### v. 10 世紀以降の状況について

調査区西半部では 10 世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰（第 9 層）の残りが良く、ほぼ水平に堆積している。この頃には北側から供給される土砂の堆積が進んで、全体に平坦な低地となっていたことが窺われ、その後に堆積した第 7 a・b 層からは 10 世紀中～後半頃の須恵系土器が多量に出土した。さらに、表土や耕作土を除く最上層（第 4 層）には 11 世紀後半～12 世紀前半頃の白磁が含まれており、第 4 層上面から掘り込まれた溝なども散見される。12 世紀前後には地表面の乾燥がかなり進んでいたと考えられる。その後、この場所は近年まで水田として利用されていた。

## (2) 政庁南西地区

### A. 遺構の年代について

発見した遺構には、材木堀跡、石敷遺構、整地層、井戸跡、土壙、溝、柱穴などがある。これら遺構の多くは、調査区中央に広がる SX2980 石敷遺構 (SX2979 整地層) と重複しており、その前後の時期に大別できる。

そこで、まず SX2980 (SX2979) の年代についてみると、整地層中や石敷面からは遺物が出土していないため造営年代や機能期間を特定することは難しいが、これより古い SD2984 から出土した平瓦破片は全てⅡ類であることから少なくとも政庁第Ⅱ期以降で、石敷面よりも上部に灰白色火山灰のブロックを含む第Ⅴ層が堆積していることから 10 世紀前葉以前のものである。

次に SX2980 より古い遺構をみると、SA1601、SK2981、SD2982・2984・2985 がある。SD2984 からⅡ類の平瓦破片が出土した以外は遺物が認められず、時期を特定することは難しい。

SX2980 より新しい遺構については、須恵系土器や手捏かわらけ、白磁、陶器などが出土しているものが比較的多く認められ、その出土土器の年代観に遺構の重複関係や灰白色火山灰との関係を加えて年代ごとにまとめると、以下のようになる。

#### 【10 世紀前葉以前の遺構】

SK2986・2987 がある。SK2986 の上部には第Ⅴ層が堆積しており、SK2987 の堆積土には灰白色火山灰のブロックが含まれることから、いずれも 10 世紀前葉以前のものである。確認面から須恵系土器が出土しており、この中には小皿や台付鉢が含まれるが、両遺構の上部は現代の畑耕作時に攪拌されており、遺構より新しい時期の遺物の混入と考えられる。

#### 【11 世紀以降の遺構】

SE2997、SD2994～2996・3005 がある。須恵系土器坏・小皿、白磁の小破片などが出土しており、その特徴から 11 世紀以降のものと考えられる。この中で、SE2997、SD2994・2995 は第Ⅲ層よりも上層から掘り込まれており、11 世紀後半以降の年代が与えられる。

#### 【12 世紀後半頃の遺構】

SK2998・3004、SD2988・2989・2990・3006・3008・3009・3012・3015 がある。手捏かわらけや白磁、中世陶器、瓷器系陶器 (渥美) などが出土しているか、またはこれらを出土した遺構よりも新しい遺構で、12 世紀後半頃の年代が想定される。なお、SK2998 からは白磁碗破片 (太宰府市分類Ⅴ類)、SD3015 の堆積土上層からは古瀬戸底卸目皿底部破片が出土している。前者は遺構の年代観よりもやや遡る 11 世紀後半から 12 世紀前半頃のもので、後者は下って 14 世紀代のものとみられる。SD3015 は調査区南端部を東西に延びる大溝で、下層からは手捏かわらけ、白磁皿 (太宰府市分類Ⅳ-1b 類、Ⅺ-4 類)、瓷器系陶器が出土しており、流入土によって埋没するまでに相当の時間を要したことが窺われる。

#### 【13 世紀代の遺構】

SD3011 がある。手捏かわらけと中世陶器が出土しており、13 世紀代のものと考えられる。



なお、SX2930 は第 80 次調査で検出した SX2931 平場跡の造成に伴う整地層の続きで、上面から須恵系土器杯の底部破片が出土している。この整地層については、第 80 次調査で出土土器を検討した結果、11 世紀後葉～12 世紀代のものと考えている。

おって、基本層序第Ⅲ層からは比較的まとまって須恵系土器が出土した。この須恵系土器をみると、小型で低平な小皿と坏類が主体を占め、高台坏や台付鉢も含まれることから、第Ⅲ層は 11 世紀後半頃に堆積したと考えられる。

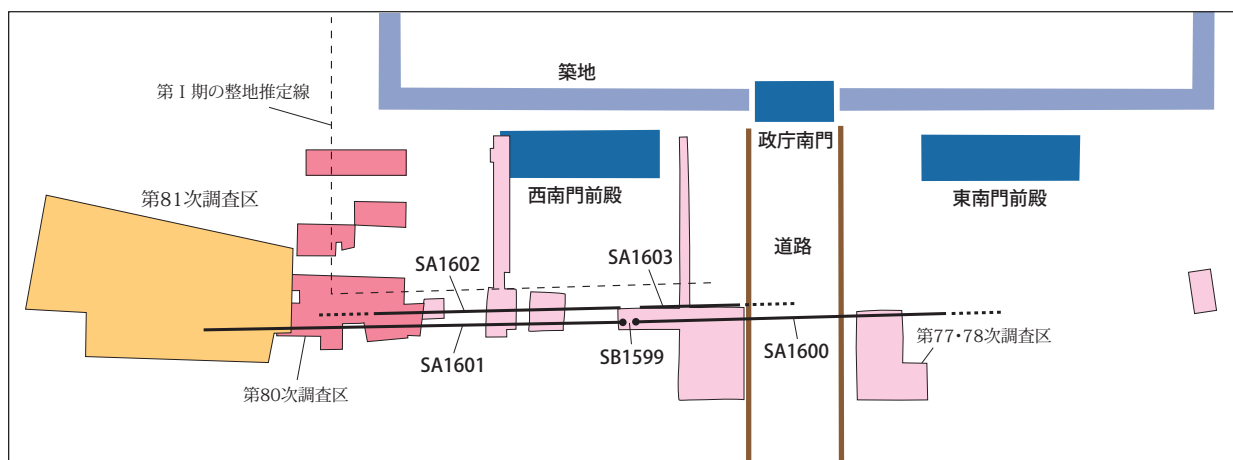
## B. 主な遺構について

政庁南西地区で検出した塀跡と石敷遺構の概要をまとめ、性格などについて若干の検討を加える。

### i. SA1601 塀跡について

SA1601 塀跡は第 50・77 次調査で検出した SB1599 門跡から西へ延びる材木塀で、第 I 期政庁造営時の仮設的な塀跡とみている。第 80 次調査で W64 ラインまで続くことを確認していたが、今回の調査ではこの塀跡が更に西へ延び、S97・W78.5 付近で途切れることを確認した。

この場所を西端とみると、東端の SB1599 までの長さは約 56.5m、門跡東側の SA1600 塀跡も含めた長さは約 85m となり、政庁地区の南側のみを画する施設である。



図版 55 塀跡の位置

### ii. SX2980 石敷遺構について

東西 17.5m 以上、南北 16.0m 以上の範囲を造成し、その上面に礫と少量の瓦・土器片を敷き詰めた SX2980 石敷遺構を発見した。造営年代や機能期間を特定することは難しいが、政庁第Ⅱ期以降で、10 世紀前葉以前のものである。この石敷遺構の特徴として以下の点が挙げられる。

- ① 沢筋を含めた沢の内部を広範囲に造成して石敷面を構築している (SX2979 整地層)。
- ② 敷石には主に径 5～15cm の礫が用いられ、所々に径 1.0 m 前後の大きな礫が頭を突き出すかたちで据えられている。

- ③ 石敷面には緩やかな起伏があり、沢筋部分が最も低く、全体として南側へ約5°傾斜している。
- ④ 石敷上面に砂や粘土のまとまった堆積は認められない。
- ⑤ 周辺で同時期の可能性がある建物跡や溝などの施設が検出されていない。

多賀城内で検出された石敷を伴う遺構には、政庁正殿の南前面に広がるSH148石敷広場跡（政庁跡本文編：1982）、外郭東門のすぐ西側で検出されたSX314小石敷路面（第64次調査：年報1993）、大畑地区で検出されたSE1990井戸跡に伴うSX2003石敷遺構（第60次調査：1991）などがある。いずれも平坦面を指向し、その配置や付属する施設の存在などから性格が判明しているもので、今回検出したSX2980とは全く異なる。

管見では、このような遺構の類例を見出すことは難しいが、長岡京右京九条三坊十一・十二町・久保川遺跡（古閑：2003・2006）で検出された8世紀中頃～9世紀代に比定される礫敷き遺構SX16は本遺構と類似した特徴をもつ。SX16は扇状地の基盤層上面に拳大以下の垂角礫を敷き詰めた遺構で、東側へ3°傾斜し、緩やかな段差が3カ所認められるなど本遺構との共通点があり、東に位置する池SG4よりも地形的に高い西側一帯に広がっている。その性格については、池との位置関係を有機的なものと想定した上で、湧水を集水し、東側の池へ給水するための機能を具えた庭園遺構の一部であった可能性が考えられている。

大きくみれば、SX2980は池が存在したと考えられる鴻ノ池地区より地形的に高い北側（距離約150m、比高差約17m）に位置しており、SX16と配置の面でも共通性が窺われる。そこで、本石敷遺構についても集水や導水の機能を具えた庭園遺構の一部である可能性を考えておきたいが、この仮説は池との相関関係を前提としていることから、本調査区と鴻ノ池地区の間や本調査区北側を中心に周辺部の調査を進めてデータを収集した上で、改めて検討したい。

## 註

- （註1）SX2909の方向は、その両側を平行して延びる柱列でみると東西の発掘基準線に対して東で南へ7°振れる。SX1339は東辺部から「ノ」字状に離れて西へ向かっており、方向を算出するのは難しい。また、SA1260・SX1261とSX2959は検出範囲が狭く個別には方向が求められない。そこで、軸線として明確に位置が求められるSA1260の材とSX2909に伴う柱列2列間の中央を通る線分を想定し、全体の平均的な傾きを算出すると、東西の発掘基準線に対して東で南へ2～3°振れている。

## 引用・参考文献

- 大林 達夫 2006 「周防国府草園地域（推定国司館）西庭園遺構」『古代庭園研究Ⅰ - 古墳時代以前～奈良時代 -』  
奈良文化財研究所学報第 74 冊
- 古閑 正浩 2003 「長岡京跡右京第 735 次調査・久保川遺跡の庭園遺構」『古代文化』第 55 巻第 11 号
- 古閑 正浩 2006 「長岡京右京九条三坊十一・十二町庭園遺構」『古代庭園研究Ⅰ - 古墳時代以前～奈良時代 -』  
奈良文化財研究所学報第 74 冊
- 島根県教育委員会 2005 『史跡出雲国府跡 - 3 -』 風土記の丘地内遺跡発掘調査報告所 16
- 島根県教育委員会 2008 『史跡出雲国府跡 - 5 -』 風土記の丘地内遺跡発掘調査報告所 18
- 周防市教育委員会 2002 『平成 12 年度周防市内遺跡発掘調査概報』
- 高瀬 要一 2006 「Ⅲ 年度ごとの研究のまとめ」『古代庭園研究Ⅰ - 古墳時代以前～奈良時代 -』  
奈良文化財研究所学報第 74 冊
- 太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡ⅠⅤ』 太宰府市埋蔵文化財調査報告書第 49 集
- 奈良国立文化財研究所 1996 「平城宮跡・平城京跡の発掘調査」『奈良国立文化財研究所年報 1995』
- 日本考古学協会三重県実行委員会 1996 『シンポジウム 1 水辺の祭祀』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1971 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1970』(第 7～11 次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1974 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1973』(第 19～22 次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1980 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979』(第 34・35 次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1981』(第 38・39・40 次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政庁跡 本文編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1983 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1982』(第 41・42 次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1986 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1985』(第 46・48・49 次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1992 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』(第 60・61 次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2002 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2001』(第 72 次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2003 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2002』(第 73 次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2004 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2003』(第 74・75 次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2006 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2005』(第 77 次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2007 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2006』(第 78 次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2008 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2007』(第 79 次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2009 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2008』(第 80 次調査)
- 向日市教育委員会 1989 『向日市埋蔵文化財調査報告書 第 27 集 (1989)』



### Ⅲ. 付 章

#### 1. 関連研究・普及活動

平成 21 年度は多賀城跡発掘調査の他に、次の調査研究事業や普及活動を行った。

##### (1) 多賀城跡環境整備事業

多賀城跡環境整備事業は、平成 17 年度から第 8 次 5 ヶ年計画に入り、「特別史跡内の案内板と標柱の整備」、「外郭北辺北東隅の再整備」、「政庁地区の再整備」を行う計画となっている。最終年にあたる平成 21 年度は「政庁地区の再整備」を実施し、総事業費 7,983 千円（国庫補助 50%）で下記内容の工事を行った。

- ① 構造物撤去工：築地跡を表現したソイルセメント（昭和 46～48 年度施工）の撤去を行った。
- ② 敷地造成工：ソイルセメントを撤去した箇所の盛土養生を行った。
- ③ 植生工：整形盛土を行った築地跡を張芝にて緑化修景を行った。

##### (2) 特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

特別史跡内の現状を変更するにあたっては、現状変更の申請者及び関係機関と遺跡保護のために慎重な協議を行い、遺跡への影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査を行っている。平成 21 年度における現状変更申請は以下の 7 件（確認調査 1 件、工事立会 6 件）であるが、このうち番号 7 は平成 22 年 2 月 25 日時点で工事未着手である。

番号	変更事項	変更箇所	申請	文化庁許可	対応
1	下水道管敷設	多賀城市市川字丸山 1	平成21年 3 月25日	21委庁財第 4 の6131号 平成21年 5 月15日	工事立会 平成21年 6 月 3～4 日
2	汚水管敷設	多賀城市市川字田屋場14-6ほか	平成21年 5 月29日	21委庁財第 4 の6501号 平成21年 7 月17日	工事立会 平成21年 9 月28日
3	下水道管敷設	多賀城市市川字城前79	平成21年 6 月12日	21委庁財第 4 の6692号 平成21年 7 月17日	工事立会 平成21年 9 月 1～3 日
4	電柱移設	多賀城市市川字奏社38	平成21年 7 月31日	文号外 平成21年 9 月 9 日	工事立会 平成21年11月11日
5	浴室改築	多賀城市市川字金堀16	平成21年 8 月24日	21委庁財第 4 の7224号 平成21年10月16日	確認調査 平成21年12月 8 日
6	法面土砂崩壊	多賀城市市川字-1	平成21年 9 月 8 日		工事立会 平成21年 9 月 2 日
7	下水道管敷設	多賀城市市川字田屋場38-2	平成21年10月28日		

平成 22 年 1 月 30 日現在

#### 平成 21 年度現状変更申請等一覧

### (3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所は、多賀城に関連する宮城県内の城柵及び官衙遺跡や生産遺跡について計画的な調査と研究を継続的に行っており、平成 21 年度から第 8 次 5 ヵ年計画に基づく調査を開始した。

第 8 次 5 ヵ年計画は第 7 次 5 ヵ年計画に続き、多賀城創建期の窯跡群を中心に発掘調査を行い、瓦と須恵器生産の様相を具体的に把握することで、工人集団とその体制、社会的背景などの諸問題を解明することを主目的としている。初年度にあたる本年度は昨年度に引き続き、色麻町教育委員会の共催を得て色麻町日の出山窯跡群 F 地点の発掘調査を実施した。発掘対象面積約 4,425㎡、発掘調査面積約 620㎡で、総事業費は 3,168 千円（50%国庫補助）である。

日の出山窯跡群 F 地点では、昭和 63 年（1988 年）の磁気探査による分布調査、平成元年（1989 年）の試掘の結果、地下式竈窯跡数基や工房と見られる竪穴住居跡、粘土溜りなどの存在が確認されていた。昨年度は、その南半部を対象に発掘調査を実施し、窯跡や竪穴住居等の分布を確定した。今年度は北半部を中心に確認調査を行った。調査区は丘陵尾根を境に東西の両斜面地区に分かれており、今年度は西斜面地区に主眼を置いて調査を行った。

その結果、西斜面地区では窯跡 3 基、竪穴住居跡 3 軒、平場跡 1 ヵ所、土壙（粘土採掘坑）1 基を検出し、昨年度の南半部の調査成果と合わせて、西斜面における窯場の範囲、遺構の構成、各遺構の規模・構造や性格、保存状況などが明確になった。粘土の採掘から、成形・作業のための工房、焼成のための窯跡まで、一連の工程を示す遺構を発見・調査したことにより、1 つの窯場における構成や配置の状況が捉えられた。

東斜面地区においても、窯跡が密集して存在するのを確認した。採取された瓦をみると多賀城第 I 期でも古い段階の瓦（I A・I C 類）を主体としていることから、西斜面とは異なり第 I 期でも古い窯跡が分布する可能性が高い。今回は確認に留めたが、来年度は内容把握のための調査を実施する計画である。

### (4) 遺構調査研究事業

本事業は多賀城跡及び関連遺跡の発掘調査によって検出した諸遺構の保存と活用を目的として、他遺跡の類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は大崎市新田柵跡推定地・大吉山窯跡群、栗原市伊治城跡、東松島市赤井遺跡、涌谷町城山裏土塁跡、丸森町堂平廃寺跡、熊本県鞠智城跡の調査データを収集し比較検討した。

### (5) その他

#### 1. 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するために、下記の現地説明会を開催した。

古川 一明・三好 秀樹	「多賀城跡第 81 次調査現地説明会」	平成 21 年 11 月 7 日
吉野 武・廣谷 和也	「日の出山窯跡群現地説明会」	平成 21 年 7 月 11 日

## 2. 各機関・委員会などへの協力

後藤 秀一 秋田市秋田城跡環境整備指導委員 弘田柵跡保存管理計画策定指導委員 志波城跡史跡整備委員 特別史跡多賀城跡附寺跡第3次保存管理計画策定委員会委員 多賀城市文化財保護委員会委員 多賀城市環境審議委員 史跡伊治城跡調査整備指導委員 三十三間堂官衙遺跡発掘調査検討委員会委員 角田市郡山遺跡調査指導委員 古代城柵官衙遺跡検討会代表世話人 ほか

## 3. 講演会・研究会などへの協力

古川 一明「多賀城跡第80次調査の概要」多賀城市遺跡調査報告会 平成21年7月11日  
吉野 武「日の出山窯跡群の調査成果」色麻町遺跡調査報告会 平成21年9月27日  
後藤 秀一・吉野 武ほか 涌谷町城山裏土塁跡発掘調査 平成21年11～12月  
吉野 武「木簡資料の公表のあり方について」第3回木簡ワークショップ奈良文化財研究所 平成22年1月8日  
古川 一明「伊具丸森の古代史」丸森町文化財友の会 第2回研修会 平成22年2月20日

## 4. 研究発表・執筆など

三好 秀樹「多賀城跡第81次調査の概要」平成21年度宮城県遺跡調査成果発表会  
東北歴史博物館 平成21年12月12日  
廣谷 和也「日の出山窯跡群調査の概要」平成21年度宮城県遺跡調査成果発表会資料  
同上 平成21年12月12日  
三好 秀樹「多賀城跡第81次調査の概要」第36回古代城柵官衙遺跡検討会  
東北歴史博物館 平成22年2月27日  
廣谷 和也「日の出山窯跡群調査の概要」第36回古代城柵官衙遺跡検討会  
同上 平成22年2月27日  
吉野 武「多賀城政庁跡の概要」第36回古代城柵官衙遺跡検討会  
同上 平成22年2月28日  
廣谷 和也「多賀城実務官衙の概要」第36回古代城柵官衙遺跡検討会  
同上 平成22年2月28日  
三好 秀樹「多賀城外郭線の概要」第36回古代城柵官衙遺跡検討会  
同上 平成22年2月28日

## 5. 連携大学院

東北大学大学院文学研究科長と宮城県多賀城跡調査研究所長の協定に基づき、文学研究科文化財科学専攻の大学院生の研究と指導にあたった。

後藤 秀一（客員教授）  
古川 一明（客員准教授） } 文化財科学研究実習Ⅰ「古代遺跡調査の方法と実践」



## 2. 組織と職員

〈宮城県教育委員会行政組織規則(抄)〉

第13条の四 文化財保護課の分掌事務は、次のとおりとする。

四 多賀城跡調査研究所及び歴史博物館に関すること。

第21条 特別史跡多賀城附寺跡（これに関連する遺跡を含む。以下同じ）の発掘、調査及び研究を行うため、地方機関として多賀城跡調査研究所を設置する。

2 多賀城跡調査研究所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
宮城県多賀城跡調査研究所	多 賀 城 市

3 多賀城跡調査研究所の所掌事務は、次のとおりとする。

- 一 特別史跡多賀城附寺跡の発掘に関すること。
- 二 特別史跡多賀城附寺跡の出土品の調査及び研究に関すること。
- 三 特別史跡多賀城附寺跡の環境整備に関すること。
- 四 庶務に関すること。

第24条 必要と認めるときは、多賀城跡調査研究所に次の表の上欄に掲げる職を置き、その職務は、当該下欄に定めるとおりとする。

職	職 務
上席主任研究員	上司の命を受け、重要かつ高度な調査研究に従事し、主任研究員、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
副主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、研究員の業務を整理する。
研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事する。

2 上席主任研究員、主任研究員、副主任研究員及び研究員は、技術職員をもって充てる。

〈職員〉

所長 管理部長  
後藤 秀一 齋藤 正一

《 研究 班 》

上席主任研究員(班長) 古川 一明  
副主任研究員 三好 秀樹  
副主任研究員 吉野 武  
研究員 関口 重樹 [博物館兼務]  
技 師 廣谷 和也

《 管 理 班 》

次 長(班長) 大友 茂 [博物館兼務]  
主 幹 川口 雅子 [博物館兼務]  
主 任 主 査 村上 丈晴 [博物館兼務]  
主 査 高橋 健司 [博物館兼務]

### 3. 沿革と実績

#### (1) 宮城県多賀城跡調査研究所の沿革

年 月	事 項
大正11.10	多賀城跡が史蹟名勝天然紀念物保存法（大正8・4公布）により史蹟指定、指定名称「多賀城跡附寺跡」
昭和35	県教委が「多賀城跡発掘調査委員会」を組織して5ヵ年計画で多賀城跡の発掘調査を実施することになり、その初年度事業として多賀城跡と多賀城廃寺跡の地形図を作成
36.8	多賀城廃寺跡第1次発掘調査実施（県教委主体、多賀城町と河北文化事業団共催。調査団長は伊東信雄東北大学教授）
37.8	多賀城廃寺跡第2次発掘調査実施、主要伽藍配置が判明
38.8	多賀城跡政庁地区発掘調査（第1次）開始、以後40年8月（第3次）まで実施、政庁地区の朝堂院的な建物配置が判明
41.4	多賀城跡附寺跡特別史跡に昇格指定
43.11	多賀城町が多賀城跡政庁地区の発掘調査（第4次）を再開
44.4	宮城県多賀城跡調査研究所設立
44.7	多賀城跡調査研究指導委員会設置（委員長伊東信雄） 研究所による多賀城跡調査研究事業開始
44.10	色麻村日の出山窯跡の発掘調査実施
45.3	『多賀城跡調査報告1－多賀城廃寺跡－』刊行
45.4	研究所による多賀城跡環境整備事業開始
48.10	金堀地区を対象とした第21次調査で計帳様文書断簡を発見
49.2	外郭西辺地区の追加指定が官報告示
49.4	多賀城関連遺跡発掘調査事業開始
49.8	桃生城跡の発掘調査に着手（昭和50年度まで継続）
49.8	プレハブ庁舎から東北歴史資料館の建物に移転
51.3	特別史跡多賀城跡附寺跡保存管理計画書策定
52.7	伊治城跡の発掘調査に着手（昭和54年度まで継続）
53.4	研究第一科・同第二科の2科制となる、遺構調査研究事業開始
53.6	漆紙文書の発見を報道発表、これにより研究所が山本壮一郎知事から表彰を受ける
55.3	『多賀城跡－政庁跡図録編－』刊行
55.3	館前遺跡の追加指定が官報告示
55.7	名生館遺跡の発掘調査に着手（昭和60年度まで継続）、初年度の調査で8世紀初頭の官衙中枢部を検出
57.1	現状変更に伴う緊急調査（第40次）により外郭線南辺築地中央部で木樋発見
57.3	『多賀城跡－政庁跡本文編－』刊行
58.11	第43・44次調査で政庁南前面の道路遺構発見
59.3	多賀城跡南面地域の追加指定が官報告示
60.9	名生館遺跡関連合戦原瓦窯跡発掘調査実施
61.8	東山遺跡の発掘調査に着手（平成4年度まで継続）
62.8	名生館官衙遺跡の史跡指定が官報告示
62.11	第53次調査で多賀城第Ⅰ・Ⅱ期の外郭東門を発見
63.3	特別史跡多賀城跡附寺跡第2次保存管理計画書策定
平成2.6	柏木遺跡の追加指定が官報告示
2.11	多賀城跡調査研究指導委員会に南門－政庁間整備活用専門部会を設置
4.11	日本最古の「かな」漆紙文書について報道発表
5.8	下伊場野窯跡群の調査を実施し、3基の多賀城創建瓦窯跡を発見
5.9	山王千刈田地区の追加指定が官報告示
6.8	桃生城跡の発掘調査を再開（平成13年度まで継続中）、政庁の全貌を解明
7.6	第31回指導委員会において南門－政庁間整備活用計画案承認
9.11	多賀城碑覆屋の解体修理および碑地下部分の発掘調査を実施
10.6	多賀城碑の重要文化財（古文書）指定が官報告示
11.1	東山官衙遺跡の史跡指定が官報告示
11.4	2科制が廃され、研究班となる
11.4	東北歴史博物館の建物に移転
14.1	「多賀城跡等の発掘調査を通して東北古代史の解明に尽くした功績」により第51回河北文化賞を受賞
14.8	亀岡遺跡の発掘調査に着手（平成15年度まで継続）
15.3	『多賀城跡－発掘の歩み－』刊行
15.6	伊治城跡の史跡指定が官報告示
16.5	木戸窯跡群の発掘調査に着手
17.4	多賀城跡調査研究指導委員会を廃し、宮城県条例第13号により多賀城跡調査研究委員会を設置
19.8	日の出山窯跡群の発掘調査に着手
22.3	『多賀城跡－政庁跡補遺編－』刊行

## (2) 事業実績

### 1) 多賀城跡発掘調査事業の実績

調査面積累計	375,930㎡
調査費用累計	815,530円
指定地総面積	約1,070,000
調査面積／総面積	約35%

計画	年度	回数	発掘調査地区	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)	計画	年度	回数	発掘調査地区	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)
第1次5カ年計画	昭和44	5次	政庁地区南東部	1,980	9,000	第4次5カ年計画	昭和59	45次	坂下地区	70	29,000
		6次	政庁地区北東部	2,079				46次	外郭西門地区	750	
		7次	外郭南辺中央部（多賀城碑付近）	264				47次	外郭西辺中央部	1,000	
	昭和45	8次	外郭南辺中央部	350	12,000		昭和60	48次	外郭南門地区	800	29,000
		9次	政庁地区南西部	2,046				49次	外郭北門推定地区	450	
		10次	外郭西辺中央部	495				昭和61	50次	政庁南地区	
	11次	外郭東辺南部	660	51次	外郭北東隅東地区		500				
	昭和46	12次	外郭中央地区北部	3,795	12,000		昭和62	52次	大畑地区及び東辺外の地区	500	29,000
		13次	外郭東辺東門付近	1,600				53次	外郭東門北東地区	1,000	
		14次	外郭東地区北部	2,086				昭和63	54次	外郭東門東地区	
	昭和47	15次	鴻の池周辺	112	55次		外郭東辺中央部（作貫地区）		500		
		16次	政庁地区北半部	1,320	平成元		56次	大畑地区北半部	1,550	29,000	
		17次	外郭北東隅・北西隅	1,729			57次	外郭東辺南半部（西沢地区）	500		
	昭和48	18次	外郭中央部地区北部	2,937	17,000		平成2	58次	大畑地区中央部	1,470	30,000
		昭和49	19次	政庁地区北西部				2,640	59次	大畑地区中央部東側	
			20次	外郭南辺中央部			990	平成3	60次	大畑地区中央部	1,450
	21次	外郭西地区中央部	1,485	61次	鴻の池地区		150				
	昭和50	22次	城外南方（高平遺跡）	3,465	17,000		平成4	62次	大畑地区南半部	1,100	35,000
昭和51		23次	外郭東地区北部（宇大畑）	3,300		63次		大畑地区北半部	1,700		
		24次	外郭南東隅	2,640		平成5	64次	大畑地区北部	3,000	35,000	
昭和52	25次	多賀城廃寺跡南大門推定地	2,310	22,000	第6次5カ年計画		平成6	65次	外郭東門北部・現状変更に伴う調査		2,200
	26次	多賀城廃寺跡中門前方地区	2,310			平成7	66次	大畑地区北西部	3,000	35,000	
	27次	奏社官西隣市川大久保地区	660			平成8	67次	大畑地区西部	3,000	39,000	
昭和53	28次	五万崎地区	2,310	22,000	平成9	68次	大畑地区西部・多賀城碑覆屋に伴う発掘調査	2,650	36,000		
	29次	五万崎地区	2,310		平成10	69次	城前地区南部	2,000	36,000		
	昭和54	30次	五万崎地区		1,980	22,000	第7次5カ年計画	平成11	70次	城前地区南部	2,000
31次		政庁北方隣接地区	1,980	平成12	71次			城前地区南部	2,000	32,300	
昭和55	32次	政庁北方隣接地区	1,000	22,000	平成13	72次	南門西側築地堀跡・南門－政庁間道路跡	1,000	28,900		
	33次	外郭西門地区	1,000		平成14	73次	南門東側築地堀跡・南門－政庁間道路跡	1,800	26,000		
昭和56	34次	雀山地区南低湿地	1,300	30,000	平成15	74次	南門－政庁間道路跡	1,000	25,220		
	35次	鴻の池南地区	900			75次	外郭北辺中央部	500			
	昭和57	36次	外郭東地域中央部作貫地区		1,800	30,000	第8次5カ年計画	平成16	76次	政庁東脇殿・後殿・北辺地区	1,640
37次		多賀城外南地方（砂押川東岸）地区	700	平成17	77次			政庁東楼・西脇殿・南面地区	970	23,730	
昭和58	38次	作貫南端低湿地（緊急調査）	50	35,000	平成18	78次	政庁地区・政庁南面地区・城前地区	2,700	16,610		
	39次	外郭東地域中央部作貫地区	2,500			平成19	79次	政庁－外郭南門間道路・城前地区・鴻池地区	1,350	14,168	
	40次	外郭南辺築地東半中央部（立石地区・緊急）	80				平成20	80次	田屋場地区・政庁南西隅	930	12,752
昭和59	41次	外郭東辺南端部（田屋場東端地区）	1,200	32,000	第9次5カ年計画	平成21	81次	鴻ノ池地区・政庁南西隅	900	12,064	
	42次	外郭東地域中央部（作貫地区）	500			平成22	82次	外郭東辺中央部		11,460	
昭和60	43次	外郭中央地区中央部（政庁南方）	800	32,000	平成23	83次	外郭南西隅（予定）				
	44次	外郭中央地区中央部（政庁南方）	2,500		平成24	84次	外郭北辺（予定）				
						平成25	85次	外郭北辺（予定）			



## 2) 多賀城跡附寺跡環境整備事業の実績

	年度	対象地区	主な工事内容	面積 (㎡)	事業費 (千円)
第1次5カ年計画	昭和45	政庁地区(第1期)	南門翼廊跡・東脇殿跡表示工	3,519	10,000
	昭和46	政庁地区(第2期)	正殿跡・築地塀跡表示工	7,256	20,000
	昭和47	政庁地区(第3期)	西脇殿跡・築地塀跡表示工	14,669	25,000
	昭和48	政庁地区(第4期)	北西門跡・築地塀跡表示工	9,415	20,000
		外郭東門地区	東門跡・竪穴住居跡表示工		
昭和49	六月坂地区	掘立建物跡・倉庫跡・道路跡表示工	8,326	20,000	
第2次5カ年計画	昭和50	外郭東南隅地区(第1期)	木質遺構保存施設設置工	3,600	20,000
	昭和51	外郭東南隅地区(第2期)	湿地修景工・園路工	6,400	10,000
	昭和52	鴻の池地区(第1期)	南辺築地塀跡表示工	2,500	16,000
	昭和53	鴻の池地区(第2期)	多賀城碑周辺修景工		
		南門地区(第1期)	南門跡・築地塀跡保護工		
昭和54	南門地区(第2期)	南門周辺丘陵の地形修復工・緑化修景工	5,200	20,000	
第3次5カ年計画	昭和55	南門地区(第3期)	園路工・便益施設工・緑化修景工	7,030	30,000
	昭和56	外郭南築地東半部	緑化修景工	2,149	30,000
		園路(資料館-南門)	園路工・便益施設工・緑化修景工		
	昭和57	外郭南門地区東斜面	園路工	31,831	28,000
		作貫地区(第1期)	遺構保護盛土工・緑化修景工		
昭和58	作貫地区(第2期)	建物跡表示工・便益施設工・園路工・緑化修景工	54,400	30,000	
昭和59	作貫地区(第3期)	土塁跡及び空堀跡表示工・便益施設工・園路工	6,750	27,000	
第4次5カ年計画	昭和60	作貫地区(第4期)	遺構露出展示工・便益施設工・園路工・緑化修景工	6,400	27,000
	昭和61	政庁南地区	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	7,470	27,000
		作貫地区	便益施設工		
		雀山地区	緑化修景工		
	昭和62	作貫地区北部	園路工・緑化修景工・便益施設工	6,130	27,000
		政庁地区	便益施設工・園路工・緑化修景工		
雀山地区		便益施設工・園路工・緑化修景工			
昭和63	作貫地区北部・丘陵南西裾部	便益施設工・園路工・緑化修景工	8,260	27,000	
平成元	北辺地区南半部	便益施設工・園路工・緑化修景工	6,700	27,112	
第5次5カ年計画	平成2	北辺地区北半部(第1期)	便益施設工・園路工・緑化修景工	11,500	30,000
	平成3	北辺地区北半部(第2期)	便益施設工・園路工・緑化修景工	19,000	30,000
	平成4	北辺地区北半部(第3期)	便益施設工	2,900	30,000
		東門・大畑地区東側部(第1期)	地形修復工・園路工・緑化修景工		
	平成5	東門・大畑地区東側部(第2期)	奈良時代東門跡及び掘立建物跡表示工・便益施設工	2,500	35,000
	平成6	東門・大畑地区東側部(第3期)	便益施設工	550	35,000
第6次5カ年計画	平成7	東門・大畑地区西側北半部(第1期)	道路跡復元工・築地塀跡及び建物跡表示工・便益施設工・緑化修景工	3,120	30,000
	平成8	東門・大畑地区西側北半部(第2期)	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	14,250	39,000
	平成9	東門・大畑地区西側北半部(第3期)	道路跡表示工・便益施設工	805	51,000
		南門地区	多賀城碑覆屋解体修理工	50	
	平成10	東門・大畑地区西側北半部(第4期)	道路跡表示工・排水施設工・緑化修景工	12,500	35,000
平成11	東門・大畑地区西側北半部(第5期)	建物跡表示工・便益施設工・緑化修景工	31,500		
第7次5カ年計画	平成12	柏木遺跡(第1期)	遺構保護造成工・排水工・法面保護工	3,800	14,400
	平成13	柏木遺跡(第2期)	法面保護工・園路階段工・植栽工・排水工		19,700
	平成14	柏木遺跡(第3期)	法面保護工・園路工		9,300
	平成15	柏木遺跡(第4期)	法面保護工・遺構表示工・園路工・植栽工・照明設置工		9,020
	平成16	柏木遺跡(第5期)	園路広場工・雨水排水工・植栽工・照明設置工		8,266
第8次5カ年計画	平成17	案内板・標柱整備	案内板標柱設置工・既設道標解説板再整備工		15,738
	平成18	外郭北辺東北隅の木道再整備	基盤整備工・園路広場工・自然育成工	39,000	11,016
	平成19	外郭北辺東北隅の木道再整備	施設撤去工・園路広場工・施設設置工・自然育成工	39,000	9,462
	平成20	政庁の再整備	築地塀撤去工	13,325	8,514
	平成21	政庁の再整備	築地塀撤去工	13,325	8,500

### 3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業の実績

計画	年度	遺跡名	事業	内容	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)
第1次5カ年計画	昭和49	桃生城跡	第1次発掘調査	内郭地区・外郭の調査	500	2,500
	昭和50	桃生城跡	第2次発掘調査	同 上	850	2,500
	昭和51	伊治城跡	地形図作成		1,020	1,500
	昭和52	伊治城跡	第1次発掘調査	外郭線・郭内の調査	438	3,000
	昭和53	伊治城跡	第2次発掘調査	郭内の調査	780	3,000
第2次5カ年計画	昭和54	伊治城跡	第3次発掘調査	同 上	1,000	4,000
	昭和55	名生館遺跡	第1次発掘調査	城内地区の調査	1,650	7,000
	昭和56	名生館遺跡	第2次発掘調査	同 上	1,960	7,000
	昭和57	名生館遺跡	第3次発掘調査	小館・内館地区の調査	1,156	7,000
	昭和58	名生館遺跡	第4次発掘調査	小館地区の調査	1,020	7,000
第3次5カ年計画	昭和59	名生館遺跡	第5次発掘調査	城内地区の調査	1,800	6,300
	昭和60	名生館遺跡	第6次発掘調査	範囲確認調査	1,300	6,300
		合戦原窯跡		関連窯跡調査		
	昭和61	東山遺跡	第1次発掘調査	遺構確認調査	1,100	7,800
	昭和62	東山遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	1,074	7,000
昭和63	東山遺跡	第3次発掘調査	官衙中枢部の把握	1,200	7,000	
第4次5カ年計画	平成元	東山遺跡	第4次発掘調査	同 上	562	7,000
	平成2	東山遺跡	第5次発掘調査	同 上	600	7,000
	平成3	東山遺跡	第6次発掘調査	同 上	2,200	10,000
	平成4	東山遺跡	第7次発掘調査	同 上	3,260	12,000
	平成5	下伊場野窯跡	発掘調査	多賀城創建期窯跡調査	600	14,000
第5次5カ年計画	平成6	桃生城跡	第3次発掘調査	政庁地区と外郭線の調査	2,300	22,000
	平成7	桃生城跡	第4次発掘調査	同 上	730	20,000
	平成8	桃生城跡	第5次発掘調査	外郭線の調査	800	17,000
	平成9	桃生城跡	第6次発掘調査	政庁西側官衙の調査	800	17,000
	平成10	桃生城跡	第7次発掘調査	同 上	800	17,000
第6次5カ年計画	平成11	桃生城跡	第8次発掘調査	同 上	1,200	15,300
	平成12	桃生城跡	第9次発掘調査	政庁西側丘陵上の調査	1,400	10,500
	平成13	桃生城跡	第10次発掘調査	同 上	600	11,400
	平成14	亀岡遺跡	第1次発掘調査	遺跡の範囲確認調査	520	6,500
	平成15	亀岡遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	830	6,300
第7次5カ年計画	平成16	木戸窯跡群	第1次発掘調査	A地点西側丘陵の調査	620	6,115
	平成17	木戸窯跡群	第2次発掘調査	B・C地点の調査	300	5,932
	平成18	木戸窯跡群	第3次発掘調査	B・C地点の調査	1,300	4,152
	平成19	六月坂遺跡	発掘調査	横穴墓群の調査	1,000	3,520
		日の出山窯跡群	試掘調査	A地点北側の調査	200	
平成20	日の出山窯跡群	第1次発掘調査	F地点南側の調査	490	3,168	
第8次5カ年計画	平成21	日の出山窯跡群	第2次発掘調査	F地点西側の調査	620	2,994
	平成22	日の出山窯跡群	第3次発掘調査	F地点東側の調査		2,846
	平成23	大吉山瓦窯跡群	予定			
	平成24	城柵官衙発掘調査等	予定			
	平成25	城柵官衙発掘調査等	予定			

## 4) 研究成果刊行物

### ① 宮城県多賀城跡調査研究所年報

『年報1969』(第5・6・7次調査)	昭和45年3月	『年報1990』(第58・59次調査)	平成3年3月
『年報1970』(第7・8・9・10・11次調査)	昭和46年3月	『年報1991』(第60・61次調査)	平成4年3月
『年報1971』(第12・13・14次調査)	昭和47年3月	『年報1992』(第62・63次調査)	平成5年3月
『年報1972』(第15・16・17・18次調査)	昭和48年3月	『年報1993』(第64次調査)	平成6年3月
『年報1973』(第19・20・21・22次調査)	昭和49年3月	『年報1994』(第65次調査、環境整備)	平成7年3月
『年報1974』(第23・24次調査)	昭和50年3月	『年報1995』(第66次調査)	平成8年3月
『年報1975』(第25・26・27次調査、東外郭線南端部)	昭和51年3月	『年報1996』(第67次調査)	平成9年3月
『年報1976』(第28・29次調査)	昭和52年3月	『年報1997』(第68次調査、多賀城碑覆屋解体修理)	平成10年3月
『年報1977』(第30・31次調査)	昭和53年3月	『年報1998』(第69次調査)	平成11年3月
『年報1978』(第32・33次調査、環境整備)	昭和54年3月	『年報1999』(第70次調査)	平成12年3月
『年報1979』(第34・35次調査、環境整備)	昭和55年3月	『年報2000』(第71次調査、環境整備)	平成13年3月
『年報1980』(第36・37次調査)	昭和56年3月	『年報2001』(第72次調査)	平成14年3月
『年報1981』(第38・39・40次調査)	昭和57年3月	『年報2002』(第73次調査)	平成15年3月
『年報1982』(第41・42次調査)	昭和58年3月	『年報2003』(第74・75次調査)	平成16年3月
『年報1983』(第43・44次調査)	昭和59年3月	『年報2004』(第76次調査)	平成17年3月
『年報1984』(第45・46・47次調査、環境整備)	昭和60年3月	『年報2005』(第77次調査)	平成18年3月
『年報1985』(第46・48・49次調査)	昭和61年3月	『年報2006』(第78次調査)	平成19年3月
『年報1986』(第49・50・51次調査)	昭和62年3月	『年報2007』(第79次調査)	平成20年3月
『年報1987』(第50・52・53次調査)	昭和63年3月	『年報2008』(第80次調査)	平成21年3月
『年報1988』(第54・55次調査)	平成1年3月	『年報2009』(第81次調査)	平成22年3月
『年報1989』(第56・57次調査)	平成2年3月		

### ② 多賀城関連遺跡発掘調査報告書

『桃生城跡Ⅰ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第1冊	昭和50年3月	『桃生城跡Ⅲ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第20冊	平成7年3月
『桃生城跡Ⅱ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第2冊	昭和51年3月	『桃生城跡Ⅳ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第21冊	平成8年3月
『伊治城跡Ⅰ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第3冊	昭和53年3月	『桃生城跡Ⅴ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第22冊	平成9年3月
『伊治城跡Ⅱ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第4冊	昭和54年3月	『桃生城跡Ⅵ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第23冊	平成10年3月
『伊治城跡Ⅲ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第5冊	昭和55年3月	『桃生城跡Ⅶ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第24冊	平成11年3月
『名生館遺跡Ⅰ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第6冊	昭和56年3月	『桃生城跡Ⅷ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第25冊	平成12年3月
『名生館遺跡Ⅱ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第7冊	昭和57年3月	『桃生城跡Ⅸ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第26冊	平成13年3月
『名生館遺跡Ⅲ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第8冊	昭和58年3月	『桃生城跡Ⅹ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第27冊	平成14年3月
『名生館遺跡Ⅳ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第9冊	昭和59年3月	『亀岡遺跡Ⅰ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第28冊	平成15年3月
『名生館遺跡Ⅴ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第10冊	昭和60年3月	『亀岡遺跡Ⅱ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第29冊	平成16年3月
『名生館遺跡Ⅵ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第11冊	昭和61年3月	『木戸窯跡群Ⅰ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第30冊	平成17年3月
『東山遺跡Ⅰ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第12冊	昭和62年3月	『木戸窯跡群Ⅱ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第31冊	平成18年3月
『東山遺跡Ⅱ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第13冊	昭和63年3月	『木戸窯跡群Ⅲ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第32冊	平成19年3月
『東山遺跡Ⅲ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第14冊	平成元年3月	『六月坂遺跡ほか』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第33冊	平成20年3月
『東山遺跡Ⅳ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第15冊	平成2年3月		
『東山遺跡Ⅴ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第16冊	平成3年3月	『日の出山窯跡群Ⅰ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第34冊	平成21年3月
『東山遺跡Ⅵ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第17冊	平成4年3月		
『東山遺跡Ⅶ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第18冊	平成5年3月	『日の出山窯跡群Ⅱ』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第35冊	平成22年3月
『下伊場野窯跡』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第19冊	平成6年3月		

### ③ 研究紀要

『研究紀要Ⅰ』	昭和49年3月
『研究紀要Ⅱ』	昭和50年3月
『研究紀要Ⅲ』	昭和51年3月
『研究紀要Ⅳ』	昭和52年3月
『研究紀要Ⅴ』	昭和53年3月
『研究紀要Ⅵ』	昭和54年3月
『研究紀要Ⅶ』	昭和55年3月

### ④ 調査報告書・資料集他

『多賀城と古代日本』	昭和50年3月
『多賀城漆紙文書』	昭和54年3月
『多賀城跡—政庁跡図録編—』	昭和55年3月
『多賀城跡—政庁跡本文編—』	昭和57年3月
『多賀城と古代東北』	昭和60年3月
『多賀城跡—発掘調査の歩み—』	平成15年3月
『多賀城跡—政庁跡補遺編—』	平成22年3月





政庁南西地区 石敷遺構（南から撮影）

---

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2009

## 多賀城跡

平成22年3月26日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所  
多賀城市高崎一丁目22-1  
TEL (022) 368-0102  
FAX (022) 368-0104  
印刷所 陽光社印刷株式会社

---